昭和六年一月起筆

自娯小録

特別
イ4
1919
430

176695

自娯小録

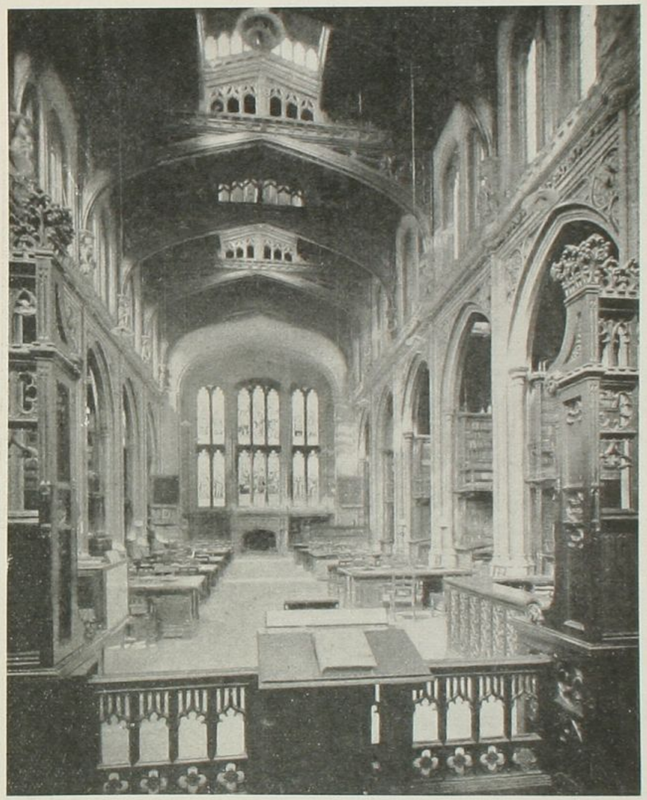
昭和六年第一月起筆

○新年恵海と浴し由来教業ニ半日を費す
教業中得る所のものを要約する如き思
ふものあり、但一二心覚へ為け置くべきこと
ハ、

鶏帖　三冊

えハ鶏の形を実物に就て拓本と
し写ものを内流廿一年九月宣命
をなして石見国安房郡私立女子

ロンドンの軍縮會議饗宴の接待場として
使用されたギルドホール・ライブラリー



38-9216

共通人名に略字形生活の実相を推し
知ることもまた美しくまたあの解説
り所蔵家の参考とすべきものあり一部
解説をもつ可きもの也、才三郎きい
石見以外のみ書を収めたり。北の海者
八松場漁徒と共に又序きい赤海とあ
り何人なりを詳かにせざれど、自分推
原新し助るものと思ふ

言経好太王碑　六冊

余嘗て此の碑の好拓本を所持せしことあ
り然れども此書のあることを初めて知れり

此書は楊守敬に授つて句勒せられ各頁
二字を収め、首部に楊の校勘記を収め
あり、考証甚だ詳かなり、楊の友人なる張
る直拓を得たりまたを底本とし別なり
なる此碑は中国発掘せられて後心な
きこの石上に火を焚き為めに字を滅
しなることの少から和ならんも楊の記に
就て始めて知る所也、文字三の古甚だ
まれなるべきこの書、蓋し我欽定才一の
碑とするも、之れを鄭道昭に比す敢て
過言ならざるを覚ふ

一川路聖謨詠草　一巻

聖謨の幕末の能吏なり、門地低かりしが故に幕閣に立つ階のさらしと長しも先中なるべき手腕を有し居り北人文藻あり北の詠草は同僚の死を悼み居り文章細字数尺に亘る長篇に余の書簡を多く蒐め居る際北人天晴の玉簡を得たしが、所謂赤の詠草を得たん初めも也装潢一巻として珍蔵すし

一　帆足萬里の書簡　一通

模写製

この末二簡低に直る書簡なる由紙術に就ても云ひ文に就ても武に就けて無味なり。

○閑叟容堂春嶽の書簡を合装して一帖とす。これを扨ち未だ未だ閑叟容堂の二簡は共に春嶽公宛なるは溜池と左右し閑叟容堂春嶽公持つる春嶽に宛てたるものなるべし、三人通じて言ふ所を偖んことを求めたる也春嶽の堤正誼に死せんことを求めたる也、堤の書簡は閑叟容堂二公の

書簡を欲して春嶽に需めらるる事、春嶽の劉
愛し給ふこと書中に明かなり、春山嶽い劉愛の
際に公の既に鬼籍に上りなる老ひ別り感慨
こ堪へず、嗚呼此面畏友に上鬼録比二出
今存て一株悲愴に不堪也、時花雁哀鳴
出て燈下瑞芝陳人春山嶽改とあつて朱印
が捺してあるの三通皆短簡なれども離れ難
き関係あり一幅合装する次第也
○ほの直道の俤形容の中に女の顔ばかり描き
込んだ絵面があるが、よく見ると皆な直道さん
ばかりを書いたもの、髪容ばかりさまざまである所を
業して寧ろ書めんとするもの。えの行かと人を尋

横原製

ねるを見ると、えの初代清四郎が書いたものか、いつぞや
清四郎宅を訪ひた際、清四郎の家を訪ひた際
出して示された比女の顔い無数あつた其内のあ
を少しばかり描いて貰ひたく、のぶこんの比の皆貰つて
えんが雲状と助かつたれば描いたことをしたと云ふ
もの比。自分い何人の為めに女の首はかりの俤が
集まつてゐるのかと考へて見ると、こんの門下に比
業をとさせる時の絵手本のやうなものの中に
多くの顔の中から拾ひ出して描写を命じたもの
などの説明を得た比、成る程人間の顔も描くに
面倒な部分い顔と云ふ所が多い、浮世絵家に対
する用意があるなと思つた。

○の頃二年之巡行に当り三枚続の錦絵築地新橋間の
図を得たり。これは南時の最初に出でたるなり、今一寸
獲難いもの也、南時の所割や所名や橋名等も一
々記されたり、英国とオランダ（幕末の頃）の旗も見る
今天もあれど、荷物の不足あり、洋人の馬車を駆るも
や、割烹茶や妓楼等も見る。各国の旗い書き
切れないので、一隅に其の国旗が美しく書かれてゐ
る、家屋は南時出版されし所なれば二枚あり、見
こ引合へしたれば各国の居留地迄も多分あるべし
らう。此の錦絵の下部に外人と日本商人の應
答の詞が書かれてゐる、例のサランパン言葉である
る、重れこの頃の琴平絵の見引をしたとて、書

横原製

いの悪いのと云てゐるのがおかしい。（一月十九日）
○余が近頃数年に渉り反故数を貼りこみたる
アルバム十数冊をもつて、第一は鶏肋雑録と云ふ
一集乃至三集に別り別集数冊あり非年来亦
特集を作り今成る、此集特に注什を貼り込む、
四五古文書もあり、其目左の如し
一上杉日京勝文書
一天満宮正文書
一細川忠興文書
一兵庫二年沽却文書
一蒲田邑谷借用証文
一平田萬助進学金積金仕法

一 佐渡採金図
一 築地鉄砲洲長谷地錦絵 三枚
一 春嶽公書簡
一 菅春台文稿
一 狩野家絵巻断片
一 釋元政漢文書簡
一 壺井義知奥之
一 名代所法記
一 契情新新所
一 大通通寶
○前巻寶政年十二に橋を就て稿を書いたが今又
更始の目的の橋に付て書き添る。

榛原製

所位を連絡することが野蛮の種族の生活の基礎
であつたことは云ふまでもない。彼等は粗末船を作つ
たり猫木橋を架したりして渡る。詳しくは文化
人が悪係するやうな宮殿の業がいろいろ。一切又橋
を知らずに種族まちまちで、船を作り得ないは勿論、猫
木橋を架することも知らない。即蔓の枝を絡り合せることも
あつたらしい業であつたが、此から自然の種族の海の法
は泳ぐか無つたとさく云ふことである。
猫木橋を架する所は海の法
多分猫木橋を架する所は海の法
る木が渓流の上を跨いで作れたのを渡る方便としたか
ら始まつたことであらう。又蔓が渓谷の一方
から前渡の蔓と絡り合つてゆくことの為

を托して猛獣などの寄ち難い個つて夢から夢へと渡つて行くこともあつたであらう。此の蔦蔓も一本よりも二本三本の方が丈夫である一本よりも二本三つ寄つた方が氣丈夫であるから、成るべく沢山あらう。赤手を托まるものもなく或る夢が身を托せる浮ちやすい側もあれば、更らに氣丈夫な感じもしめれば赤手を托まるも、橋に欄干が必らずしも此の原始的の橋が活かされて居ると考へることは決して附會の說といふ言はれまい。人間の祖先と異つて見輕るべからざる輕捷を欲くまでもなく、高い所から低い所の深淵や溪谷を下瞰すると眩暈を催し畏怖する念があるに恐らく野蛮の祖先も同様の事があつたであらう。

複原製

迫まる。之れの祖先は橋を渡る欄干が設けられることが考へられるが、こんな到る所に人が吹き晒されることを禁ぐるとともに異変であるけれども、自らんがなければ、河橋者に不安の感ずるからでもある。別して細い橋や揺んる橋などでは欄干が設けんば人は不安で羅えん臆氣の人などは河の中央時代でも作橋とすると、此等の人に對し、えを除く法がいろ〳〵工夫されてある。蔓や樹の枝などが手摺りが作られたものが多く、橋の動揺を防ぐ為め蔓で橋身をかえて附近の樹木に結びつけたり、橋下に樹木材で支柱を必つたり、工風い枝をでもあるが、なほ粗笨な上のものである。保し今の之れの四の字型橋建築技術が劣

複原製

して行つてみることを以て側おそろしく工風してみることも無いでもない。橋を堅牢にすることや、急流の上あこ橋をすることや、浮橋を有こ石あるようしめることや、すべて必要が教へて原始的工風さえあらわる。敵を倒くるけん橋の或る部分を元取り得るまでは、矢張り必要が生んだ風と謂はざるを得ぬ。

可なり原始的工風さえ橋の中に、浮河橋が橋こ装置せる吊橋の発達の間こ座を占め、その吊橋が木鋼に附着してみて、重力と砌鋼の関係から滑走の出来ることもある。こんハカミこヤの長い急流に架せんに、吊橋こあるのだ。こゝに

榛原製

吊橋とあるが、原始時代の獣皮を蔓田根用ひた索が式ヶ不ヶあるが、堅牢を期したもの工風ひあることい申もらるへ。原始的架橋の傑作と云ハんとあるのハ、上可動と側動を全然無くした藤橋で、セレベスのサロ、マニオンとある橋ハ、こんハ丈夫な藤を以て長円形のようを作り、こんを一千橋及び歩橋の股と結びつけ、上端部ハ頑丈な籐蔓ひ綯つた木綱があつて、美ヶ歩道と手摺が剥いた竹藤ひ綯つた丈夫な綱で結びつけもあるのひ、こんハの上下動も側首(道)もないのひ、原始時代の工風としてハ珍とすべきひである。

○漸やく千點に達せんとする余の小品のコレクション

ミ就て時折新著ニ接したる来れども、数年毎ニ今と海つてゐるが、適意のものが甚だ少なく、此年の十二月から本年にかけて偉々二十数点手に入れた中より、録するに足るものゝみを示すと、本年の干支に因む人で羊が手に入つた、これハ土器で、宋窯の明器である。が、粗製であるが特徴がある。今者のコレクションの中に象牙細工が或んど無い、実に牙の細工ものゝ多く必ずで欲しいものだが、漸やく俗を脱した二点を得た。一ハ蝦蟇仙人で仙人が蟇を弄してゐる拳大のものである、時代のものが少く出来もする、他の一ハ剛子入りの仏像で懐中守であるが、剛子も仏像も丸彫りで、仏を囲んで多くの羅漢が彫つてある。二枚折屏風のごとく裏面も同様の出来るやうなものであり、外面ハ宋数画が彫刻してある、これも時代ハ古いが極めて精巧で仏像も立錐である。形高七二個手に共ニ唐物で一ハ三彩の獅子で他ハ深付の千鳥で双方共形が平凡でまた高ニ越がある。根付ハ精巧ハ少なきものが、自然ハ紅通しの穴などあつても根付らしく見へるものが既ニ架中ニあるこの時根付らしく見へるものを選んで入れてある。北京得たのハ金属物が敗者を鑄刻したものが、蓮の実がヒナビとしてくるれん、流土ニ安した越をあらハすものもまいくつぶろが附着してゐる、茎や葉が點綴されてゐる。

ことゞは宮や果体こゝろがある所喜こゝろ通つてゐる美
が金属製品から決して凡俗でない時代も北南の
あるこんな品は俗衆の素いんきょが、自分は之れ
を珍とする。瑞西の木彫品は盤中にいくつもあ
るが、北欧亦こんまり獲にくらしい形の人物二疋を
得た、面白味がある。較き形の大きな船を
得たが、こんは船の立米過に似がある。昨年岩山
こゝ海人が時河畔の美底と土地の名物があつた
中に、岩山の桜の樹の皮つきの修をを一面削
り美こゝのの刀を加く彩色をした小督と仲
時を心つたものが出た。これ田みがあり、ある藝術家
が偉うこの二基は月必ずこゝにかゝられるものゞ

横原製

美のが氣の入つて盤中の置いたもある。紙中の福寿
ゞ心の孔蝶波人形とゝかが北欧坊河を表つてある。
其中に雪国の風俗を年が蓑帽子を着けて
ゐるのが一寸面白いのを手に入れた。越海や茅根
細工を貴土地でいろく海つたが新らしい工風のも
がいつも見あきない、今度熱海で偉かれ新奇な
の二疋を得た。美い例の智恵の輪を即ち京
七巧式の木片を組み合はせたものが、軍艦と鶏
がうまく出来たのが孔から手を入れた。北前の茅根
で同じ式の折鶴を獲たが鶴い美こ義べつと。
立優つたものゝ。仏細工小品ゞ彩色を施したり桃太
郎と[illegible]五六の従二十出征の玩具、カチく山なゞ

八坂の市中に売つもるゆるぎ玲瓏くるくるかの
花七絃中のあしもとゴムで猫楽の形を心
り花をうつばしいしのやう、日本の物質に形
どつと婦人の笠、手で裸体の女を心り花をさす
キン揚子と名付けたるやら、北京流行の外四季
の婦人指輪 ラウキ、リングなど皆笑資と
為すべし。

○村山秋浦山陽の梅花七絃一帳を京にし
来り題画を作ふ乃ち題に応ず 酒い酒三
十七翼の時東郭の僧庵を訪ひて
う四首の一つ、 洗硯 自也 君復
八時香溶動月黄昏の梅の影を心り出る朱和詩

樣原製

秋揚参様頻爽然 此将茗椀換
能紅氷心一の恨 抜却如晩砌紫叢
中過千年

咏梅 子成

雖復養年久 北詩如咏梅印
叙年今為之 子成也

○村山秋浦らと神田春平四義及故中らと出
とて曲亭馬琴が殿村翼軒の八犬士孫歌を
書き付る一枚の細書を示さる、書い馬琴の筆書
きと云へくつや氣あり、八犬伝の巻首巻尾の
載もあるやなや、嘗つて氣附かず、こゝに寄
て他日驚めんと欲す

一月朱一の記

心ハ乃屋のかれまろおぢが八犬伝をめで
まろこゝにてゝ文ゝ八うさ
あをやゝの花のかもとゝおひこてゝこゝろを
雲を志乃ゝを志ゝ武
行ゝうゝてかゝるもつるとしこゝろのめくみも
かくす犬川の波
志ゝやこの屋しるゝとゝいぬかひのあるゝゝ
おやゝの似さうけ志蜂
もゆる火の中ゝのゝんゝ大山をさゝくつる
心ゝうゝしゝや
きえぬへき露の志ゝ玉赤も千ゝとゝゝ
もていぬえゝ志ぬゝしゝる

横原制

かゝるゝ犬田のくゝろのゝきゝ草ゝ志ゝ
くちなるのゝくにゝうゝ卵
おれゝ川のかゝの色ゝうゝを文卵屋し
あゝをもつくす花のひゝくき
いぬあゝのかき板のくす茅ゝうゝ文をゝ
ゝへゝゝる露のゝやゝんゝしき

蟹麻呂表、伊勢松阪人、殿村常久一称也、
別雅号、善研、光園号、而所著不尠
矣、是以其著宇道保物経年立千種根
左志各一巻有之、皆刻于家、然性淡泊
而不拘於名利間、是故其書雖刻成而

自邪知音之友、未嘗無清人、嗚呼可惜焉、惜ノ誤カ

文政十三年庚寅秋七月十二日病歿、享年五十二、是歌易實之前月所詠云、因附錄河端精餘

蓑笠漁隱再稿

○田中先輩伯はことし八十九歳の高齢なれども尚壮健なれば来年の九十まで人並の年賀をやるとぞ云へり。伯は本居の古いと親しく、常に出して人に示さんと、見るに堪へぬ山無去時」の五字が傳書してある。伯は古山と雅号したるに、此頃は先から伯日の寿をくる如きを祝して

人のことき、こゝに、宣長に、お詫ひのことばある。伯の書たひも要約し、こゝにあるのみ

○偶ま清天春雄基石伝家寶中の瑞瑞を後又今人の評を物して、物語後に、書に、青柳の評を得さるも、日本人の言ひ得さるものあり、文章明人の流石に、神の評を美化し、哲化するのあり、日本の都を遠ても言ひ得ることを左も言らしく言ひあらハす、そこに漢語のあるか、手書漢文表言を受けるとの捨のんおるかた

2二三を物す

一二夫淡白便為造化

一天戒多言養音是、古雄淡即是養吾

一離合之好易解而恩理之難治、
一快意雄談、煩悩日時不絶、
一飽諸世事、一任霞而翠嶺、浩懷消期、
一孝弟忠信礼義廉恥是撑天八極大根大
柱、
一天理路上行走、書道偶是福星、機謀博内
安身、撞出壹片離敵、
一任憑翻知覆物世事、交二面、説一番人情、
一無心中得罪、鬼神難逃、代消除
一世事譲三分、天宝地間、
一能改過則天地不怒、能安分則鬼神無權
漢語二書はは壮重の仮面あるも金言九を持ち

えん言味の日本の中御子がいくらもあれども、人
情の動機に觸れることを同じ人間が解せざる
ものは義いなく、
○元禄十年、両行法河の号る年忠臣伊人大江三
千風が鴨主淳の接面を自ら乞して江戸の富士市
郎兵衛に紹介せしに、主淳が今弥本とも成る人
に就て義さんとのことを、主の美次郎が鴨主
淳に到義を申す縁因から、今度複雑
して二百部を作り一部を宮のもとへ献上の
の願候に云く
思し年鴨主淳と再会して待ちし事自ら
と思ひ立し所の時こそなり也きさら

きの此の日西行上人五百年忌に相当りし
因縁の悦身に感ず。今又此話章句
拙子ともに思慮を傾し作る元来白人の正さ
を以て拙を補ふ。入魂〳〵なるを於
一生に此浮の参考とし辻田島集
七南年中ハうけとり侍る。御此又入集
の御方の左の板市屋方ら)の傳くなるま
ゝ

此度追善蓋仙「出千や五百年目のきぬ」さうた
追加「美堂やまとさらきの」永ちの

御治大矢数東往五三千八

樣原製

元禄十丁丑歳始

江戸通油町

京屋市郎兵衛開板

の近来図書をやつを弥千を入れ、往々
反故を買ひ入つてくる。反故の集書ハ
谷の文行堂で自分の書ハ
つけもあるが、其実自分も紙屑屋と名を
種類しさまくあるが、此ハ舊幕時代の種々
の形式の文目書を蒐めて、ある、決して弥くい
もの紙屑といふへが、今集めも置かの標本が絶
へるから、それを惜んでの仕業なるき。例へハ身分

まるものが苦し紛行するまでハ先願を見ル、こんな
ど七実物が無んハ後ハいどんなこまるかり難くなる
関所を通ル迄まるまハ迄まる鑑札を要しル其の鑑
札の様、武州実物に就て説明することが便利ひ
る、正公務変更の届出ルの、宗門改め状ルの、鷹が
将軍に飼養されル頃、其の飼料として魚菜や雁
などを村に課して徴発シル見の書類や、鷹屋敷
種々の禁制がある中、其の附属のこのハ北の禁制に
従い拘ばるるるル、其に就ての請書ルの、大名
が領内の富豪に金を借りル証文ルの。百姓の反故
ハ当時の事情をあるのまるル得るので実の集め
ル見ハ興味の無い譯ひ世まるいの訪る蒐集を

思い立つれのハ〇つひ北頃ひまぐ多く手を入つてゐる
いが、要るまるを列挙すんハ左の如くである

一先願　二通

一関所鑑札　数通

一関所破棄令　証文

一宗根関所文書　複数数る

一鷹の餌徴発　村々掟帳

一鷹師の禁制に対する請書

一宗門改状

一仏徒を神徒に転ずる届書

一正業に関する届出　数通

一旧大名の借用証文

一旧領狂歌契約証文　八通

一 田舟の出入の儀西文
一 任由之儀公儀御不審之筋ニ付鎖国之
一 破川ニ新たの記西文 [illegible]
一 長崎外国船検察文書 数冊
一 江戸四名至高氏古文書 鈴勒数通
一 出船届書
一 御都ニ典て以急状
一 田畑法印状 [illegible] 古文書
一 貸付銀取扱人 改め状
一 平田萬助進言覚書
一 国家憲法論 献彩色 并指令
一 衆議完議多尚進状

複原製本

一 加賀藩新令書
一 明治寺文書 数通
一 麦藁宗寺の [illegible] 金を巻り [illegible] 書類
一 官本協和紙献品目録
一 [illegible] 文書 南北朝時代
一 早大所古文書 影本一巻
一 [illegible] 藩の記
一 宮内省方本恒例指令
一 [illegible] 平村宗門改帳 [illegible] 二年
一 下馬下乗札口侍
一 天平文書 複製本数通
一 麦藁三浦 [illegible] 西西廻日記
福沢諭吉 [illegible] 代り [illegible] 元治 [illegible] 文

一 弘仁十一年近江国田券
一 仁寿四年近江国大国々田券
一 貞観三年近江大国々田券
一 土井大隅守充（今如国所改立者）
一 備後国上申書 寺文書
一 昭和七年陰陽頭御魂注日時撰申状
一 宮内省文書掌宮御婚儀奉祝状
一 公方吉書始案 写
一 公方秘伝定（若原姓）めを元亨年中行事（四鶴仲）
一 幕末落首 写（数点）
等の多く鶴岡雑記中に収められ（尚）
他にもあるべきか記憶に存せざるまゝ又を掲げ置く

○村山秋浦（号）頼山陽陳元素の書を送し
て一幅を示さる、題首「有樹偏天数千
尺」云々の長篇なり亦立派なる折本にて
清物と称し客の日々金の紙を臨書とあ
り、金粉を施し紙もまた墨つきよろ
しかるべし山陽自身も不満を感じ渋沢に
左の如く物せり、

長夏日永花盛りの人陳元素書伝四七
紙就試論之殊美史乎加歩酬拙大業

陳元素の無聊清史に
安古白長洲人以文学知名於時書法

複原製

清盛、数次陽平更、宮墨女来、有楚歌清

答之段

○此頃高家の新年宴あり、招かれし故人共
山岳道士の博士の話が出た所、日こんらん、なく
なることのうへ一盃遂ることを少きみた。ある時古山
博士のある患者の病原に就て真鍮溶出と
爭へた、古山の飽迄も曲癖説を主張するの
に真鍮の飲ならずと主張し、果ハかケをすること
ちょうとうとかい、日かケ、ハ飲ること食物す
のまへ一口天を催したに、そんな新よ茶を買けれ
ばかりおごかと云約束でありし所、飲る事古山
の方が悪者なりとの事にて、世後ト思ふ。

標原製

なる此から、解説して見ると、果して古山の主
張通り曹癖と者ある、そこで真鍮
に初めを屈して約束ひ飲るかくと云ふ、古山の約
束通り三十日間毎日の新子用井を供したと云ふこ
とだ。

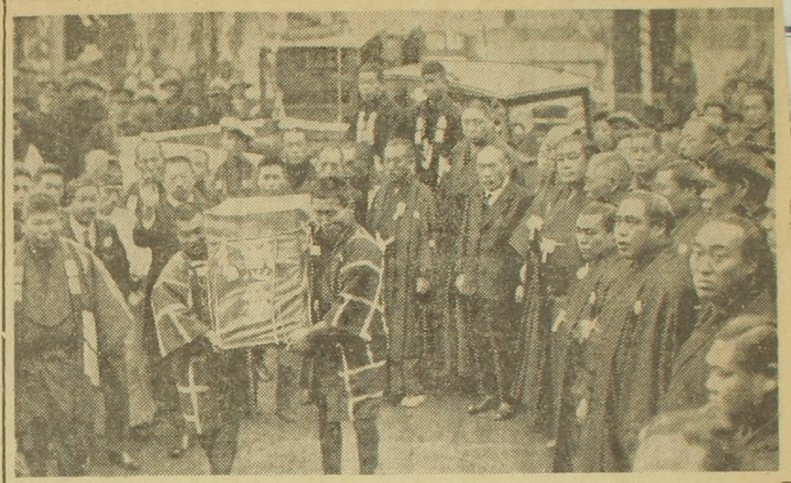
○ある雑誌の報告にカウト代りにコンナ けし
からん歌が出てゐた。

りんのたま　三下り

あきびとの、これをめせてふ　ことのはに、つい手にふれし、
みればやさしやふたつ三つ　いとしほらしきれもあれど、は
じめはそれといはでたゞ、れやのむつごとそのたびごとに、
まもればつまはきがよや。あゝきみがよや。それいくよ。あ
れまたいくよ。いくよまで。つきぬたのしさいかでとや。と
へばまことをあしつゝ。さてはさまたのたはむれを。かされ
くて、うつつなき。ふたりがなかのまるかれと。なをもみ
がかんりんのたま。

琴曲　まつのこゑ

第一萬六千七十號 C （第三種郵便物認可）



百二十六年目に『め組の喧嘩』仲直り

例の半鐘を國技館へ持込み 目出たく手打ち式

歌舞伎の富り狂言「神明恵和合取組」――文化二年のめ組と力士の大喧嘩の手打式が百二十六年後の一九三一年の春、二十六日に兩國國技館でやつと目出度く済んだ。この朝、今は帝都の第一消防組となつためめ組では當時の辰五郎親分に代つて平田組頭以下

威勢 のいゝ兄イ連がざつと百名、いきな半天姿で八時頃から芝の神明様の境内に集まつてたき火を圍んで大はしやぎ。

すつかり頃數がそろふと「半鐘供養、相撲大會」と大書した布を卷き、青竹にしめなはを張つたトラック三台が鳥居前にづらりと並ぶ。

十時半、喧嘩の罪をなすりつけられて箱の中に押し込められてゐた例の半鐘が神明様から持ちだされ、紫の布に包まれてトラックに乗せられる、するとモーニングとフロックコートの仲介役「焚出しの喜三郎」が

敷名 出て來て「さあて出發！」と號令をかける、木遣り音頭が爽快する、いよいよ出發だ。

何しろスピード時代とあつて一行はトラックと圓タク現方格も圓タクをひろつて銀座ッ子や交通巡査がぶつたまげてゐる中を威勢よく兩國へ――

國技館では年寄、三役以上の關取がすつかりお化粧して五つ紋で迎へてゐる、そこへ半鐘がトラックから降ろされて會場へ――そして二階正面の式場に飾られると、右と左にめ組と力士が並んで「さあ目出たく納めやせう」と大小の手がシヤン、シヤン、シヤン響いて力士側を代表して出羽ノ海が「今は四ッ車大八關は死んだのあの時の出人を知つてるのは、うやむやのうちに罪をなすりつけられてしまつたこの半鐘はかりで……」

代表 するとめ組を

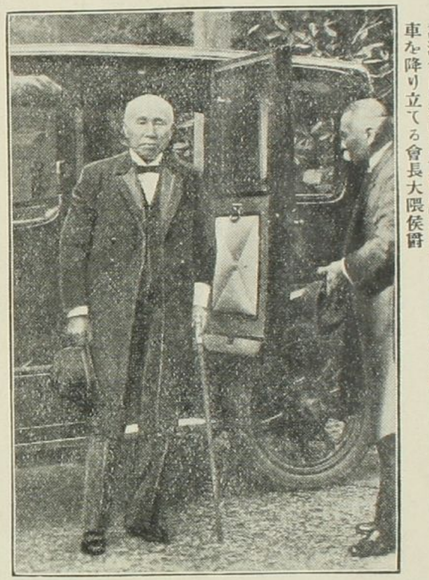
して田中義啓さんが「目出たう」

「百廿六年目に手打式は全くお目出たう」

と互にあいさつが交されて十一時半正式に仲直りが済む、終つてからは半鐘を壇上に相撲見物、地下の辰五郎親分も、四ッ車大八、九龍山波右衛門兩關取も、仲裁したら喜三郎ドンもこれでホッと安心したらう【寫眞は今朝力士連に迎へられ國技館に着いた裏會の半鐘】

○北一日に入り格と就て聊か興味を感じいろ〳〵出いて
ゐるが、文の場合の二エーズし余の随筆を書き
ないと云ふから、其意に任かせて「格の漫語」を
三時間筆録のもつめた。偖て大正十年六月の
文の場合海浜集に、ウオール街士の格の境
があるのを見出したから、参考のためとこゝに保
存しておく。

自働車を降りて



五月十五日神田一ツ橋商科大學に於ける本協會主催の海外事情講演會に『新勢力平衡論』を提げ今しも會場に臨まんとして自働車を降り立てる會長大隈侯爵

許りで何程の事がないかも分らない。大正維新と呼んで國民が待ちもうけて居ても存外古い結果より見られないかも知れないと思はれる。グラッド ストーンは、保守から出でて年を取るほど自由に向つた人である。呆けた老碌したと云ふ聲高い中に八十六歳で大臣として、アイルランド自治の爲自治案を提けて、反對を覺悟して立つたのであつた。大隈侯は八十四歳で何時でも起つと云ふ氣がある。併し此反對を覺悟してまで起つ氣力があるだらうか。斯う云ふとそんな目先の利かぬ眞似はしないと云ふかも知れぬ、目先が見えぬと云へば見えぬが、因循姑息にならないで晩年愈愈自由に働いたのはグラッド ストーンである。大隈は大命を待つて直ちに、覺悟はある、それで何を爲さると云ふと一寸困る。グラッド ストーンは老けて老けず、前の内閣のやらぬ事を、反對を顧みず行つて居る。

以前は「戀のビスマークと伊藤公」など、並べたものだがこれは滑稽な意味だつた。併し大隈とグラッド ストーンと云ふとそれと違て比較の當を得たものである。數多擧げた共通點と相異點、足らぬ處も隨分ありましたが、皆さんで御考へあつたらどうか足して下さるやうに。（岡生）

文明の標準として見たる橋梁

左はウォール博士の古代種族間に使用されし各種橋梁の研究にして、極めて概括的のものではあるが、これに依つて文明と橋梁との興味ある關係の一班を見ることが出來る。

如何なる人種を問はず、最も正しい文明の一標準は、その人種の交通手段に依つて知ることが出來、亦此の事實は文化の度の高い國民と、野蠻種族の水陸兩方面の場合にも移し云ふ事が出來る。乍併、極て原始的退歩的の土民が、河海の極めて難澁なる障碍に面當しながらも、大地上の廣大なる地邊迄も生存するに反して、多衆團の人種は極く單純な渡水法を發見し發明する十分の天分をも持たぬ爲め、殆んど絶望の姿を止めた。此の種の人種中には、多くのオーストラリア系種族並びに少數ながらも亞弗利加種族及び東部アンデス山脈中に居住する南部亞米利加印度人の或る部落の如きを含む。此等土民の間には橋及び舟筏の助けがなかつた爲め、余儀なく游泳術に達練してこれに代用せざるを得なかつた。

工藝上人種誌上の論地より見て、架橋術は遙かに造船より難問題であるので、古代に於ける造橋法を討究するは興

味ある問題である。初期の橋は、勿論、河流に倒れ掛つた木であり、又嚴丈な蔓即ち河上に横はる葛であつた。斯の種原始的の橋は應々見出すことが出來た。人間は是非なく獸類に逃走の術を學び、これに依り敵より回避する手段とした。乍併、搖り蔓の場合には野蠻人は、これを足に依つて渡るべきか亦手に依つて渡るべきかを決定すべき必要上問題は二重になる。玆に、吾々は人間が繩に持れ掛る際有する固定約合の問題を生ずるので、これをば人間は樹幹及び猿の如き動物に習つた。一歩進んで約合の不定の場合を見るに、これは習得困難で恐らく人類は自然的教訓を見出さなかつたに相違ない。極く好都合の場合或は全く偶發的に一本の葛の上に他の葛が斜向に掛つて居る時には、下方の肱量のする樣な葛道を自然生の手摺或は欄干と云ふ考渡つたものらしい。此の種自然生の手摺が欄干に身を支へてへが緊要なる想付きであるので、今日何れの搖り橋にも斯る支柱物を採用し居ることが之を實證して居る。一方、發明進歩の意外の困難は、此等搖り橋は工藝史上に、倒れ木橋より以後に現れしものに相違なかつたと云ふことを示しあるので、亦斯る搖り橋は極めて稀れで、特に密生せる原生の樹幹が平滑なる場合、亦碍障となる小枝の無い時には直ぐ樣これを橋として利用したものであるが、反對の場合には、原始野蠻人は進んで何等かの方法を講じて邪魔な枝や小枝を除かなければならなかつた。暴風や洪水等の爲め偶然に倒れた木を利用すると云ふことより一歩進んで、亦思の儘の方面に丁度適度な樹材を伐り倒すことは勿論容易なことではなかつた。吾々は長い間の經驗を無視して、これと同樣な仕事をする爲めには如何なる方面にまれ長い細引きと鑿とを利用し樹幹を運搬することも出來、亦鋭利なる斧と鋸とを以て目的を達成することも出來るので、過去時代に架橋上如何に熟練なる判斷力を必要としたものであるかは到底現時の吾々の想像を許さない。

けれども斯る一本の桁或は樹幹を用ひた橋が、その橋の長さの爲めに墜下せぬかどうか、直徑が不充分ではなからうか、第一に木材を彼岸に架し得る丈けの長さがあるか否かを決定するには、極めて機敏なる判斷力を必要としたのである。第一の場合には、支柱若しくは輒を用ひて梁の支持力を增し、次の場合には、一本乃至以上の梁を增して、その合力作用に依つて橋の强度を加增する必要があつた。

林に限られて居る。只だ一除外例は現在タラビテスと稱する革緒を利用せる吊り橋に見られ、南亞米利加のコーヂレラ山脈中にある。けれどもその發明は同一の原理に基いて居るのである。

樹幹を利用する古代の橋は、殆んど現在までも木橋の形式を採つて絶えず進歩して來て居る、けれども最初の鐵橋は、一七七三年より一七七九年に渡つてコールブルックデールに建造されたもので、獨逸最古の鐵橋は一七九四年迄には見られなかつた。

工藝學的に云へば、木橋は構桁橋、檀脚橋、懸橋の三種に分類することが出來る。後者は純然たる垂直支柱即ちA字形の架構を基礎として居る。檀脚橋にあつては歩道或は車道は單に垂直支柱のみならず、尙ほ相作用をなす傾斜支柱式に依つて支へられて居る。最後に懸橋の場合は、通路は極く檀脚橋に酷似した傾斜進路及び桁構を備へて居る。

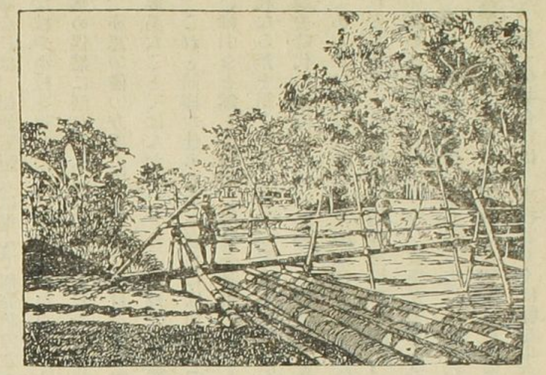
且つ吾々は、原始的形式の最も進歩せるものとしては、極めて著しい例證として指示し得る弓形梁橋を上げることが出來る。

既說せる如く、舊式の構桁橋は水流へと倒れ掛つた木で此の點に關しては、戰前數年間に渡りニュー・ギニア島の內部地方カイザーリン・オーガスタ川或はゼピックを踏査せる探險家の手に依り種々の最も驚く可き諸發見がなされた。從來の探險家は主として海岸地區に止まつた爲め、內部地方の土民に對する知識は殆んど皆無であつた。そこで探檢家は紆曲せる河川に沿ふて多數の村落を見出し、然かも建築上樣式上より見て、到底獨逸村落の家屋と似も付かぬ部落を見、何れも喫驚したことであつた。特に莊重を極めてゐるのは儀式建築で、破風構への屋根は高さ十五米突乃至それ以上、長さ三十米突程で、それが嚴然と地を威壓して居る。結構は彩色美々しく裝飾され、人種誌上よりも非常に意味深く、その家財目錄中には凡ゆる優雅な形に刻まれた下垂形の腕木や鉤があり、それには雜多な器材及び家族の調度が懸つて居る。大きな切り口型の合圖大鼓、漏刻狀の低音樂器、華麗に彩色されし木作の彫刻に動物界の不可思議なる姿態を現せるもの、贅を盡して刻める純白色の楯、何れも目を驚かすもの、みである。

乍併、こゝにはゼピック內部のチンバンク大村落の橋の挿圖を掲げるに止める、橋の建築は吾々の眼には極めて簡

素なものと映ずる。けれども、教育程度の低いセピック人種を考慮するならば、最も傑出せる工藝品なりとすること

第一圖



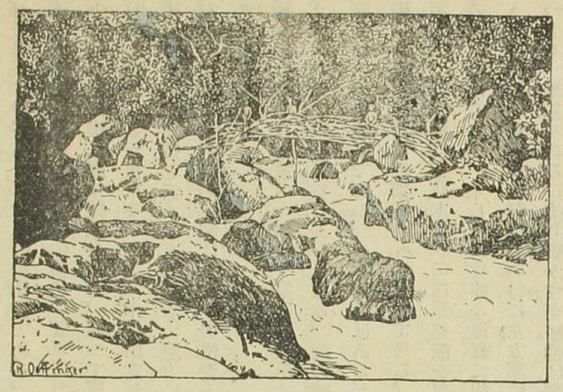
ニユー、ギニア、チバンクン村落に於ける
カイセリン、オーガスタ河の橋梁

爲めに著しく兩岸の平原に汎濫を起す如く、セピックも此の範に列すべきものであるからである。若し斯る汎濫の勃發する際には、極めて急激であつて、架橋者は此の不祥事をも是非なく豫考せねばならなかつた。斯うした事實は、本圖中水流に對する仕組みや輒の高さからも受け取ることが出來る。ニユー・ギニアに於ては、車道は勿論であるが歩道と云ふ觀念も十分でない。けれども吾々は、橋の前面に積み上げた梁材の代りに、順序ある排置物を想像してこれを自家に應用することが出來た。セピック探險の官遣技師ルッシュ教授の暗示せる如く、土民は多衆の外來浸入者を警戒する必要上、部分的に橋の上構部を除去し得る樣にし、彼岸より此岸への通路を極めて困難ならしめ樣としたものらしい。圖中に示す如く、橋の殘部は二本の梁を用ひて末端は自由に動く樣に出來て居る。斯く架橋されし河がセピック河及びチンバンク内部地域の大逆水沼地の間に交通運河を形作つて居る。

第二圖は同英領ニューギニア島東部に於ける橋の圖である。土民の外形より見るも、亦村落より見るも、勿論極めて原始民に相違ない。アヂュアラ川の急流に架した橋は、

が出來る。此は建築者の文化の度とは全く交渉がない、と云ふのは、低地方の多くの河川の河床が周圍の地より高く

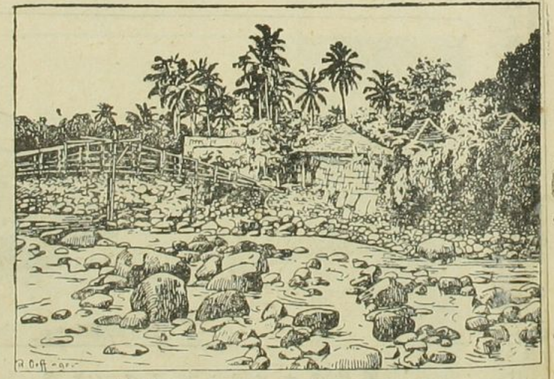
第二圖



英領ニユー、ギニア、アヂュラ川に架せる古代橋

究すると、橋の中心梁材を何れも河堤より互ひに斜形狀に排置し、その交切點を叉木で結び合せた立派な桁構の仕組なることが解る。尚ほその結構を頑丈ならしむる必要上、柱付きの手摺を用ひ、これより河床の岩窟へと長い支柱を射出せしめてある。一般原始民の橋の設計通り、鉤や螺旋を用ひないが、分離部は何れも樹木の纖維で作つた繩や綱を以て結束してある。マレー人の間にすら此の結束法が應用されて居る。

第三圖



ヤヤヴ、アイテンルゲのの竹橋

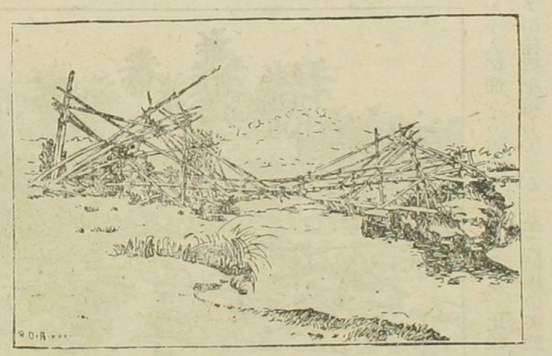
第三圖は前述のマレー人の間から取つたものである。比較的文明地のヂアヴァの徒橋を示して居る。全て結構の美態を示した純然たるマレー式のものである。歩道は、橋の中央部に於て組み合せた梁材へ丁度等距離に結び付けた曲狀の籐に吊り上げ

られて居るので、吊り床付きの桁構橋である。圖中左方部は梁材が著しく並行して科學的構造の要求に背馳するが、右方部は歩橋同樣に拋物線狀をなし、隨つて所要通り立派に目的に副ふことが出來る。勿論河床に固定せしめた支柱は橋そのもの、支持と云ふよりは風水の壓力に持ち堪へる役割をして居る。各部の連結はマレーの慣習として籐等の剝き皮を以てする。

極く思ひ切つた構造の一例は、第四圖に示す在セレベス島ランテバオの橋に見ることが出來る。此の橋は實に近世の鋼鐵肱木橋の先驅である。一方面ではあるが、斯の種肱木橋の必須條件たる碇繫所さへも備へて居る。一對の柱を代用して、或る程度迄肱木組みの內部特徵を現して居る。此の吊り掛け式は、一見した所竹棒を亂雜に組み上げたもの、樣である。實際或る種のもの特に左方部は蛇足であるけれども、歩道を巧みに搖り動かす全結構は意味あるもので工藝上の好參考である。

橋の他の原始的要素、卽ち河上に懸け渡されし蔓は、搖り綱を人が手で渡るか足で渡るかに依つて二重の進歩を閲

第四圖



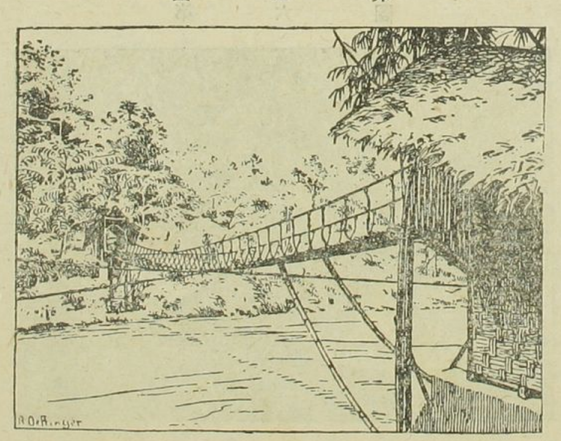
在セレベス、ランテバオの竹橋

第一形式に於ては、その進化は常道の形を採つたので、此の進歩の場面及び應用區域は興味ある問題ではあるが此處に於ては省く。他の基礎原理は、その進歩に連れて怖ろしく多樣な形式と、屢々尨大な廣さとを有する近世の懸橋となり、實に文明

最單純なる繩橋の形式は足索で、これに手摺或は欄干の代用となる綱を斜に渡してある。極く太古のものが現存せりとは思はれぬが、此の原始形のものは、一九〇七年四月Technischen Rundschau に現れた興味ある挿畫で、これは一九〇八年ライプチッヒに於て出版されしヂーテレッシ氏著『ザ・インヴェンシアン・オブ・ザ・ワイアー・ロープ・ロード』中に揭げてある。これは、カシミアの廣い急激なる山溪の絕壁間に渡された、昔ながらの索道及び尙ほ以上古い綱橋の兩者に似通つて居る。常道は厚さ約三サンチメートルの生牛皮の綱である。通行者は二本の吊革の間に座を占め、これがフォーク型の木鉤に附着して居るので、繩に沿ふてそれを滑走せしむる仕組になつて居る。滑走運動は支へ綱の傾度の許す限り、單に重力の働きに依り、それ以上の所には輕い索綱がありこれを支へ綱の下方の有動鐶に着け、それに依つて走るのである。

索橋は如何にも不可思議な方法で操作される。構造は幾本かの大麻絲の綱を絢ひ合せた厚さ約一六サチンメートルの手摺綱と、一米突半離れた下方部に斜向に渡された足索

第五圖



ザアヴア、チバンダツク川の懸橋

は西部亞弗利加の內地及びニュー・ギニア其他に發見される。二重手摺は單に通行者の墜落を防止するのみならず、

人の工藝史上に緊要不可缺の境地を創つた。けれども斯るから出來た手摺綱と足索とは垂直狀の鎖で繼ひ付けてある。近世一般の懸橋は兩側に手摺を有して居る。此の一種の橋

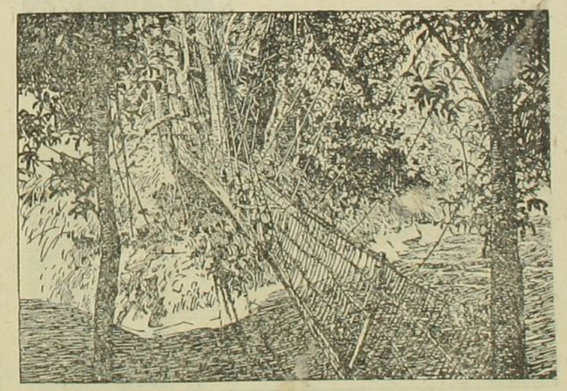
同時に上壓と側面風壓に對する橋の强度を著しく增進せしめる。凡ての點より、斯る橋を渡る不快さ、時にはその不氣味さは綱の側動に原因する。斯る懸念ならしむる爲めに、大抵索橋には側動の防止方法を準備してある。ライプチッヒ博物館の原始民の工藝を代表する蒐集帖には、斯の種の橋の多數の寫眞を集めてある。けれどもその內に、足索の側動に改善を加へてあるものは比較的に尠ない。

側動を防ぐためのな最も完備せる方法は、手摺から橋の上下の流岸の嚴丈な地點へ數ヶ所控へ綱を張ることである。

第五圖に示す特種の搖り橋は、ヂャヴァの大河ヂバダックに架せるもので、河岸の橋臺上の二對の棒竹は、單に步橋を强むる手段に過ぎぬが、一方左右へ張つた立派な綱は側動防止に備へたものである。他方第六圖は、在セレベスのランテ・マナックの籐橋で、橋を强め且つ側動を減殺する爲めに手摺より河堤に繁生する木へと斜上向に多數の葛が控へてある。丁度上方の張間の中央部にある奇妙なアーチは、葛或は張綱を支へる爲めに用ひられるものと見ることが出來る。

第七圖に於て吾々は工藝的架橋の傑作を見ることが出來る、これ亦セレベスのサロ・マニオの籐橋である。全然側索は無いが、その代り丈夫な長圓形の籐を用ひ、これを一一手摺及び步橋の股に結び付け、大軸線の上端部には特に

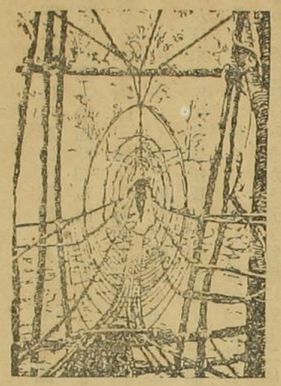
第六圖



セレベスの支へ付き籐吊橋

頑丈な籐葛で綯つた本綱を拵へてある。その上に、剝き籐を綯つた丈夫な籐綱で步道と手摺とを織り合せ、危險のない樣に仕組んである。恐らくこれ以上に上下動と側動とを十分に防止する結構はあるまい。第八圖に示す日本周防の木橋を研究する同樣に如何にも巧妙なる構作を見ることが出來る。

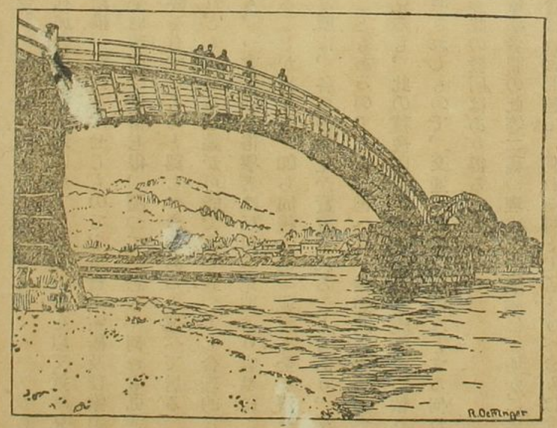
第七圖



籠造りの橋梁

工藝的には此は索橋に屬すべきものでなく、寧ろ桁構橋と見るべきで、人種誌的には恐らく第二圖乃至第四圖に見たる進步の最も立派な最も抽象的なる範例である。此の橋を知る上には、吾々は是非共近代日本人が極く雜多な人類學上の分子より成り、その內には對岸本上のモンゴリア系一部アイヌ系及びマレー系の要素を含有することを考へねばならない。

第八圖



周防の錦帶橋

アイヌ族は著しく黑色系の人種で、近代はエゾの北方地區に幽居しては居るが、日本人侵入前に在つては、事實上

彼等は近世日本の南部方面迄でも支配して居た。マレイ移移民は明かに該人種の以前の移動に依り說明され、彼等は極南亞細亞の定住地より西部マダガスカル及び東部エースター島に移住するに何等の困難をも感ぜず、斯くして經線二百度以上卽ち全地球の過半以上迄をも自種族を分布して居る。

第八圖に於ては外形は弓狀橋である。不幸本圖は陰影の爲め各部の結構を精細に知る由もないが、ライプチッヒ博物館に於ける大原圖は、極めて精巧なる繫ぎや楔組織を現し古代マレー橋と等しく全く釣及び螺旋を使用しない。

日本及び東印度の是等橋梁は、何れも明かに同系統に所屬することを示して居るが、果して爾余の世界各國の橋梁の結構が同系に屬すべきかと云ふ質疑に對しては十分に回答する事は出來ない。南亞米利加のコーヂレアの定住者が何れよりトラバイトを持つて來たか。キャメルーン及び古代コンゴー深林の住民が葛橋に依り何れより渡來したか。最後に吾々自身の祖先達が深淵に懸りし綱や鐵鎖を渡り、重荷を運搬し、人間を渡し、武器を渡し得る術に十分の卓見を何れより得たのであるか。ウインナ人類學協會々報中の『コンネクション・コンヴァーゲンス』なる書中 Von Luschan 教授は該問題に對し、全地球の人類進化の間には史的結合があると答へて居る。氏は、ニュー・ギニア及び西部亞弗利加の如き邊陬地に於て、異驚の眼を以て近時見出されし結構が誤想をなせしもので、事實上索橋及び索道は何れも全地球面に見出し得、隨つて、恐らく何れも弘通的の出發點を有するものと認むべきであると述べて居る。

けれども、斯る理論が可能であり且つよし合理的なりとするも、一方には土俗學者は反對の見地より容易に之を辯駁することが出來る、卽ち同種の他の現象と全く沒交涉の凡ゆる所に、各自の發見が實證されることもあり、又可能なることもあるのである。例へば、索道及び索橋の二重現象に見るも、此の種發明は單純と云ふ基礎觀念に依り當然に發明されしもので、交通上の保全を得んとする何れのケ所にも此の發明はあり得るとも云へる。

土俗學者間の此等二種の理論上の辯論は、明かに多年間通じ合はれた問題で、何れを可とし否とすべきかは今日尙ほ未定である。（青木生譯）

○四脚〻北海道新報に連載つゝある余が浪漫は四十三四回に及んだが、長短組合せて一回とされるあるから、彼是七十件は既に掲載されてゐる筈だ、何分物忘れ記念を欠き、社の者まで任かしてゐるから陽報報酬の感が多る、随筆とゝふ、まゝ元来十年ほど前の面白い譚のまゝなれば、仮令内容の空疎に堪へないものも雑ることが出来たものを得るべ。

おもしろく読ませ、多弱に感せしめざるのは編者が日々面面を新にし、種々錯出後者を端緒を許さるべやうにするからである。随筆に理解されきるのは数に依つて後載した

横原製

り、これの好む所に偏して前後を空のまゝにするのも読者を飽かしめざるの貧弱を感せしめざるまで、随筆家の技倆手腕は巧みに排合して互ひに活かすまで生まれるが、これの著者自身で無んで出来るの業ではない。況んや他人に望めないことである。

潜力を有くことゝ、何事にも結果を生ずるの自然のまゝ、人任かせは実に危険を感じ、巧みの多少の職もあるのに、必ずを忍んで自ら原稿を作り配合を指定すべしと骨を折りつゝある。

二百回連載した後頃徹尾読者自身の材料の貧弱を訴へしめぬやうにさるべく成功とゝ云いんまいから、自身努力する氣なもそれ

が、そのうつくしいことである　一月廿八日記

の前に玩具小品の広賣の大略を記しおかんとす後立多
少手を入つた。有田焼の白磁の羊の買物は可なり上品だから購ひ入れた。金田が撰した位輪の猿
の面貌が抜味のあるのと、幸ひと字の額を受け
たから之れも架中のあとしまた北原田舎の二人
が瑞西を做つてボツクス木彫細工を都と出すやうな
ものだが、ナザレのエーズの小木彫は割合うまく出
来て候も甚だ廉である。迚も京東の二人の作ひは
そういあくまでもこのものである。暇のある田舎二人が
コンナ事を試みることいよこそ思ふ、埃及風を
做つて幸福の占とふものを変り出したからこれは

豆の形の表に人物の顔を画し裏面をトランプ
の記號がある。トランプを玩ぶやうなる遊を
占ふとよいが、六個宛入とるとのみる。それも日本橋
のある骨董屋に土製の根付が六個宛入こ
つてあるのが目を入つたそれ爆の六個の内の一つ
の乾也の印があるけれども、果して乾也であるか
疑や家）ゝ定め難いが乾也の風の味は又
六個共の内多数い滑稽の人物、鉤鐘を將負
ひ人物、六の根を磨く軍人あり、丈を極する者
人形、[illegible]人物あり。人形化した雷公があり、熊
の上の熊蔵を狙公が乗まる、完から大漢

絵を立体にした趣があるが、根付ひいあるが玩具の趣もある。今一つ行すべきものに宋室の埴輪人形、婦人吹簫の姿態で、今田に模させて見たが、ようやくよく出来た。

○先頃橋に就て聊か書いた関係から、外国のいろ〳〵の橋を回想したのを見れば、一寸変つた高道と思はんる橋い橋柱に螺線の梯があつて、見る憑を河原に降り得るやう心ゑたものゝ、こんい紐育のブレンス、フォールスの橋を上風さんにもあるもある。天然の石橋は敢て珍らしくないが、ウラルの高原にあるよく素敵にも橋で、永久いの浸蝕に耐び出来たものである。

東京製

ものが、恐らく世界にも類稀の大きさ且つ美麗のものであらう。ロンドンのタワー、ブリッヂは吊橋の上頭にも橋があつて、舟が通る時は下の橋が別れる為め、行人は橋を上つて上の橋を渡ることになつてゐる。

○橋は建築物が融合一致する例は日本の社寺建築の社殿、西京の清水の歩廊などが其例である。世界の一例は支那の青時に某料理店を見た。北料亭は海濱にあるのだが、母屋の壁面から、橋脚を出して海中へ向長く突堤の如くつき出し、建築物がある。えいたの桁を支へられ、側から見れば全の然橋

と云く赤橋と云ふ)ものが、東西さんとうの橋の上を
通ってゐるのを見る。一方には一條の通路が
あって、その通と西一と或十の室が出来てゐる
各室い壁で庭新さんとうの部屋の部屋
こへうのやうなものがあるが、室の入口の内
地の特色なものとして、神殿の提燈がつる
してあり、小形の一離が多く、入口の下駄ぬき
がある。先から一戸の地き敷をもってゐる、
どうせ通ってこの所を抜ける(橋上の新
うへが、橋上の新
うエ風をしたものの奥がある。
○支那の敷煙から九百年前の程のものを発掘し
てから、支那の昔の文化に一の光明を放つた北

地方の概括的に西域と云ふが今の甘粛省の
西境から西北パミールの高原、北の天山山脈、南は
崑崙山の北支脈を限るアルタイ山系地を
指すもので、昔しの仏教文化の中心地であった。西
域ペルシアギリシヤの文化南は印度仏教の文
化がここに感化を与へた、紀元前十世紀即ち
支那の宋代に入ってから、タクラマカン地方に回教
の勢力が蔓って来て、仏教文化の次第に廃滅
さんとする遺跡遺物は砂漠の中に埋没した。
つた。
北の遺跡発掘の端を得たのは明治二十三年(一
八九〇)即ち約九百年を経て英国のバワー太尉

が庫車の附近で樺皮に書かれた物を手に入れたのが始めて、それから約二十五六年の頃仏のグルナール氏もコーチャン附近で仏文の断片を手に入れたが、それは第二世紀頃のものと鑑つられ、其後約廿九年を経て瑞典の有名な旅行家スウエン、ヘディン氏はコータンの東北方砂漠中に廃墟の埋んでいるのを発見したが、併し其人が何物であるか見究めもつかなかったが其報告に接した学界の学者の心を刺激するに十分であった。

かくて最初の学術的探検を着手したのが露西亜の考古学者クレツンツバで、約五十一年大山の東端

ルの近いトルファンの方面に出でたる物を見たが次で同年オーレル、スタイン氏の印度政府に奉職中、昔の支那領の旅の記、殊に大唐西域記を研究し、且の前述の珍奇なる書籍を思い合せて探検の目的地をコータン附近と定め同年十三年から翌年に亘り此方に於て物多の遺物を手に入れた。其後第三十五年獨逸ハンブルヒに開かれた東洋学者の大会に出席した同三十五年から翌年に掛けて獨逸のルコックは又トルファン附近を目指して大収穫を得、グリエンウエーデルは約五十八年——四十年頃、トルファンから西へ庫車附近と云う地方の探検に於て

多数の遺物を収めたり、彼の又大正二年から四年に
かけて庫車方面を探検した。
スタイン氏は三十八年―四十一年に第二回の探検
を企て、タクラマカン沙漠を著く探つたのである
が、また甘粛方面に輸出、甘粛省の西辺に位する
敦煌の千仏洞に於ても同じく多数の貴しき経文
類と支那の古文書を見つけ、且絵画数点を得た
由つたこの時の報告が有名な「セルインデア」である。大正二年―五年に彼の第三回の探
検を行つたが、北方の天山方面と止らず更に深く
パミール方面にまで入り、アフガニスタンの方面
も踏査した

標原製

仏国のペリオ氏も同じく三十九年―四十年に天山方面を
探つた後、四十二年スタイン氏が立つた後、敦煌に
到り、千仏洞に於て、スタイン氏が見落した貴しい
収穫を得た
我国では西本願寺の探検隊が次で三十五年―
三十八年、四十一年―四十二年、四十四年―大正三
年の三回に亘る方面の探査を行つた、其収獲物
は西域考古図譜に載せてある
以上は主唐令に日露戦争の焼跡「玉唐」に於て敏
夫氏が西域遺物概観と題して書いたものを
物語つたのである。
支那も探検者の取る任かせて行きたいきたが後ろ

特に千体仏洞へ人を入れて取り残されたものを如来と
崇めて外人の持ち帰ることを禁じたりしたが宝
物は殆んど遺きざる迄に散逸してある。
自分は西本願寺が採集した品が本山に到達した頃
京城に出張したのだが、南海の風景と手
引で到着間もなくすぐそのまゝを一読する
仕合せを得た。其際ノートを取つたものを京都の
有志に託して、其の一端
は既刊の雑誌に掲載して世に紹介
其後大限元侯と随従して西本願寺を訪問し
た際、大谷光瑞が大限伯侯との談話中大谷
は型録の書を侯に呈して説明する趣味

が有る事やまない自分の全く無趣味と通ぜ
ずあらば自分は横合から口を出し、西域探検の
ことを殊大なる趣味を有つて居らるゝ人へ
かと云へば、法主も頷き得た顔の面相にあり探検
も満足の行き届かぬ。其の第一の原因は自分
の充分の資力が無つたこと、時期が後れたこ
とにあるとて、探検隊を派遣した。西本願寺
は後れ馳せながら、よい時期に探検をやつた。今日
に後れること、物を支那に持出すことが出来
る面倒なことなのだ、或は運搬が出来ないことだ
支那が追ひ西域に注意を拂ひやうとする頃、日本

の学界に採検隊を出していどうかなどの議が立
して志賀重昂氏などの提唱さん、氏を協議す
る為め各大学から代表者を出したが、早大からは
自分が出て、其議に與へた。此の協議の終の緯ま
らずの仕舞つたが、要するに既に支那本国に於
て氣がついた暁とうていれを持ちゆくことが困難なる事、支那の宦官の眼をくらます
るに小数の隊伍で游行を企てるけれども事実
小数の隊伍でなくて人員料其他供給の運搬も出
来ぬことと、官吏の為に殺されても二三駄の金
量ある海外に考へても、所謂一人物汚無の
ものを考へても游行なども思ひも寄らぬ事。

なる大切なる問題は資金を得る方法なるも日
本には学の術研究の為め資を投げ出す程度
なるは甚だ少く、出資者と申出る実業
家は為替振替を手なれぬ野心より起り振る
ことも既に済んでもなほ事実はあるが後の果
をもあらかじめ考量せざる可らざる事等等
さまざまの故障を生じて終に纏まらずに仕舞
りたるが此の会議の席上西下新考の使命を帯
びて探検の実験ある機師なる為め。亦各社の学
者もあるとは動植物学者なる為めに甚だ冷淡なる
河漢なる植物もあるが、動物に物もあるが、
辟とする事なるとの研究の材料

といふことあちこち云ふて探検隊をかいて
無かつた。
西域の考古学の如き因縁のあるこの北の地
域の歴史を知り此の上に長る際に玉虫
の地を一の手に入つたのは自分に取つては誠に幸
である。
一月廿九日記

○早稲田大学理科の教授今和次郎氏は北海洋行前から提唱されて
内相し、洋行前から提唱されて考現学を説き文
明協会に於ては一席の講演を聴くれた。考現学は考古学
に対するもので、自分モダル・ノロジー（まことのこと
ばの意）の名を命じたものである。事が過去のものでなく
おもふ（）の考古学研究の考証をして現代に於ける

寸寧ち現代にあつて考究するの必要があるこ
とを説くのであつて見れば、考古学と出した訳、初めて
ざけ出された、書きこ教ふ婦人
催し、後ろに婦人公論社の社長が自分の費用を出
して調査をすることになつた。やはり風俗研究を主眼
とした。これの大正十四年の頃、まん迫と書き始く
したことの考現学と題して春陽堂に出版した
ものである。此考現学とは過去の遺物を考古学
り民俗学かあり人類学かあり考古学があるが
西洋は出土品を、倫物館の隅に見る。別品と云
（八迫）云こと土人が使用したものが概ね出陳されて今
現に用へてあるものを、要するに坐

の諸科に亙る歴史的研究であるが、考現学の現在のそれを研究するのとは異つてゐる。考現学は現代の生活の態を実際に記録するのであるが、勿論それと併せて研究することもあるのである。之れを要するに考古学は資料の蒐集と統計がある。例へば同技倆の出来の人の年齢を調べたり、古い方の人が多くラクビーの入場者を調べたりすると若い人が著しく多い、それで現代人の時間が年齢に依つて異るることが直ちに知れる。資料の蒐集と統計が心理的なんが現代の人の趣向が知れる譯である。西洋でい未だ考現学はこれまで無い、我々は考りの研究をしてゐるまで流りの見解を研究してゐる者がある。それのコロンビヤ大学の教授で、ポーター氏とかエコノミクス、ヂアレヨンと云ふ人が書いてゐる、亜米利加の地人と今考現学を始つた米国と云ふが、サーベイ今教授のを移してかきつてゐる所へ、今教授いあるら清貧を実生活の上から研らんとする在るのだ。

此の清貧とは物の無を感じて、既刊の考現学を特に後人が書いてゐる岡洋山でいろ〳〵の実地研究が書かれてゐる、貧民街の生活状態労働者の手拭の巻き方や冠り方引かけ方や印半纏の着方や着崩しや糸帯

日清ニュース

ニュース金言

まあよいと
思ふ無駄から
先づ省け

年頭の詞

社長　市嶋鴻吉

私は毎年年頭に熱海に行くことが例となつてゐる、本年も舊例を守つて出かけた。熱海には坪内博士が住んで居らる、ので、行けば必らず毎日博士と往來をする。博士は未の干支に生れられたので、小羊が別號となつてゐる。私はこの事に氣がつき、年頭の賀詞を陳べた時に、ことしは老兄の生れられた干支に當る。舊臘は大地震の災厄に罹られお氣の毒であつたが、今年は吉祥の年で萬福が貴家に集まるであらうと、羊に事寄せて祝福した。それから例のごとく漫談で時を移したが、兎角羊が話材となつた。私の云ふには羊は好んで紙を食ふ動物だが、老兄も其の干支に生れられた故か、よく紙を費やす人だ、日々著作に用ひらる、紙を積算したら年額どれほどになるであらうか。斯く云ふ自分が營んでゐる會社も、紙を扱ふ點に於て羊に因緣がある。一年紙を多く喰ひこなせば、こなすほど成績が上るのだと一笑した。話題を轉じたが矢張り羊を離る、ことが出來なかつた。日本は風土の關係で餘り多く羊の群をなしてゐる光景を見ないが、此動物は群居生活をなすもので孤立を喜ばない。彼等は互ひ〳〵に、體を擦れ合つて密集する。そして動く時も一齊に擦れ合ながら動くから、宛ら波濤のうねる如き狀がある。支那で海洋の文字を作るに水に配するに羊を以てしたのは合理的であるなどの談も出た。私は博士の座敷から海を見やり。洋々たる海景が如何に人の氣宇に影響するかに感じ終に吾がニュースを藉り社中の諸君に年頭の詞を寄せる氣になつた。どうも洋々たる氣分がよい。別して新年には此の氣分がほしい。物にこだはらず暢んびりした度量の廣濶な氣分で新年を迎へたい。何んでもかんでもせゝこましく、窮屈ずくめの今の世相も困りものだ。互ひに一團となつて相依り相助けて業に從はんとする吾々は、何は差し措き洋々たる心境でゆきたいものだ。不景氣など云ふものも一ツは心柄であつて不可抗力のものと思ふものは過つてゐるどんな濃厚な不景氣でも邁往して打解の出來ぬことは無い。要は心柄にあるのだ、氣分にあるのだ、氣魄にあるのだ、努力にあるのだ。自己の心柄で不景氣を打解することも出來るが、亦反對に却つて不景氣を招致することもある。徒らに不景氣の聲に怯へて屈托するのは不景氣に負けるもので、禍は益々其弱味につけこんで來る。不景氣も三年から續くが、禍も三年經てば幸となるとも云ふ、窮すれば通ずるのは物の數である。本年

社員一同

（編輯部正面玄關前）

来の色み方や持ち方ようなる深刻の注意を拂くべきまくの別かあるのか、自そこれいろくの理窟屋がおのつからなるせうる氣がするかも論斷片面の例を思ふへから、集大成の材料で研究しろゆんバ物ろう成り立ろうか。

日清ニユース

ニュース金言
まあよいと
思ふ無駄から
先づ省け

年頭の詞

社長　市嶋函吉

私は毎年年頭に熱海に行くことが例となつてゐる、本年も舊例を守つて出かけた。熱海には坪内博士が住んで居らるゝので、行けば必らず毎日博士と往來をする。博士は未の干支に生れられたので、小羊が別號となつてゐる。私はこの事に氣がつき、年頭の賀詞を陳べた時に、こは老兄の生れられた干支に當る。舊臘は大地震の災厄に罹られお氣の毒であつたが、今年は吉祥の年で萬福が貴家に集まるであらうと、羊に事寄せて祝福した。それから例のごとく漫談で時を移したが、兎角羊が話材となつた。私の云ふには羊は好んで紙を食ふ動物だが、老兄も其の干支に生れられた故か、よく紙を費やす人だ、日々著作に用ひらるゝ紙を積算したら年額どれほどになるであらうか。斯く云ふ自分が營んでゐる會社も、紙を扱ふ點に於て羊に因緣がある。一年紙を多く喰ひこなせば、こなすほど成績が上るのだと一笑した。話題を轉じたが矢張り羊を離るゝことが出來なかつた。日本は風土の關係で餘り多く羊の群をなしてゐる光景を見ないが、此動物は群居生活をなすもので孤立を喜ばない。彼等は互ひくに、體を擦れ合つて密集する。そして動く時も一齊に擦れ合ながら動くから、宛ら波濤のうねる如き狀がある。支那で海洋の文字を作るに水に配するに羊を以てしたのは合理的であるなどの談も出た。私は博士の座敷から海を見やり。洋々たる海景が如何に人の氣宇に影響するかに感じ終に吾がニュースを藉り社中の諸君に年頭の詞を寄せる氣になつた。どうも洋々たる氣分がよい。別して新年には此の氣分がほしい。物にこだはらず暢んびりした度量の廣濶な氣分で新年を迎へたい。何んでもかんでもせゝこましく、窮屈ずくめの今の世相も困りものだ。互ひに一團となつて相依り相助けて業に從はんとする吾々は、何は差し措き洋々たる心境でゆきたいものだ。不景氣など云ふものも一ツは心柄であつて不可抗力のものと思ふものは過つてゐるどんな濃厚な不景氣でも邁往して打解の出來ぬことは無い。要は心柄にあるのだ、氣分にあるのだ、氣魄にあるのだ、努力にあるのだ。自己の心柄で不景氣を打解することも出來るが、亦反對に却つて不景氣を招致することもある。徒らに不景氣の聲に怯へて屈托するのは不景氣に負けるもので、禍は益々其弱味につけこんで來る。不景氣も三年から續くが、禍も三年經てば幸となるとも云ふ、窮すれば通ずるのは物の數である。本年吉祥の歳、之れをして幸あらしむると否とは天に非ずして人にあるのだ。どうあつても年の新たなると共に氣分を一新し洋々たる氣分で邁往せねばならぬ。不景氣を退治するには先づ心境を開拓し、臆病、屈托、自暴自棄なんど云ふ不景氣から不知不識養成された病的心理を一掃せねばならぬ。之れを一掃せねば折角吉祥の歳が循環して來ても幸を逸するかも知れぬ。亦話が羊に戻るが羊ほど從順の動物はない、亦羊ほど犧牲となるものは無い、ある國土に於ては神に捧げるには必らず羊の犧牲を以てする。羊は從順の美質を有し而かも氣の毒のものであるが、それだけ神の愛を受けてゐると云はれてゐる。吾々も羊の如く集團をなしてゐる以上、秩序を保つことが大切である。殊に社是に對して一同差別なく從順であらねば如何にして秩序が保たれやうか。社運が進展しやうか。羊の如く犧牲に供さるゝことは、人道には無用の事だが、犧牲的精神は高尚なる心理で、これが無ければ忠節は起り得ないから、此の精神は學ばねばならぬ。羊頭をかかげて狗肉を賣る如きは姦商の爲す業で、吾社に對しては說く必要の無いこと、信ずる。私は偶々本年の干支に感ずる所あり熱海に在つて聊か所懷を筆して年頭社中一般の人に告げ、諸君の健康を祝する。

榛原製

左傾運動と精神病

醫學博士　杉田直樹

◇

高山樗牛や幸德秋水が、その痼疾たる肺結核のためにその思想が著るしく影響せられたらしいといふ事は、その當時から世人の口に上つたことである。朴烈にもこの病氣のあつたことは屢々新聞紙上にも傳へられた。

併し賴山陽の如きは、この病で死期を知つてから、史記の仕事に一層馬力をかけたが、夫人の書簡にも「御身は御疲れ被遊候へども御精神は少しも初めより變り不申……誠に慥に存候」とある。

とはいへ由來無政府主義又は虛無主義等に溺れる人達の間に結核病者が多いといふことは、總ての觀察者の說の一致する所であつた。結核が不治の疾患であつて、己れはもう再び世に立つことの出來ぬ、のろはれた宿命に囚はれた者だといふ悲痛な自覺が、偶々神經病質の人においては、絕望の感動から自暴自棄的の思想を惹起し、しかも結核病者の鋭く尖つた理性は、たゞ無氣力な諦めの裡に隱退して、餘生を無爲に送るの運命には到底甘んぜしめない。どうかして生きたい。生命に生きる能はずば、せめて名に生きたい。美名に生きる能はずば、せめて惡名にでも生きたい。病の前途を思へば自我心が勃然と起つて來るが、身の現狀を顧みる時、徒らに感傷的となつて、たゞ無性矢鱈に、もがき拔きたい捨鉢な氣分にもなる。その心持に迎合する好機さへあれば、烈しい爆發もする。辛辣刺すが如き罵詈讒謗もする。捨身の決心は如何なる無謀な企てをも厭はない。ぢり〳〵と焦燥して何事でも早く決行したがる。

そこで病魔に身をさいなまれる平生の苦惱の復讐を、見當違ひの現在社會國家の健康者幸福者全體に向つて、反逆することに依つて腹癒せしやうとする。絕對絕命であり、自暴自棄である。そしてその反逆は自殺企圖の變態であり、所謂道連自殺と同樣の心的過程によつて生成される。

併しこの際不治の結核は一の誘因に止まるのであつて、つまりは精神變質症の素質の上に、この自暴自棄的反應を生ずるものと觀ぜられる。精神變質なき所に

榛原製

反逆心は起り得ない。

◇

フオン、ムラルト等の精神病學者の精細な研究によると、結核患者の三十乃至五十％には特異の精神異常症候を見るものだといふ。卽ち結核菌毒素が腦の神經細胞を刺戟し且痲痺せしむる中毒性の現象として、その初期（肺尖加答兒期）には、誰しも知る如く、不眠、頭痛、注意散亂、疲勞性亢進、悲觀性抑鬱等の神經衰弱樣の症候を起す。注意が集中せず、却つてその轉導性が高まるために、學習記銘の力が不充分となる。殊にその時々の氣分に左右せられて、感觸が極端から極端へと變化する。感傷的となり、感情刺戟性となり、些細の事に泣き易く、怒り易く、又愚痴ぽくなり、しかも機嫌が著しく變り易くなる。失望してゐるかと思ふと、又時には急に元氣づいて、はしやぎ出す事がある。病氣が到底駄目だと知りつゝ、前途の旅行の計畫や結婚の準備に熱中して少しも矛盾を感じないらしい。少しく煽動せられると、圖に乘つて自分の病氣を忘れて、作業に熱心になることもある。自我感情が亢進し、判斷力が障碍せられる爲に、自分の頭腦は甚だ明晰になつたとうぬぼれ、自分ばかり偉いやうに考へ、時には極めて大膽な自說を無遠慮に發表し、その偏見をごこまでも押し通さうとし、他人や世間が皆馬鹿に見える樣になるらしい。

これ等が結核菌毒素の中毒によつて起る特異の精神症狀なることは、以前「ツベルクリン」注射療法が行はれた時代に、その注射をすると、これ等の精神神經症狀が一時的に著しく增進する事實が、多數醫家によつて認められた事でも分る。

結核は社會の如何なる方面に多く分布してゐるかといふに、一番多いのは知識階級者、特にその中でも運動と日光と空氣の不足し勝な敎師、文筆者、銀行會社員等の間で、次には比較的產業に近い室內作業の勞働者である。神經變質者もまた知識階級の間に一番多い。尖話に惠まれず、不平を懷く者もまたこの階級に比較的多い。これ等の諸因が相合して、そのいら〳〵しさの氣分の間から、過激思想がこの階級から釀成される危險が一番多いのである。

◇

文明國の統計で、結核患者が年々增加する事實、精神病者、神經病者、精神變質者が年々增加する事實は、一方に自殺者や犯罪者の如き自暴自棄に基く性格破綻者の年々增加する事實をよく說明すると同時に、また一方に種々の爭議暴動乃至過激思想虛無思想などが益々增加せしめて行く因由をも解說してゐるものではなからうか。

結核が體質の變質的低下によつて蔓延し、精神異常が神經系の變質的遺傳原因によつて益々增加するのは、何れも文明の副產物として、國民の素質の變性的惡化を示す徵證であると見做されてゐる。して見ると、これ等の原因の場合によつて生ずるとせられる過激思想なるものは、社會組織缺陷の外部的關係と相まつて、また國民の素質的內因に基く所も少くない樣に思はれる。それもこれも文明人の一度はたどるべき一道程と見るべきものであらう。この道程を過ぎて、さて次は如何なる所へ行くのか、國民變質の前途如何はまだ醫學者には測り知られない。これを宜しく昔日の狀態に歸すべしといふのが、國民衛生學の主張であり、歸結である。

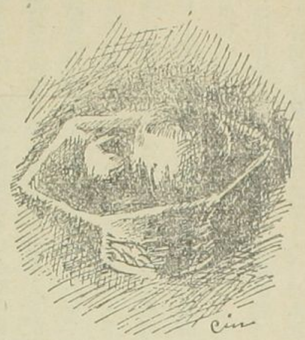
水源は濁りなし。未來はわからぬ。過去の狀態こそ健全の曲型なれと考ふるによる。

過激思想は、何でも過去を破壞せよと唱へる。未來は自らその殘骸の間から打建てられて行くであらう。それがどんな形態をとるかは、誰が知らう。

未知のものと代へんが爲に、既設のものを壞つ、それが自暴自棄である。論理的に言つて、その思想を吾々に精神異常狀態に歸せんとする因由はそこにある。

併し反逆も革命も單獨では出來ぬ。そこに組織がいる。從來の研究によると、政治的革命又はこれに類する運動の首謀者には精神病者が多い。歐洲では革命首謀者には猶太人が多いといはれるが、又一方に、比較民族精神病學上から猶太人は精神病の罹病率が特に高いといはれて居る。そして結核病者の多くは、その運動の加擔者であり、雷同者である。

斯くて一の革命團が出來上るのであるが、その團員の共通の點は、主義思想の理智的共鳴ではなくて、むしろ神經病的焦燥と自暴自棄と自我昂進との感情異常に外ならない。と、泰西の或學者はいつて居る。（完）



農村問題と科學

工學博士　大河内正敏

×

科學に基礎を置かない産業は、一時の拍子で隆盛になつても周圍の事情が平常に復すると忽ちにして雲散霧消し去るものである。産業の堅實なる發展、力强い進歩は、すべてこれを科學に俟たなければならない。

科學の發達は、從來農村の仇敵であり破壞者であつた鑛毒をも、これを化して安價な肥料となし得るのである。鑛山から多量に排出せられる、いはゆる毒水の處分についても、科學の發達、特に膠質化學の研究により、その中の金屬を採取し、殘滓を容易に沈澱せしめて、毒分を除き去り得るやうになつたが最も處分に困難なのは毒煙である。

全國知名の銅山を視察した人は、有害な煙の棚引く附近が、全く禿山となつて、一草一木の芽ぶきさへぎるものなき慘害に驚かれるであらう。かなりの遠方にある農作物の如きもまた相當の被害があつて、それは多く鑛石精錬の際に吐き出される煙の中に、亞硫酸ガスが含有されてゐるためである。若し亞硫酸ガ

スを完全に除去し得るならば、殆ど無害の煙となつて、何等害毒を及ぼさない譯であるが、從來の方法では、これを取り去るのに莫大の費用を要する。止むを得ず毒煙を出來るだけ稀薄にして、なるべく高い煙突から吐き出させてゐるのである。

この有害なる亞硫酸ガスを、アンモニアに働かして硫安を作り、同時に副產物として硫黃を得んとする研究は、世界戰爭中ドイツに試みられ、最近わが國においてもこの研究に成功してゐる。卽ち有毒なるガスから必要な人造肥料と、比較的高價で純粹な硫黃とを得るのであつて、この發明が大規模の試驗に成功するならば、從來は廢棄するに多額の費用を要した厄介物から、農村に頗る必要な物を製造することが出來る。敵視されてゐた鑛毒は、變じて肥料となるのである。同時にこれに要する多量のアンモニアは、ハーバーやクロードの方法（硫安の價格を低廉にするドイツのハーバー敎授の研究、最近のクロードやカザレー等の發明）に更に一步を進めた研究を試み、一層廉價に生產すべきである。

何れにしても、これ等は全く基礎問題であるから總て物理學化學の研究に待たなければならぬ。根本から組織的綜合的に研究して、初めて目的を達するのである。從來のやうな小規模の

たこの液體空氣はその蒸發に際して純粹の窒素と酸素とに分離されて、種々の用途が見出だされて來た。

今日重病人の呼吸困難に際し、その苦痛を減ずるものは、多くはかくの如くにして得た酸素である。世界幾百幾千萬の人類が過去未來にわたりこれによつてどれだけ苦痛から免れ得るかどれだけの人命が取りとめ得られたかは測り知れないほどであらう。そして殘りの窒素は、ドイツのハーバーやクロード、カザレー等の研究によつて、水素と化合されてアムモニアとなり、更に硫酸を加へて硫安となり、每年幾百萬噸の肥料となつて農村に供給されてゐるのである。

かくの如く空中窒素固定により、空氣と硫酸から硫安が製造されつゝある今日、更にその生產費を低減するには、種々の方面から研究を進めなければならない。例へば、硫酸の安價なる製造法や窒素固定裝置の改良等の如き多々ある。

これ等の科學的研究が進めば進むほど、肥料の生產費は低廉になり、從つて窮迫せる農村に安價な肥料を多量に供給することが出來るのである。

現在の硫安市價を假に一噸百六七十圓とすれば、それを半額に値下げすることは、科學の見地からは決して不可能ではない僅々十人や二十人の研究者が集まつて、その日暮しの目先だけの問題に沒頭してゐる各種の試驗所や小研究所では容易に解決の出來ない問題である。

肥料においても、天然物そのまゝを肥料とする原始時代は既に過ぎ去つた。硫安、硝石の如き窒素肥料は、實に近世科學を基礎として起つた新しき工業の產物である。また燐酸肥料は燐鑛石を採掘し、更に加工したる化學工業の生產する所である。

×

今より約百五十年前、有名な化學者プリーストリー及びキャヴエンヂイツシ等によつて、空氣中で電氣火花を飛ばすと窒素と酸素が化合することが發見され、それが今日では人造硝酸肥料工業の基礎をなしてゐるのである。また壓搾されてゐる空氣の壓力が急に降下して空氣が膨脹すると、空氣自身の溫度もまた降下するといふ事實を人類に敎へたものは、有名なる物理學者ジユール及びケルビンである。その當時は何人も、これを以て單に學術上の一法則が發見されたに過ぎないと思惟したのであらうが、併しこの發明から古來人類の企て及ばないと考へたほどの非常な低溫度にまで物を冷却することが出來るやうになり、遂には空氣そのものを冷却して液體とすることが出來

しかも此研究は實に物理學化學の純學理的研究が土臺をなしてゐるのである。是を無視しては、根本から價格を低廉にする望みがないのである。然るに今日まで日本において、此方面の科學的研究が疎かにされてゐたのは如何にも殘念な次第である。

日本のやうに年々人口が八十萬人も增殖し、しかも耕し得る土地は殆ど耕作し盡されたのみならず、海外移民も困難な狀況にある國では農業に工業の思索を加味する事は頗る急務である。まして今日の如き農村窮迫の實狀が吾人の目睫の間に迫つてゐる場合に於ては農家副業の工業化は最も必要である。

×

元來農業は工業と相併行することによつて、たくみにその副產物を有利に處理することが出來る。農村の經營は純農業上の知識經驗にのみよらずして、工業上の知識が加味せられてはじめて副產物或ひは廢品に等しきものを原料化し、これを有利に處理することが出來るのである。ドイツでアルコールが驚くべき廉價に生產せられるのは全くこのためである。

日本中でアルコールが一番廉價に生產されるのは臺灣であつて、それは原料として製糖事業から出てくる糖蜜を用ひるためである。臺灣の製糖會社は副產物である糖蜜を何かに利用しな

ければ腐敗して惡臭を放ち捨て去るに困却する位である。それを原料としてアルコールを製造するのであるから、まづ原料は無價値と見てよろしい。それですらアルコール一ポンド十錢内外（稅をふくまず）でなければ市場に供給出來ないといふ。

然るにドイツのアルコールは畑に耕した馬鈴薯を原料とするにかゝはらず、戰前は一ポンド六七錢で市場に供給されてゐた臺灣の糖蜜よりも遙に價値の高い馬鈴薯を原料としてアルコールを醸造して、しかもその生産費が低廉であるとは、おどろかざるを得ないのである。ドイツは農民保護の政策に熱心であるから、それが以上のやうな不思議な現象を來たす一原因ではあらうが、その主なる原因は實に農業に工業を加味した經營法の賜である。卽ち農業と工業の提携の結果であり農村副業の工業化のためである。

ドイツでアルコール醸造が計畫せられると、まづその醸造工場で使用する大部分の馬鈴薯を耕作し得る地方の中央に工場が建てられる。醸造の際生ずる芋の粕で豚を養ひ、又畑から出る馬鈴薯の葉でも莖でもそれ〴〵皆豚の飼糧に供せられて、一物の廢品となるものはない。そして養豚場は又馬鈴薯畑の肥料の一部を供給し、或場合には醸造の際生ずる炭酸瓦斯まで畑に導いて肥料とする。豚の肉は生のまゝで或ひは加工して市場に供給され、毛、革、骨、血その他すべてのものが工業の原料となる。ゆゑに當初の目的であつたアルコールは副産物の形となつて、その生産費は著しく低下される。斯の如くにして有價の原料を使用しても、なほも無價値の原料を使用するよりも廉價になるのである。

×

最近の進歩した製鐵業が極度に理化學の研究發明を應用して、電氣、ガス、煉瓦、セメント、染料、自動車燃料等の副産物を多量に生産し、當初の目的であつた製鐵そのものは寧ろ副産物となり、延いて鐵の値段を低廉ならしむると同樣、アルコールの價格も農業と工業の携提によつて殆ど想像し得ざる程度にまで引下げることが出來るのである。

生絲の品質を改良し、その生産費を低減することも同樣の方法によつて出來るので、例へば桑の纖維の利用など最も面白い問題である。或ひは蛹油に關する研究の如き最近頗る有望になつて來た。卽ち蛹を壓搾その他の方法で油を採取し、それを石鹼の原料とし、または乾溜によつて一部をランプ用の燈油に代へ、一部を揮發油として自動車の燃料とし、一部は輕油とする。

そして殘りの蛹殼は養魚養鷄の飼料とし、更に進んでは、それから有用な蛋白質を採取するのである。

養蠶の盛んなる日本では一箇年約十萬石の蛹油を採取し得るといふから決して輕視出來ない問題である。人造絹絲に壓迫されんとする養蠶業は科學の應用によりてあらゆる方面にその副産物を見出さねばならぬ。

工業の原料とすることを目的として特に栽培する農家の副業も多々あると思ふ。例へば、除蟲菊栽培の如き、岡山、紀州地方には相當に耕作されて、輸出する者も可なりある。併し、從來はたゞ農家が除蟲菊の花を採取し、乾燥する位のもので、原料のまゝ出してゐる。宜しく農村に於てこれが加工を奬勵し小工業の種子を蒔くべきである。そして有力な驅蟲劑が製造されゝば、また一面において、農産物の增收となる。或はたばこの耕作の副産物からニコチンを採取しても優秀な驅蟲劑が製造し得られる。不幸にして日本産のたばこはニコチン含有量が少いが、專賣局から出る廢品の莖や粉の類は生産者たる農村が拂ひ下げの先取權を得て、驅蟲劑製造工業を起すことの有利なるは決して机上の空論ではない。

×

その他煉乳事業の如き、肉製品、罐詰事業の如き、日本の全國に分布されて附近農村の副業を消化し去る施設が必要である。

特に煉乳事業の如きは常に外國品に壓倒されて苦鬪をつゞけてゐるが、これは舶來品優秀なりとの觀念が先入主となつて內國産は外國品よりも廉價でなければ賣れないからである。然るに鈴木梅太郎博士の研究によれば、榮養價は却て內地品の方がまさつてゐる。近來盛んに輸入せらるゝ粉末ミルクの如き外國品の或物はバタを製造した殘りの牛乳を乾燥してつくるために、これまた榮養價は著しくおとつてゐるにかゝはらず、日本はその上華客である。これには製造者の方でも不思議に思つてゐるといふ。

×

人造藍の發明がインドの天然に大打擊を與へたと同樣に、人造絹絲の發明は日本の蠶絲業に大なる壓迫を與へることなきか明治二十九年における世界の人造絹絲生産高は僅に百萬斤內外に過ぎなかつた。それが十年後の明治四十年には約五倍の四百八十三萬斤に達し、更に六年後の大正二年には千五百萬斤に達してゐる。それ以上の目覺ましき發達は米國の人絹工業であつて、特に戰時中から戰後にかけて旺盛である。

米國における人造絹絲の生產は、戰前の大正二年には僅に百十八萬斤に過ぎなかつたが十年後には二十倍以上に激增して二千六百八十三萬斤に達してゐる。しかも價格は大體において生絲の三分の一である。この勢ひで人造絹絲工業が發展して遂にわが生絲を脅威することになれば、さらぬだに衰退に向かひつゝある日本の農村に取りては實に由々しき大事である。

尤も人造絹絲は生絲とは化學的に全然異つた物質である。その外觀は寧ろ生絲よりも美しいが、その他の點においては、似てゐるといふだけで、全くの模倣品であり、僞物である。從つてインドの天然藍が人造藍の發明によつて再び立つ能はざる程度の打擊を受けたのとは大いに異なるものがある。即ち人造藍は天然藍と全然同一のものを化學の力によつて合成したもので人造といふよりは合成といふ方が正しい。その品質も何等異なる所なく却て純粹であつて、生產費の如きもその後の研究により初期の半分になつた。

然るに人造絹絲はレオミユールの發明以來シャルドンネー等の研究と改良により、日一日と眞物に近づきつゝあるといふものゝ、前述の如く生絲とは全然品質を異にするものである。結局人類の使用を要求する纖維が、從來は毛絲と綿絲と生絲とであつたのが、綿絲と生絲との差の大きかつた中間に人造絹絲といふ新しい纖維が一つ地步を占むる事になつたと見るべきが至當であらう。然し眞物に近い廉價な僞物が大量に現れてくると、眞正の物の價格が牽制せられるといふ事は免れ難い。生絲を使ふところを人絹で間に合はせるといふ傾向は何としても否み難い。生絲の領域の一部が人絹によつて侵されると見なければならない。ゆゑに日本は、おくれ馳せながらも、速に人絹の科學的研究に熱中し、世界のそれよりも更に一步進んだ人絹を日本において製造し、遂には世界の人絹工業の鍵を握る覺悟が必要である。それが徹底的に敵を壓倒し去る唯一の途である。

わが國の農村の死活に關し、經濟界、貿易界の浮沈を左右する人造絹絲に對し、この覺悟、この決心がなくて何とする。

日本の科學者は死力を盡して人造絹絲の研究に沒頭し、國家は幾千萬圓の國帑を費やしても、その研究を助成しなければならぬ。それと同時に、一面において、生絲の品質を改良し、優秀にし、人絹の及び難い程度に追隨をゆるさない程度にまで科學的の研究を進めなければならない。そして更にその生產費を低減する研究が必要である。それが生絲の產業を永遠に强固にし、農村を救援する根本策であらねばならぬ。（完）

○アメリカのホリウッドは活動写真で富んでいる
ゆく地名だが、高級住宅街の名のを使んび
又また、北地はロスアンゼルスから五哩離れた小さ
い町で人口は二十万人、この人口の殆んど全部が
活動写真に関係があるといふもの住び、町
を見渡すと、板作の簡単な建物
が目もかれまるもあるそして其色の主な物多
くは男女俳優の名刺書び
例の千ヤプリンの別荘ここにある。北地から
谷間の輸出するフイルムの金額は莫大の数と
上るといふ、何故北町に活動写真の撮影所が
あるかといふと、ここは非常に気候がよく年

中七十日の晴天を保ち、年に五日ほどの雨が降
るといふやうな天気つきの別天地である為
めまつとんムを乾燥せもあるに都合が
よいからだといはれてゐる

○小山田與清が書注を加へて上木せる暦本歌
拾一冊を得た、活紙数は枚の書にて六十
六首の暦に関する和歌を挙げ、傳暦数往
歌と罵しそれらの最も数多く、其注の後に
はたのめ

右暦本歌拾不詳何人之撰也、所載天和
四年伊勢暦及京都大経師暦、延寶六
年伊勢暦等而各有由焉、今校合

波北加之次長言注云文政十三年庚寅秋
八月朝日屋主人平典（古涙）
○文政三年関口機之助の撰んだ太鼓教練譜横
横本一冊を得た。和蘭一千八百六十一年の四兵式
操錬の教譜に、今とちがつた北種の本容易を得
かたく珍書と為すに足る巻首に扶桑人の題字
あり、
一教三軍動、両鼓胸鳴、有紙表記不審
彦一の次義
下邦夏立揚以号人仰高堅口
○佛国の「而復一楽」と対抗し得る佛国の書

横原製

冊時を忘れ嘆賞と云へ、文政末年稿本佛書之
内を西洋村佛国に入る、今尾張藩稿本新一
の義也とする。たゞ収むる所の二冊中の二冊一は
鄙騎の尋出図、一は野戦陣図、北の表冊の図は山陽省郷
に就て案ずるに、北の表冊の図は山陽の版
本上のるものなら図はしらず、山陽の風俗
未だ模糊たるを読みたるしるし、乃ち左の之んを
補ふ
舟人解説 未徒甚急、数々走筆、不如
其成何如也、佛頭著糞、罪多（ママ）
寰又識

○此今長崎の紙工業の漸次発達したる連
想の随筆に既に六十四連を載せたる。一回分可
なり長いのもあり、短篇を組合はせたのもあるから、
既に百件位は掲載されたれども、昨年新
少社へ雑筆共修正の為とて貸はけれのと
共後執筆したる分稿十数篇も送つてあるから、
百四連迄するまでは送稿を要しないが、百四か
ら後の二百四連迄するまでの原稿いろんなも
読へ後ぶるまでの毎日間に注ぎかけて執筆し
てゐるが、日に二篇位は書きあげるのに既に十
篇位の書溜めがある。尚ほ多の補修する分原
稿となるものが約五十件位あるから、後の百

樣原製

四十四連迄は二百四連以
上七連迄続し、後者をして
の豊富を思ひしまるまで丁度隨筆上版の
時と同じ様な苦心が要る、二百四連載を殺
辛抱しとまで今更可笑しいことを感じ
ない。

二月十二日記

○無駄徒伐に去を用ひつゝある折柄、表が印刷会社
で昨今感じたことは、輪轉機械が巻紙を断裁す
るの五分許の紙分のもあることは書冊を裁々大きく
見せるまで、これまでの紙分を使ふことも あしくはない
が、実は全く無駄な尾まるものだ、一本の巻紙だけで
七枚の五分の一葉りが可なり大量となる。別して何の

数十萬の大量の注文を作る場合ならば、印刷屋（ならびに）
大数となる。今私が印刷を引受けてある主婦の
友の印刷部数は五十四一万となるが、これを基礎と
して五分の値引をなすとすれば、ザット巻紙二十本
で當る巻紙一本の価格は四十五円もあるから
五十円とすれば、七千円の無駄が生ずるのである。莫迦
らしい話だ。印刷屋の言ふ通り何んぴとも
無かつたる位である。機械の為め一回の損失
発行に巻紙二十本を要するとすれば、依頼者
は黙して言はぬのもこうした道理もある。況して輪転
機の操縦で、此の値引をさせるとすれば
どうから、依頼者は多く機械を操縦する人を

依托するを仮とするは印刷屋の切つぱつまつたことである。
が操縦の責任と面倒かけるのも改めねばならぬ。
故、僅かに五分の無駄が七千円の損失となる
こと此の一例で徴すべしである。

○二月十七日の会が七十二回の延長となり春風会
開会の日に下つてゐるが、春の前夜は風雨で
午後は雪中を立つて保養し、春風会は寝床
から移つて往つたやうな譯だ。春風会は
寒暖は修羅で二回の降雪は寒を今年解け
ず庭内雪色で満ちてゐる。良かりしも悪かりしも
コンナ寒の節に生れたことは初めて感じたもしだ。
新年一年一度の今年此から出発
疾を力めて出発

しかが今命の恩師の板本橋であつた。此人さえ自
分の寿像を頼むと云ふ話向かあるとたんか十五
名位の出席と動くとたつぶ二十数名の出入り。新橋
からは芸者衆の外に杉井郁次も来た。余の侍醫板の
改上伝義栗城氏の中間。城平さんも出席して二つ
くる賑いのこと。席上余に寿像を頼るの挨拶が
あつたので第一自分も謝辞を述べた。自分の
謝辞の冒頭の言葉は前に述べたコンナこと
さい氣一部と生んだものだと言ふ一節であつた。話を
次いで言へば人間もの氣運であるから此点を放す
るは惜しいもの此の折りである。自分自身も多
流感を冒かされて寝所からめ出て、ここに

東京製本

陽にやうまた出来てある。無論先生の誕生をお祝ひ
でさるこうに感服したのだが、此日は寿像まで
頂戴する仕合せ。ものも謝する。辞を述べるに次第
である。お体の中もん自分は寿像を欲しくこの
男ひである。此年落くえんる経験がある。ことを
次へと時るへお断りをしたが押切ひあつたのん
お許しが無く今又載くやうなことをうつた。自分
は近年写真を取らることが嫌ひで二十年ばか
り丈人と一日人ひ写したことがある。新洗面の後
る鏡と新たにことがるえんる先境を入れて
レワ一杯の砂面を見ることを拭しろいからひあ
る。年が三十も若かつたら、左まで厭くこもるう

此度あらためて、現在の貴方のお姿を見ることは、誠に心地がします。満堂の
皆様は、御存じあるが、本人の自
分は、似て似つかぬ、いなむしろ、唯此衰顔を見
て始めて自覚の對するごとき思をなすのみ。
ビ、翁と相忘れて顔が皆のけぞる。係し此の
しわくちゃの赤顔を織意毫(赤毛)のごとき筆
さるこゝやうに心者が皆ほめる人此方の甚こ動
ハ、幸に紫色多栃海(活)君も彦の氏ちまた
から私くらしも屋く謝辞を陳べ終らるの。栃
海君も級修中染の人ひ夢を各傳云病弱
の体を心ゑ人ひあるの。因つの人の赤心

榛原製

壽　春城先生

挾霜詞筆自縱橫經國初心
托青英七十昂人不老溝
門桃李映春城

一辱知　田代亮外拜

から私の像を彫刻されることは私の高き情とする所
である。光栄を以て之を受ける。美人ひも撫然するのうち強公もあるであらう
が、コンなしわくちゃな顔の御願を心ゆくまで
骨折[illegible]が[illegible]実に[illegible]甲
斐がある。と云ふのは成功の喜味であるが、本像を
作るに苦心した美人の心の陽を傷することが出来ない。
[illegible]の利がある。然る者の藝術が[illegible]
入る[illegible]の志願の百枚が暴
露するから、自慢の溜在を免かれる。毒南の
本人は[illegible]喜ぶ。こゝに然心を
受けつゝあるとの前に接吻が[illegible]

の特徴で、藝術家は美化を許さるゝとすれば、百枚
をもつまれ出すことを[illegible]術家の本意であらう。私
は此像が誘生の[illegible]を[illegible]つけて心
高[illegible]の念を得る。[illegible]
次の習癖[illegible]現異[illegible]
[illegible]現[illegible]
像のことをきゝたが、[illegible]
[illegible]
いうことを[illegible]
味ある一點が[illegible]
私は美[illegible]
私と異る謝意があるであらうと云ふやうな

真摯の意を強くして謝辞とし
恐縮を感ずることを最初から辞退したるとの
為に出席を見合せたるとの
記念として取り集めし意味の酒次四五の演説があ
り此大江之交の板井郡治中地租平石徐三郎
陸上山義[illegible]等の、私に関する逸話の中に
私の説に忘れ[illegible]知れざるものの多かりし。元
角私を褒めそやすことが多いので、自分は知って
面白く感ぜず、賛成し多少の解釈をしたり
北目娘が菓子を高く売り来り今盛に欲つと
義政も席に来て其を助け前回よりも輝つ
此今もあるとの自分の感覚も幸に此今で回復

複原製

することを得た。事の去るに臨み今回を以て
大概を記すと云ふ

十九の記

○本伝は教業中文行学を以て特長の
尚志を以て学問大内青巒先生に就き
六尺と称する長文を、東洋倫理と題し
賀古雅の家為に花論を吹聴の為めに力
を尽すこと四若者の大の学の生涯の実業をなすこと
と云ひ且の東洋倫理書庫を開き学徒
個授し東京帝国大学の教授
席をひらきて遠近の学徒
きこと多し、業績特筆すべき
[illegible]年の記念会を東京

口繪解說

「千日尼御前御書」第三紙と要法寺藏寶「大聖人御影」

本號の口繪に揭げた御眞蹟は、「鉄內」第二十卷、「遺文錄」第十九卷の、「千日尼御前御書（類一〇五四縮一二五二）御眞蹟全篇七紙の中の第三紙である。

此の御眞蹟は、從來「千日尼御前御書」と名けられ、佐渡國阿佛房妙宣寺に存在したが、御文の內容は、千日尼への消息でなくて、宛名は國府尼御前で千日尼へも共通の御賜書である。隨つて消息中の『尼ごぜん並に入道殿は彼の國に有時は、人めををそれて夜中に食ををくり或時は國のせめをもはゞからず身にもかわらんとせし人々なり』とは、國府入道夫妻を指された。夜中の供養は阿佛房夫妻のみではなかつたのである。

しかるに、此の御眞蹟中、何時の頃よりか、第三紙を何れへか散逸し所在不明となり、現在妙宣寺には殘六紙だけを調卷してある。ところが此頃東京谷中大圓寺の檀方某氏から、大阪の信士岡嶋伊八氏が、家寶として讓り受けたものが此の第三紙である。所在不明の御眞蹟が出て來た事は、こんな悅ばしい事はない。御文は、

其功德すぎたり又濁世に法花經の行者のあらんを留難をなさん人々は頭七分にわるべしと云々

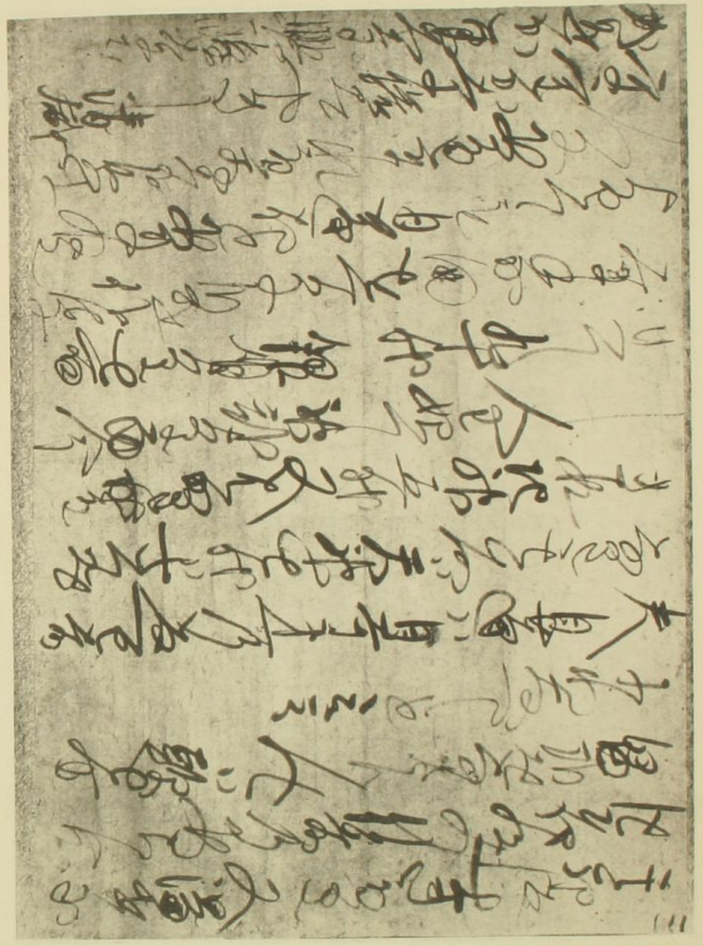
夫日蓮は日本第一のゑせ者なり其故は天神七代はさてをきぬ。地神五代又はかりがたし人王始て神武より當今まで九十代銀明より七百餘年が間世間につけ佛法によせても日蓮ほどあまねく人にあだまれたるもの候はず

守屋が寺塔をやきし清盛入道が東大寺興福寺をとある。これについて田中先生は、妙宣寺で再び紛失しない方法がつけば、宗門の公事として、これを妙宣寺に奉納することを岡島氏に勸告せられ、氏もその保證が十分につけば、さういたしてもよろしいと告白されてゐる。

○

つぎに要法寺藏寶の「大聖人御影」は、從來は寫眞石版のもので拜んでゐたが、それに依ると、構法において中山水鏡の御影よりもなほ硬いところがある。今度改發號の卷頭を飾るべく、寫眞撮影を懇願して許されて見ると、むしろ彼の妙國寺の御影よりも、身延奧院の摸本よりもなほ柔かいのである。

全體から拜すると、彼の身延奧院藏模寫のものと、御服裝も、御態度も、御容貌も、御經から、机等の調度までも、大體上ほゞ同一樣に出でゝゐる。たゞ聖人の御背に白折屏風が立てられ、御頭に小松原の刀痕が印されてゐるのが違ふ。背の屏風は足利時代の肖像畫などに、時に見るものゝやうで、またその刀痕は、一般に『眉間に三寸の疵』といふが、大聖人御自筆には、たゞ『頭の疵』とある。この畫眉間又は前額ではなく、頭部の右横の方である。隨つて寫生的の波木井御影や



新發見の「千日尼御前御書」
（東京谷中大圓寺）

國寶の玉澤御影にも見えない事になる。而かもこの疵は、同一形式の、身延奥院藏、または妙國寺藏のものにはなく、中山水鏡のにも見ないに係はらず、それがあるのは、特に要法寺の方で繪師に畫かしめたものか、それとも奥院藏、妙國寺藏等々のものは、不吉とでもして除いたのを、此の繪師が特に畫いたのかであらう。またその位地も、傳說か、想像か、或は寫生か、等々が問題になるが、寺の傳說も、史的明確さを持つてゐないやうである。

若し忌憚なく吾等のおもふ所を陳べしめば、身延奥院藏の原本が、現の奥院に傳はつてゐれば格別。でなければ、堺妙國寺のものは、或は奥院藏といはれるものゝ原本でないかとおもふ。若し然らざるも、第一轉を下らないかとおもふ。また此の要法寺のは、いかに古く見ても足利末期寛正前後、宗門各派が、互に連盟調和してゐた頃に、その原本又は第一轉から摸寫して、これに意匠を加へ、折屏風を背に立てゝ、御頭の疵をも印したものでなからうか、と想像したい。

奥院藏のが存否明かでなく、妙國寺のが、明かに寫眞に感じ難いまでに、絹地がやけてしまつてゐる今日、同一畫樣としては、此の要法寺のものが、幸ひに背の白屏風の爲めに、御影がクッキリと明白に寫眞に感ずるのは、まことに參考に値ひする幸慶事である。

たゞし御眼のくばり、御顏のうつむき加減など、御影の全體としては、妙國寺藏、奥院藏の摸寫に比して、少しく自然を缺いてゐるやうである。これ等三つの中では、妙國寺藏のものが、一番精彩があるやうに見受けられるのは、僻める眼であらうか。

とはいへ、この要法寺の御影は、中山水鏡御影、妙國寺御影と共に、全日蓮門下に取つて、今日では十分尊重せられねばならぬものであらう。

因みに、この御影の今の表裝の巾地は菱形井桁の中に、橘の枝付の金襴模樣であるのは、それが德川期のものに屬することが察せられ、同時に興門派で、鶴の丸を聖人の御家三國氏の紋とし、井桁に橘の紋を忌むやうになつた時代が、此の表裝以後に在りはしないか、とさへおもはれる。

また二月號の雜誌「日蓮主義」の卷頭に、日本三幅として、圓德寺藏の『日蓮聖人御影』と稱するものが、載せられてゐた。その手法は、到底鎌倉時代や足利時代のものではなく、宋畫の手法は勿論寧ろ洋畫の描法の幾分も、ひろく知られてからのものと見られるのみならず、何よりも欺き難いのは、御讀經の經卷の數である。

眞に古き聖人の御影は、それが御讀經像でも御說法像でも、もし經卷が置かれてゐれば、悉くみな十卷法華經である。中山水鏡、身延奥院、妙國寺、要法寺、さては玉澤の國寶、池上の御說法圖、妙香院の御像、大野本遠寺の御像、みな然らざるはない。所が彼の圓德寺藏は八卷である。これは八卷を一部經としたる德川時代、それも中期以後のものたることを、物語るものではないかと吾等はおもふ。

御影の御前に、十卷經が描かれてゐるか、八卷經が畫かれてゐるかといふだけで、ほゞその時代を判別し得ることも、一般には知られてゐてよい事である、と思ふから、餘計な事だが、こゝに添加して置くことにした。

なほ次號には、これも最近に、大阪の森繁天氏の手に這入つた「兄弟抄」の散逸せる斷片の半枚、および特に撮影を許されたる、下總中村日本講寺藏寶、富木日常師の彫刻と傳はる「大聖人御影」を掲載する筈である。

なほ本號御眞蹟の撮影は、國社會員大角日藝君が奉行した。

（山川智應）

稿の稿本なる大抵執筆の年月を記するが例なれどこれまの例もなく外に無山公御稿一冊あり、これは其立公の係りたるものなれど海舟子なる故生れ執筆なりを如何なる次の稿なるんか紙なれ四流廿八年九月廿日成未完の朱書あり此上は美濃紙本なる故半紙本なる故細筆にもなる外交編一冊あり、幕末の外交始末を叙したるこの也、尚幕末の史料を年次順に分ち半紙本二百枚の程のものなり、史料索引と異し、朱書なる四流廿八年病後史料の稿書を読し地索引を作る七月なりしかるとあり、此のあり引を作りなる云思あべし、外に美濃本なる史料と異なる一冊あり天保八年七月廿五日の日付あり、蘭学者の抄録なるか長士の長也も附してあり、長士は中等教科書日本亭国史の編纂に下したることあるなるべし、その稿一冊あり、又孔子の法華と題する漢文の書稿あり三十三枚の美濃紙本長方形なり、此なる漢文なるかなれども人と巻尾の跋あり

長士稿後を接ぎて長士四十三年この漢文を為さんかあるべく一部二十冊の書を後し美濃紙の準備を為さんハ月末なる九月書きあり前後十日を要したるなり而してこの稿の稿本なる

榛原製

明治三十一年九月廿二日午後四時半

梅廉先生深夜

北書いまゞ熟読の取るけんるも孔子為を訪くことを
九度し或ハ斯文学会もも海涙しる者ハ北
外れ梅廉倫志と異しとるは綱領にもあり
る草稿数ハ世家に係るまゞのくして遠く市場に出
こハ何故ことを書庫に付くハ梅廉の主張ハ
めて為る中を美押くうん。主義をの手を
りとるこのボックく出るとを、元ん野と梅廉に縁
故有ることあらさんども、然中梅廉の為に成
この少のまゝ、先生の父石橋が子の為め輪の
ゝ義風新法もの十冊もあり福地り為め

榛原製

れ元んハ事業[illegible]位ハ故い　二月廿日記
志かく志実ならや

こゝ陽と平家ゝの刺利二十年と日あり自ハ
梅廉を聯志せしむる秋金ハ先士の稿ものを
獲ゝる事の際と言ハ[illegible]附記を為すべ
一吉ハ獲ゝる文故中ゝに洋文の文法を授
きゝ数家あり先士の洋学ハ孫とすゝ迄る
代ゝとなるこんも係有すべし

○二月廿四三の所者の出仕市長流を事務柱
聯を新ゝ者ゝ好ゝ尚海の白雪の詩
書あるゝゝゝ、秋の杉古事も梅すぐく書ハ
美るゝゝ平家の出ハ世海を未一とゝ

[illegible]

六郡橋上望雲雲偃蓋重重保樹風　倚楷逢
山迎酒伴誰知絶境自[illegible]

文化七年巻庚午春十[illegible]

市酒亭白雪　[illegible]二十八[illegible]

昔[illegible]年[illegible]と[illegible]駅[illegible]
家[illegible]
[illegible]
市路家の祖也　前年北家に[illegible]白雪の新酒の[illegible]
高[illegible]一巻を[illegible]数問し[illegible]
[illegible]家の什宝として珍重して可也
[illegible]一冊の[illegible]を[illegible]小田路久武の

複原製

[illegible]集序[illegible]と[illegible]久
[illegible]地[illegible]の大著
[illegible]
[illegible]久武の著述[illegible]
[illegible]
本の由[illegible]可也

二月廿三日記

○二月も既に二三日を剩すのみ[illegible]
の寒さは[illegible]
[illegible]
立て終日筆硯に親しん[illegible]
の高い日比[illegible]
[illegible]

金所一之

市島先生正

謙

香宇
号雲　合作

多い男性と長会いさうなれば、時間のことも比べて、
ことを番しく少へれば。此人い学うと道文学会
時代に時間の数を受けたことがあり、好奇の
心を喜び知識の清潔の後出をしてみるや
うな関係で時間と交りが人うるも続くものの
如き。此人の今六十四五ばといふん、若いうち趣味
とするマラソン時の権威と中心に外国の
選んで、獨逸迄まで、マラソンの長くてきた経
歴もあり、マラソンの長時間もある外国も此
人の校と見て文の姿勢の中の思ひ
無駄のないもの。
やうなものと京都に日本にいマラソンを性

、病める者は醫師に往け
、弱き者は歩け
、健康なる者は走れ
、強壯なる者は競走せよ

標原制

而して之を心得たり而して之を考へるべきが、体育の上より最も大切なる目こと、日比野が熱心と主張する所を少けんも極の前理があるべし乃ち左の役員を推めをおく

標原制

自然型に即したる人間體育の主張

——歩法及走法の說明及効用——

日比野　寛

人間の構造を大別すれば、其眞中に腰がある、腰の上に胴と首とがある、腰から下へ脚が二本さがつて居る其二本の脚が人體を運ぶ爲めの作用を司つて居る。

人間は通常眞直ぐ歩き、又眞直ぐ走る樣に出來て居る。歩いたり走つたりする任務は脚に托せられて居つて腰の上の胴も手もただ脚が其役目を果たすに都合のよい樣に邪魔をせぬ樣にじつとして居ればよいのである。

だから歩くとか走るとか云ふ場合には、唯脚のみが特に體力を使ひ、腰の上に在る總ての機關は、各自が分業付けられたる使命を守つて其位置につき、其職分以外には絶對に體力を使はぬ樣に神妙にして居るべきものであるから、胴及首は直立不動の姿勢を確保し、兩手は緩かに下方に垂れて居ればよいのである。これが身體を構成する機關の各が能く正しく其機能を全くする自然方法であるのだ、此正しい自然姿勢で眞直ぐの直立姿勢で身體を運べば、歩く時でも走る時でも一歩一休の調子で、前へ進むことになるので、右足は一歩毎に一休し、又同じ調子で相手方の左足も一歩毎に一休することになつて、幾らでも樂々と呼吸の切迫なぎを痛感することなしに走り續けることが出來るのだ。

かう云ふ一歩一休と云ふことが合點できれば、一歩一歩に體力を決濟して、前の一歩と次の一歩と體力的聯絡なく體力を切斷的に使つて前進することになつて、普通人の走る樣に一歩一歩に勢を積み力を加へて行くやり方と大變に相違のあることが合點せねばならぬことを結果するのみならず、同時に自分の主張する歩き方走り方が最優良であつて最經濟的であるのみでなく、何里走つた後でも直ちに鐵砲なぎでも狙ひ撃が出來る程に呼吸は穩かであることが實驗的にやつて見ることが出來る。

右の樣に、自分が主張する姿勢ですれば、歩き又走るには、脚の膝關節は殆んど使はないで、膝關節のない眞直ぐの一本の樣に脚を前方に運ぶのであるから、足の裏は自ら後ろの人には見えぬことになる。かの普通足の裏が後ろの人に見える樣に歩るき又は走のは、脚の膝關節を使つて脚の下部を曲げて上げる時間と上げる體力とが無駄であるのみならず、一歩一休が出來ぬのであるから疲勞も又一層であることを知らねばならぬ。

自分が說明するが如く、人間の自然型なる眞直ぐの姿勢で歩を運ぶ時は、足の蹠が地に就くの際、蹠全部が殆んど同時に地に就くと云ふ樣なものの踵が先づ地に就くのである。そして、前に進まんとして足が地を離れる時は、足先きに稍力を入れて引き上げるのである。けれども、足の裏が後ろから來る人に見えるまで足先きに力を入れて後方へ脚を曲げることは全く間違ひだと思はねばならぬ。斯樣な間違つた歩き方や走り方を一刻も早く直して、人間の自然型なる正しき姿勢の直立直行に立ち歸へるならば、快く歩くことが出來、又快く走ることが出來て、國民の各々が快歩快走を體驗的に感知する樣になることが出來、我國家の富强に至大の好影響を及ぼすことであらうと確信して居るかくて、健康は歩るくことによりて得られ、强壯は走ることによりて得らるるものと體驗的に確信付けられて居る自分は、歩けば健康走れば强壯なる標語を創作して、正歩正走快歩快走を宣傳し奬勵することが、一日も猶豫すべからざる國家的事業であることを力說し高調せんとするものである。（文中走ると云ふは普通に走ることを言ふので、短距離中距離等スピードを主として疾走する走り方は、膝關節により脚を後方に曲げ手をも使つて跳躍の型になるので短中の走程により、それぞれに相應はしい姿勢を要することは勿論の事である）

歩く時や走る時の眼の着け處は、上體の直立せる姿勢にて二三丁程先きの屋根とか梢なぎとかの高さのものを正視する樣に構へ、時々二三間前を視て、小石とか水溜りとか凸凹とか泥濘とか、其他の小障害でも之を避ける樣に氣を付けるのは必要の注意である。

人の知る如く、脚には肺や心臓を初め内臓の一つすらも着いて居らぬ。呼吸を營むことに關係して居る内臓の一つすらも惠まれて居らぬ脚を使つて走るのに、走る者が一歩一歩に呼吸の切迫を實感しながら何故にかうなるかを少しも怪まず疑はずに、當然の事の樣に早合點して居つて、其走り方に根本的に錯覺がある爲めに呼吸に影響することが異常であることに氣のつかぬ人の多いのは今日の體育運動界やスポーツ界の恥辱であるのみならず國家及人類の福利增進の爲めに、體育の根本と云ふべきこの重大事に着眼して、一刻も早くこれが矯正を計るべきものである。

熟ら社會の生活相を見ると、吾々の丈夫と云ふ狀態にはそれぞれの程度がある。健康狀態を普通狀態としてこれを第一線とすると、健康以上の强壯線は健康線の上に在る。又健康線の直ぐ次ぎの下に病弱者不健康者がある。これを醫線と名付けて第二線に在るものとする。又其下の第三線は死線と名付くべきもので、これを葬式線僧線と別名することが出來る。即ち吾々の生命を線別にすれば强壯線・健康線・醫線・死線とすることが出來る死線は墓線にして生命終了場の永眠線であつて、吾々の成るべく遠ざかるべき線である。吾々は第一線の健康線に立ちて退却せぬ樣に頑强に戰はねばならぬのみならず、常に健康線を躍進して强壯線上に勇躍奮鬪することに心掛けねばならぬ。これが、吾々の平素の願望であり、又この願望の爲めに力戰すべきものであるのだ。そして、健康線上に頑張るのには姿勢が第一である。かの體育論は先づ姿勢論から始まらねばならぬ。姿勢論から始まらぬ體育論は砂上の樓閣であると云ふも失言ではなからうと信ずる。今日世間の體育家の多くが姿勢を閑却して體育に熱中したり體育論を完成せんとして居るのは慥かに十分に非讃せらるべきものであると信ずる。

普通人の現在姿勢は、人間の自然型である歩くときは直立直行なる姿勢、坐つたり椅子に憑つたりするときは腰より上部は眞直ぐにして臍の上に横線を描き出さぬ樣の姿勢をすることに何時でも十分の注意を爲し、この眞直ぐが習慣性になるまで氣を付けるのである。元來この姿勢は生まれ付きの姿勢で、純眞なる小供の姿勢がこれであるのだが、小學校へ通學する年頃から、頸の邊や腹の邊から前屈して脊中を猫の樣に蒲鉾なりにするのは、あまりに自然に反した逆姿勢である。こんな反逆姿勢で以つて健康體を作り上げんとするのは抑間違つて居るので天罰を受げざらんとするも豈に得んやで、姿勢の惡るいことから不健康を招來することは、色々とあるのである。

吾々が人間の自然型を保つて居りさへすれば、血液の循環は全く正常に行はれ、呼吸は一呼吸一呼吸が正常に行はれて健康呼吸が立派に出來るのである。けれども今日の我國の如く、腰の上に安定すべき腹部や胸部や頸部を正常の位置に落ち着かせずに却つてそれらを前屈した變な不自然型をして居る人の多い處では、體育デーを行ふ前に姿勢デーとか正歩デーとかを行つて、體育法を根本的に立て直すことが極めて大切のことである。ここに着眼せずして、從來の如く單に體育デーを行ふのは眞に寒心すべき限りである。

長距離を歩る時の歩巾は、大中小の三通り位にするのが有利である。特にスピードを要するとか、又は疲れたとか云ふ場合には、小さい歩巾を用ゆるがよい。そしてあまり足を高く上げるのは損あつて益のないことである急いで走る時には、ストライドによるかピッチによるかの二方法であるが、大低はピッチによつた方がよい。尚ほ又歩く時でも走る時でも、身體の重力の焦點を腰の中央に置、て、其焦點が蓋の二動搖せぬ樣、妹上のあるが、

同時に地に就くと云ふ樣なものの踵が先づ地に就くのである。そして、前に進まんとして足が地を離れる時は、足先きに稍力を入れて引き上げるのである。けれども、足の裏が後ろから來る人に見えるまで足先きに力を入れて後方へ脚を曲げることは全く間違ひだと思はねばならぬ。斯樣な間違つた歩き方や走り方を一刻も早く直して、人間の自然型なる正しき姿勢の直立直行に立ち歸へるならば、快く歩くことが出來て、國民の各々が快歩快走を體驗的に感知する樣になることが出來、我國家の富强に至大の好影響を及ぼすことであらうと確信して居るかくて、健康は歩るくことによりて得られ、强壯は走ることによりて得らるるものと體驗的に確信付けられて居る自分は、歩けば健康走れば强壯なる標語を創作して、正歩正走快歩快走を宣傳し奬勵することが、一日も猶豫すべからざる國家的事業であることを力說し高調せんとするものである。（文中走ると云ふは普通に走ることを言ふので、短距離中距離等スピードを主として疾走する走り方は、膝關節により脚を後方に曲げ手をも使つて跳躍の型になるので短中の走程により、それぞれに相應はしい姿勢を要することは勿論の事である）

歩く時や走る時の眼の着け處は、上體の直立せる姿勢にて二三丁程先きの屋根とか梢なぎとかの高さのものを正視する樣に構へ、時々二三間前を視て、小石とか水溜りとか凸凹とか泥濘とか、其他の小障害でも之を避ける樣に氣を付けるのは必要の注意である。

人の知る如く、脚には肺や心臓を初め内臓の一つすらも着いて居らぬ。呼吸を營むことに關係して居る内臓の一つすらも惠まれて居らぬ脚を使つて走るのに、走る者が一歩一歩に呼吸の切迫を實感しながら何故にかうなるかを少しも怪まず疑はずに、當然の事の樣に早合點して居つて、其走り方に根本的に錯覺がある爲めに呼吸に影響することが異常であることに氣のつかぬ人の多いのは今日の體育運動界やスポーツ界の恥辱であるのみならず國家及人類の福利增進の爲めに、體育の根本と云ふべきこの重大事に着眼して、一刻も早くこれが矯正を計るべきものである。

熟ら社會の生活相を見ると、吾々の丈夫と云ふ狀態にはそれぞれの程度がある。健康狀態を普通狀態としてこれを第一線とすると、健康以上の强壯線は健康線の直ぐ次ぎの下に病弱者不健康者がある。これを醫線と名付けて第二線に在るものとする。又其下の第三線は死線と名付くべきもので、これを葬式線僧線と別名することが出來る。即ち吾々の生命を線別にすれば强壯線・健康線・醫線・死線とすることが出來る死線は墓線にして生命終了場の永眠線であつて、吾々の成るべく遠ざかるべき線である。吾々は第一線の健康線に立ちて退却せぬ樣に頑强に戰はねばならぬのみならず、常に健康線を躍進して强壯線上に勇躍奮鬪することに心掛けねばならぬ。これが、吾々の平素の願望であり、又この願望の爲めに力戰すべきものであるのだ。そして、健康線上に頑張るのには姿勢が第一である。かの體育論は先づ姿勢論から始まらねばならぬ。姿勢論から始まらぬ體育論は砂上の樓閣であると云ふも失言ではなからうと信ずる。今日世間の體育家の多くが姿勢を閑却して體育に熱中したり體育論を完成せんとして居るのは慥かに十分に非讃せらるべきものであると信ずる。

普通人の現在姿勢は、人間の自然型である歩くときは直立直行なる姿勢、坐つたり椅子に憑つたりするときは腰より上部は眞直ぐにして臍の上に横線を描き出さぬ樣の姿勢をすることに何時でも十分の注意を爲し、この眞直ぐが習慣性になるまで氣を付けるのである。元來この姿勢は生まれ付きの姿勢で、純眞なる小供の姿勢がこれであるのだが、小學校へ通學する年頃から、頸の邊や腹の邊から前屈して脊中を猫の樣に蒲鉾なりにするのは、あまりに自然に反した逆姿勢である。こんな反逆姿勢で以つて健康體を作り上げんとするのは抑間違つて居るので天罰を受げざらんとするも豈に得んやで、姿勢の惡るいことから不健康を招來することは、色々とあるのである。

吾々が人間の自然型を保つて居りさへすれば、血液の循環は全く正常に行はれ、呼吸は一呼吸一呼吸が正常に行はれて健康呼吸が立派に出來るのである。けれども今日の我國の如く、腰の上に安定すべき腹部や胸部や頸部を正常の位置に落ち着かせずに却つてそれらを前屈した變な不自然型をして居る人の多い處では、體育デーを行ふ前に姿勢デーとか正歩デーとかを行つて、體育法を根本的に立て直すことが極めて大切のことである。ここに着眼せずして、從來の如く單に體育デーを行ふのは眞に寒心すべき限りである。

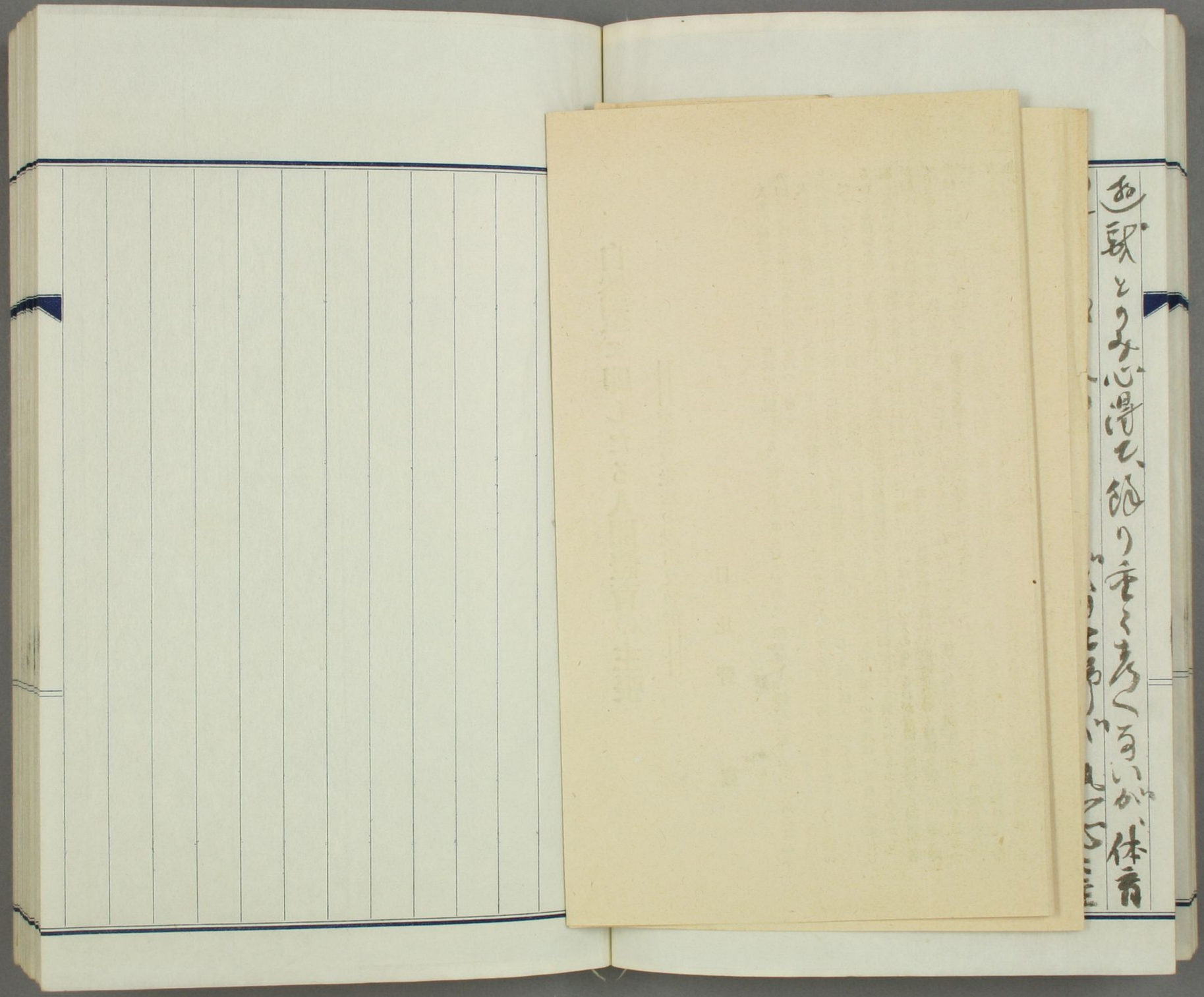
長距離を走る時の歩巾は、大中小の三通り位にするのが有利である。特にスピードを要するとか、又は疲れたとか云ふ場合には、小さい歩巾を用ゆるがよい。そしてあまり足を高く上げるのは損あつて益のないことである急いで走る時には、ストライドによるかピッチによるかの二方法であるが、大低はピッチによつた方がよい。尚ほ又歩く時でも走る時でも、身體の重力の焦點を腰の中央に置いて其焦點が盛りに動搖せぬ樣、殊にあまり上下動せぬ樣に一歩一休の調子と、ピッチもストライドもあまり亂暴な變動のない樣に一歩一歩を運んで居れば、心臓や肺やの重要な内臓諸機關は、腰からさがつて居る脚が寸刻を爭つて驅けて居ても、左程に其動作を感ぜず殆んど靜かに平生の如く働いて居るから、かういふ方法でやれば、一時間走つた後でも脈數は僅かに八十乃至九十位しかに上らぬ。現に自分が一九二八年七月、獨逸伯林のホッホシューレイで一時間走つた時は八十七の脈數であつた。又昭和四年六月十三日、我陸軍軍醫學校で一時間走つた時でも、自分の脈搏數は同じ樣に八十乃至九十であつた。かう云ふ風の走り方は、軍隊とか消防とか飛脚用として、全く至寶とせられねばならぬものである。自分は、此走り方を日比野式走法として宣傳して居るのだが、決して自分丈が特有せる方法ではない。

苟も人間である以上は、何人にも適用せらるべき、正しい合理的で科學的で經濟的である歩き方又走り方であるのだ。此の歩法及走法は、學校へ登るまでの幼稚者は自然にやつて居る自然的のものであるにも拘はらず、稍長じて登校通學する位の年齡者以上になると、全世界幾億の人々が、この自然に背戻した間違つた姿勢で不思議がらずに平氣で居るのは誠に不可解である。又殘念至極の事であるのだ。

普通に歩いたり走つたりする人を見ると、脊中が彎曲して居るか腹部を内屈さして居る。俗に猫脊と云ふ型に墮つて居つたり、又は臍の上に横筋を作つた前屈型の見苦るしい體形をして居る。世間の大概はさうであるが、折角眞直ぐで立派な人間型に生れた萬物の靈長たる吾々が、こんな風態の醜穢なる體型に墮して居るのは遺憾の極みである。今日の如くスポーツ全盛の時代には、格別體型に注意せねばならぬ。レコードを高むる上に於ても、又身體の强健を增して行く上に於ても、合理的の姿勢を完成することは重大な仕事である。吾々はスポーツマンとして成功せんとする前に、體育家として成功することに志すことが、先づ以ての必要事なることを確信して居るのだ。徒らにレコードに憧れて、心身の無益なる衰耗を招く樣な愚を演じてはならぬ。吾々は人間の自然型なる、正體形を壞はさず十分によく保存して、立派な正姿勢と正呼吸をして、先づ健康を作り上げ、確かに健康線上に立つて而して後、スポーツ線上に活躍することが正當なるものと確信する。（昭和六年一月）

體育訓

病める者は醫師に往け
弱き者は歩け
健康なる者は走れ
强壯なる者は競走せよ



○三月六日、閑を乗じて神田の書肆二三を訪ね、
同者を渉る僅かに左の三書を購ふ、

一 鹽略

一 芝蘭園一覧

一 樺島浪風記

鹽略は道光甲辰の撰にして四巻を合綴一冊とし
仁和趙信意亦著すところ、其目云任典、史事、治法、名義、詩文、
雜記、鹽の一部門を一書に輯めたる珍也、内
地に始めて見るの書にして、芝蘭園一覧は名優中
村芝翫の評判記なり、洞霞亭高嵩橋鐵成
補閲する所にして文化十二年鐫成の序あり、

此書すべて阿蘭陀の一部地誌にして、
概して彩色の特徴を以て図録を書き、種々の俗詩を地名
しるし書きあるのみ、ふざけ板いとる書なり
阿蘭陀趣味の影響を個板のうへに見
るうを思へば多のの真をきを得るに、稀
なる便ハ用ひ難きの不意也、樺島浪風記は中島廣足の紀行
なり、廣足、功名の余を以て志を海外
に長崎の役人なりしに、人志方之倫
して志崎を出発するに、元と同船
風に遇ひて、身を海中に投じ、辛ひして命

中嶋廣足

又蛙磨

名は春臣、通稱太郎、櫨園又黄口と號す、肥後の和學者、世〻細川侯に仕し、安政三年京に游び、時に長崎山に住し、本居大平門、（時長崎に浪華にとどまること五年、数へを請いもの日に多く、）遂に浪華にとどまること五年、数へを請いもの日に多く、時は二百人程もありきとぞ、文久元年秋、故郷に帰り、國學師範役に任ぜらる、翌四年三月二十一日、年五十一（を以て卒す、（一に七十三とも）畫を嗜み、自畫賛世に多し、著述詞の八衢、補遺、詞の玉緒、補遺、玉霰窓の小篠、雅言類聚等五十一部（大日本人名辭書、國學者傳記集成）

本月複製本解説

せつきやうかるかや　上　一冊

（原本　藤井乙男氏藏）

『用捨箱』下之卷、「淨瑠璃本刊行の初め」の條に、晋其角の『焦尾琴』及び『操年代記』の文を引きて、明暦、萬治以前には淨瑠璃の版本なかりしやうに思ひゐたりしに、大阪の友人其樂子より『八島』一冊を贈られたるを見て、始めてその以前に版本のありしことを知れるよしを叙し、さて曰はく

難波より此やしまをめぐまれて後、説經淨瑠璃〔三莊太夫〕といふを得たり、（中略）可惜、卷尾に西洞院通り長者町とのみ記して年號及板元の名を闕、又友人豐芥子同説經淨瑠璃〔かるかや〕を得たり、是には年號ありて、太夫の名を不載、此さんしやう太夫の草紙と合せて、寛永中大阪に與七郎といふ者ありて、はやく説經の印本もありし事を知れり、此二種は三冊に綴て段を分ず、（中略）按るに、やしまと三莊太夫の畫は、全く同筆とおぼし、かるかやは異なり、七人比丘尼の畫人なるべし

と述べ、『かるかや』上卷の初丁六行と上卷の最後の半丁とを摸刻して掲載しをれり。

今回わが會の複製本に用ひたるは、實に右の豊芥子舊藏のものに外ならず。現に藤井紫影博士の書庫中に儼存せるものにして、今尚ほ説經節本の最古版たり。同博士は雜誌『典藉之研究』第二號（大正拾四年九月發行）に此書を紹介せられたりしが、その際、口繪として、上卷の初半丁と最終の半丁とを（即ち『用捨箱』に掲げられたる所を）縮寫して收載せられき。今回のは全部の複製なり、本會が此刊行によりて江戸古聲曲の研究に貢献するの光榮を得たる

先づ一冊を出し、以下の未刊のものあり。

を得たり体験録なり、和文家が到る危難を体験し、之を傳さん業に載せ、例の駿る稀れ、
ゑゑ、まき者ゑゑ、ぬ北方い助命まの任律を
繰述して委曲を尽し一読人をして汗を振ら
しむ、北冊上下二編と合ゐ二冊まの北の風風
の及び海程々の方面殊に志摩港の難破船の
模様を詳述せり、書い安政五年八月九
十四日ゆ出帆、翌十一日ゆ破れ人七名死し
ゐ事の大風実あるべし、天変地殊誌の材
料として北書い記臆す価するもの、右書の
序に記すべきい、前月稀出複刻わ合ゐ指も
最古の浄瑠璃本せつきやうかるかや三冊の内

先づ一冊を出し、其の来歴い左の如くなる。

本月複製本解説

せつきやうかるかや　上　一冊

（原本　藤井乙男氏蔵）

『用捨箱』下之巻、「浄瑠璃本刊行の初め」の條に、晋其角の『焦尾琴』及び『操年代記』の文を引きて、明暦、萬治以前には浄瑠璃の版本なかりしやうに思ひゐたりしに、大阪の友人其樂子より『八島』一冊を贈られたるを見て、始めてその以前に版本のありしことを知れるよしを叙し、さて曰はく

難波より此やしまをめぐまれて後、説經浄瑠璃〔三荘太夫〕といふを得たり、（中略）可惜、巻尾に西洞院通り長者町とのみ記して年號及板元の名を闕、又友人豊芥子同説經浄瑠璃〔かるかや〕を得たり、是には年號ありて、太夫の名を不載、此さんしやう太夫の草紙と合せて、寛永中大阪に興七郎といふ者ありて、はやく説經の印本もありし事を知れり、此二種は三冊に綴て段を分す、（中略）按るに、やしまと三荘太夫の畫は、全く同筆とおぼし、かるかやは異なり、七人比丘尼の畫人なるべし

と述べ、『かるかや』上巻の初丁六行と上巻の最後の半丁とを摸刻して掲載しをれり。

今回わが會の複製本に用ひたるは、實に右の豊芥子舊藏のものに外ならず。現に藤井紫影博士の書庫中に儼存せるものにして、今尚ほ説經節本の最古版たり。同博士は雑誌『典籍之研究』第二號（大正拾四年九月發行）に此書を紹介せられたりしが、その際、口繪として、上巻の初半丁と最終の半丁とを（即ち『用捨箱』に掲げられたる所を）縮寫して收載せられき。今回のは全部の複製なり、本會が此刊行によりて江戸古聲曲の研究に貢献するの光榮を得たる

『理齋隨筆』巻之二に、

すべて蠻國の名にイギリス、ヨウロッパなどゝいひ、又は蘭人の持てるソンガラス、ボウトルなど奇妙の稱呼なり、往年平賀源内が持てる平日の道具へ様々の蠻名を戯れに名付けたる中にも風流の蚊拂を製したりくるくゝと振廻せば蚊悉く取れる様の器物なり是を號けてマアストカアトルと呼びたりしは面白き變名なりとて其頃評判せし事ありおかしからず哉また俗に萬年糊とかいひてのりを木の葉の中に入れその上を紙にて包み押出して遣ふやうに隅の方へ少し穴をあけたるものに變名を付けし人ありオストデールまた泣上戸をエフトホエルまたかの覺えのわるき人をスントワースルなど名付けしものありみな源内にもとづくものなるべし。

とあれど、必ずしも然りしに非じ。禁書解令に次で前野良澤、杉田玄伯等の研究者相出で、豊前中津の奥平候、桂川甫賢など、自已の名を蘭語に譯して得意なりしことなど傳へらるれば、それらを源内が直似たるべし。また木村蓁葭堂の正妻が多辯なりしよりシャベットルといひ、愛妾の寡默なりしよりダマットルと異名されし由、これも亦物産本草の學に遊びし一景物なり。

の真偽斷ずべく人の謂ふる所と雖、其墨跡の
尾ふる長いるは偽物なるべき也

戒吟詠

大事因緣重佛山、為僧不可又何顏、可悪近世聰
明種、老邯推敲每字間
一僧少世訓音俄有還、竹之志、因賦一偈
拉之

襟上烟霞著衣、酬恩全屬弄恩榮、相逢
相照羅籠眼、何用區區苟里情
先度ふる使を以て和歌五章を贈られ侍り

其の作五章

武時宿雪鎖巖崖、便覓蒹葭步入懷、猿叫
一聲人不見、四擕只有陳雲堆
此花雖成輪墨功、人才淵叢内家景、素君
漸以歌吟世、盛業係未有初
性倩杉根曝受日、起收枯骨而寒炉、曉天
攬轡朝天去、知有山中此樂無
仕宦雖成蓋代功、不如学道破迷蒙、百年
身世一炊黍、何用完来方丈空
岩穴野花識者稀、尚君書信到柴扉、似樹
樹梢過寒曉、故遣童人送物衣、
芳春雨

山房春已暮、悠悠無誰與、誰期、我亦聊逍遥、殘花泣
雨時、

旁秋三日抵)古山有感(二首)

忍見前朝古苔痕、傳聞猶有住孤魂、
元格上殊多感、不為紅桃三夕陽、

冬夜即事二

挑盡寒燈冷焰微、病身夜深怖寒威、
繁霜灰中爆、苦火星々老人衣、
雷風一夜骨將摧、起攜炉灰已成田、寒月
侵宮揺影度、自憐我更疲於物

冬夜即事

知生無人問、心逐夜色清、衾寒雞裏夢、村
遠不聞更、燈照蜻蜓眼、時生蚯蚓聲、
偶如推澗底、星斗一天明、

松下納涼

松陰密處更如宜、三伏炎蒸恐不知、悔我從来
用心拙、或因春月斫無枝、

拾枯

屋後岩壑拱木下、盡作收拾夕陽候、我亦解言
枯者是、歸程便覺上肩輕

盞中日月第三人、鑪内山川乃半升、簡素日安然
若知足、應無世上不勤僧
代宮殿風先設、竹簟靜時氷始生、今夜曙

寒耿無寢 又聽屋後雪猿聲

宿野怕孤牛皆心

別家稍來挾跡頻尋詩最苦夕陽收山菊不

合吟中老年皆到有產憂

樣原製

扶桑珠寶 目錄

南都祕笈

（巻子本は軸。粘葉本、胡蝶装本、摺帖は帖。冊子は冊とす。）

正倉院御物 雜集 一軸 聖武天皇宸翰 解說一冊
同 樂毅論 一軸 光明皇后御筆 解說一冊
同 杜家立成 一軸 光明皇后御筆 解說一冊
同 詩序 一軸 解說一冊
聖語藏御物 隋經 一帙
同 老子 一軸
同 蒙求 一軸
南京遺文 一冊 附卷一冊
南京遺芳 一冊 附卷一冊
天平餘光 一帖

萬葉祕林

御物 桂本萬葉集 一軸 解說一冊
藍紙本萬葉集 二軸 原氏所藏 解說一帖
御物 金澤本萬葉集 一帖 解說一帖
天治本萬葉集 一軸 福井氏所藏 解說一冊
高松王府 元暦萬葉集 六帖 解說一冊
元暦萬葉集大成本 十五帖 解說一帖 附卷一冊
春日本萬葉集殘簡 一帖
類聚古集 十六冊 中山侯所藏 解說一冊
國寶 古葉略類聚鈔 五冊 附卷一冊
仙覺律師奏狀 一軸
桂の落葉 一軸 解說一冊

芸帙祕芳

高松王府 秋萩歌卷 一軸 野蹟 解說一冊
國寶 神樂和琴祕譜 一軸 御堂關白筆 近衞公所藏 解說一冊
信義本神樂歌 一帖 安倍氏所藏 解說一冊
重種本神樂歌 一帖 安倍氏所藏 解說一冊
催馬樂 一帖 宗尊親王筆 鍋島侯所藏 解說一冊
御物 倭漢朗詠集 二帖 權蹟 粘葉本 解說一帖
御物 倭漢朗詠集 一帖（原本二軸） 權蹟 雲紙卷子本 解說一冊
高松王府 白樂天詩卷 一軸 藤原行成筆
御物 七德舞 一帖 堀川左府筆
承德本古謠集 一軸 近衞公所藏 解說一冊
亭子院歌合 一軸 俊忠忠家二筆 木村博士所藏 解說一冊
一品經懷紙和歌 一帖 西行寂念寂蓮等懷紙 福井氏所藏

御物　金澤本萬葉集　一帖　解說一帖
天治本萬葉集　一軸　福井氏所藏　解說一冊
高松王府　元暦萬葉集　六帖　解說一冊
元暦萬葉集大成本　十五帖　解說一帖　附卷一冊
春日本萬葉集殘簡　一帖
類聚古集　十六冊　中山侯所藏　解說一冊
國寶　古葉略類聚鈔　五冊　附卷一冊
仙覺律師奏狀　一軸
桂の落葉　一軸　解說一冊

芸帙祕芳

高松王府　秋萩歌卷　一軸　野蹟　解說一冊
國寶　神樂和琴祕譜　一軸　御堂關白筆　近衞公所藏　解說一冊
信義本神樂歌　一帖　安倍氏所藏　解說一冊
重種本神樂歌　一帖　安倍氏所藏　解說一冊
催馬樂　一帖　宗尊親王筆　鍋島侯所藏　解說一冊
御物　倭漢朗詠集　二帖　櫂蹟　粘葉本　解說一帖
御物　倭漢朗詠集　一帖（原本二軸）　櫂蹟　雲紙卷子本　解說一冊
高松王府　白樂天詩卷　一軸　藤原行成筆
御物　七德舞　一帖　堀川左府筆
承德本古謠集　一軸　近衞公所藏　解說一冊
亭子院歌合　一軸　俊忠忠家二筆　木村博士所藏　解說一冊
一品經懷紙和歌　一帖　西行寂念寂蓮等懷紙　福井氏所藏
西行上人歌集　一帖　藤原定家手澤本　伊達伯所藏　解說一帖
御物　更級日記　一帖　定家筆　解說一帖
近代秀歌　一帖　定家筆　有賀氏所藏　解說一冊
金槐和歌集　一帖　定家所傳本　松岡氏所藏　解說一冊
百代草　一帖

我が朝、國初以來、皇道の興隆宇内に比なく、奎運年を逐うて旺なり。ここを以て、古典の今に寶藏せらるるもの尠からず。しかも、或は祕府に尙藏せられ、或は個人の珍襲する所に係り、これを目にし、これを手にすること、洵にたやすからず。明治三十八年以降、予、東京帝國大學に和歌史を講ずるにあたり、これら古典の印行が、現在及び將來の學界を裨益するところ多かるべきを信じ、扶桑珠寶刊行の大願を發したりき。しかして、萬葉集の校本及定本を選ばむ資材として、まづ萬葉集の古鈔本の複製にたづさはり、そを萬葉祕林と名づけつ。尋いで、正倉院御物のうち、我が上代文化の背景をなせる典籍文書を撮影し、南都祕笈と題したりき。この外、國文學上の研究資料たるべき珍籍を收め、署して芸帙祕芳と曰ふ。かくて、御府および王府の允許を忝うし、また諸家の快諾を得、帝國學士院の補助、故森東京帝室博物館總長、上田萬年博士の斡旋、橋本進吉教授、吉田知光、田中親美二君、竝に、同志諸士の協力をうけて、ここに、扶桑珠寶全部三十八種の印行を完成するを得たり。顧ふに、この間大正辛亥の震災に、古典籍のまのあたり湮滅に歸するを見て、いよいよこの事業の徒爾ならざるを思ひ、種々の困難を冒し、精進の功程を積み、今日あるを致せる、天人恩賚の厚きを深く感銘せり。今、南都祕笈、萬葉祕林、芸帙祕芳の目錄をしるして、多年の大願の成れるを自ら祝福するものなり。

昭和六年二月

東京帝國大學文學部講師　文學博士　佐佐木信綱識

寒秋每寢又聽屋後雪猿聲

宿野人家

孤牛背心

別家稚來扶頭尋詩最苦夕陽收山翁不

○三月八日の数条中下谷之堂に於て札差條目帳二冊を得たり。一冊の表紙に左の如く記しあり

安永七戊戌年七月十八日

牧野大隅守殿御書取

於浅草寺会所

札差仲間條目帳

他の一冊の表紙に

嘉永五子年四月改

札差條目帳

とあり、共に仮会所書[各]なる事を出したるなれば行事の印あり、伊勢屋庄兵衛方にあるなり。

安永の分は享保九年七月大目付前守

横原製

御定の以来廿年甚敷相違の儀有之

しかるに近年に成て再度越中守

和漢上申会所[流]紀定書大谷紙三十

二枚の例の清家書[流]なるの也、えい行書

なる仮会所書に一通して

嘉永五年分の一冊は原本前者と比較するに四倍

もあるなり。享保以来の仮会所の沿革と

記し嘉永五年再興の時まで仮会所

百九人の名も記しあり。巻尾に

前書之仮仮会所

仰付候旨被仰渡

向後大切に相守申候以上

銀々表渡方

五月四日

天王寺組　行事　印

片町組　行事　□

森田町組　行事　□

伊勢屋清左衛門

札差捷書寄帳

三町捷札差　印

此二冊ハ即ち当時の原書也　札差の次第ハ刊

複原製

本書なれども古い生きる当時の記録也　巻中

に掲載して可也

○往来の道路の敷地の敷地を掘り出すに至る迄、亜面に敷

地の敷地を掘り出すに至る迄、則ち屋敷の墓地の

ことを掘り、則ち屋敷の墓地の敷地を掘り出す、道路の敷地の敷地の

うえやこの流れ　阪味　あるえ

掘り出すにいたるまでのえ

自動車を門に待たせ演説す

飯田　ものすごく如人　見えた演説す

けものもきゝし如人　黄みのるい沿　阿羅漢あれ

濱辺の第一番にえらんだ酒の肴

あまのり海の風の吹くまにおもへす

ちろり酒湯ふこのうまの味ノもよく

濱ぶんを加へ寄るもけるこも

樺板の大きさテーブルちろり酒

おこ松はも鮫味のようも

金が復活ハ則ち左の如し

銀座有一小店号割烹雛濱心

調日味を美不拘家を貪ふ也

遠方好就此家、典雅客交情

飲且食、称為縄屋と雅北図

樋原製

為一人往村子敲官家門者、

繋以印必数首、西無歌也

幸一の喜也

濱辺の図に越しうる未江行きえすをもを

心動き細川市左の文徴を伴ふ西午前に

行く、此刻立庶ハ組せ資生堂樹ありこあ

り、新橋の支店とあれど本店ハ新橋にあること

又ちの不論縄屋なるもの場内極めて清潔

数基の長方角のテーブルを置く樺材原

廿四寸許の分量のものを盛つき書にす、先づ

吸物を試む、味噌のようし、甘鯛のおしるこの文風

味よし、酒ハ行四りスを入るを例とす、酒ハ梅

正家さんと高砂に酒をうつす人六瓶を倒す十二時
こゝろ大勢の客列る、中ゝ婦人を伴ひ客家族
連もあり、上等座敷の故か、下級の客を見
ず、秋空の時花千の繚頭と共に謝絶した
受けず。北家と主婦と出張の為
〳〵上方へ出かゝり、明朝あがりに飲まんと
北家こゝと辞あり。三月十日也
○坊間谷大晶寫すの杉浦国一帖を婚ふこ
んに迄〳〵常盤屋の再版しなるまで国八
枚十六頁有り、巻首に頼春水の序あり、巻
尾に中山和為の和歌を収む
原版の天明丁巳春鐫まる本とあんもの

樓原藏

こんに迄書籍に載つて見さる所のこの也杉浦の
四ようしんこん高山樗牛列る、まゝ面白を伴の、杉浦
○もの淡白と列る、まゝ焼き魚酸を味ふ、白魚
軟主景味拙、きすこん、野菜煮等、多子の飯し食を
銚、なきこん、野菜煮等、多子の飯し食を
千口り二瓶を倒し呑けんを瓶を飲む、十二時まで
ごゝろく来客あり、多くの客(酒)と又くなる盛飯
七二三人ある北家と快閑なる女中七人あり、
マチキンとして上乗なる也　三月十一日
○濱口首相を不思議に更生を得たりと云へ、まゝ
徳廣は田舎にてあるへ。生活漏人る中ゝ代現閣
数かやかましいの中ゝ、列頭、麻薬から頭痛へ

診斷より其姿……

首相を出させ度くない人々の焦慮

更生の歓呼と期待を一身に集めて十日初登院をした濱口首相のその後の容體がとやかく噂されてゐる

◇——◇

登院第二日の十一日の方が良くなつたといふもの、いや悪くなつたといふもの、政界各派の批評主つてまち〳〵だが、これはどれも首相の登院委を眺めての各自の主觀といはうか、鵜田、眞鍋、湯浅の三主治醫の診察によれば「十日と十一日は全然變化ない」といふ斷定を下してゐるのをみればとり〳〵の噂もいはゆる見る眼で、こゝ兩三日を經過してみなければ樂觀も悲觀も尚早だといふことに落ち付くのが公平な觀察であらう

◇——◇

首相の容體についてはなか〳〵のやかましやといはれてゐる鵜田、眞鍋兩教授が大丈夫の折紙をつけて登院させてゐるのだから、首相が次第に回復に赴いてゐることは否定出來ないにも拘らず病魔した首相の初登院委をみて驚いたのは與黨も野黨も一樣であつた

◇——◇

かくて一方醫師の言葉を信じながらも首相の容體に危惧の念を抱いたのは當然、萬一無理をして再起出來なくなつてはといふ與黨の心遣ひ、そんな場合に國民から非人道とかとやかくいはれてはといふ野黨の顧念、いま少し生氣の出て來るまで成べく顔を出さぬ方がすべての方面に對して得策ではないかといふ政府與黨幹部などの苦慮、これらがゴッチャになつてさしもの期待で登院を待つた首相をこんどは成べく議會に出すまいといふ姑息な感情が議會のいたるところで目にみえぬ氣圧氣となつて動き初めた

◇——◇

かくて十二日はまあ〳〵一日登院を休んだらといふことに關係與黨幹部の意見としてあらはれるやうになつたが、三醫師とも十二日は登院して質問に應じて差支なしといふことを十日夜語つてゐる位だから今まで醫師の方が却つて强硬だつたのと逆になつたわけ、これでみても關係與黨幹部連がこゝ一兩日の苦慮が察せられる

◇——◇

又それだけに首相が今後無理押しをするやうなことはあるまいから、まづ醫師のいふとほり回復のみちにあることに間違ひはないといふわけで、問題は首相が回復するまで政府與黨幹部が與黨の士氣を鼓舞し慰げられるか、野黨の宣傳、作戰に乘ぜられずに切抜けられるかといふ點にあるといへやう

出席せねばならぬやうになつた。

政味方誰んかえ

そもいとくしい

限りで、真紐上

の病人である。政

治い氷のごとく冷

かさなれば、無意

悲もとるいらとも

ハこく。えが果し

て人道であらう

か。首相の出席

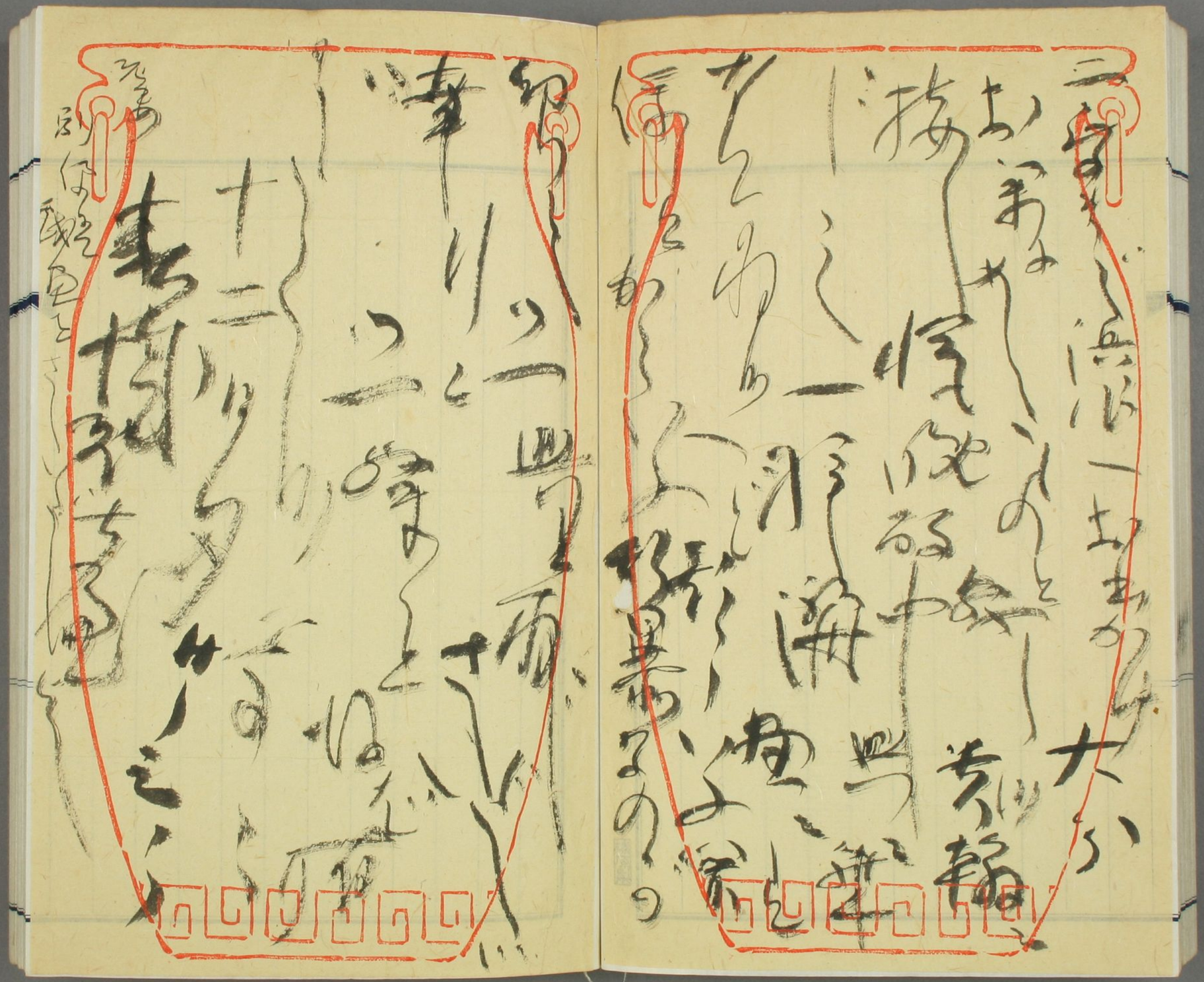
樣原製

と悲とが政局に影響すること大きく、内閣の運命も関係があるのも、身命を賭しての首相の出席いきなりとするまゝ真と係和の忍びるべき痛りさそあるこんなことなつけ人び例閣を一束するべ、者晩の作戰び立案的の義義を八言い雖へ。どうせ首相い勢ん的ふるるめと日本

て枯ての運命が定まるとみるかい思へるが実心まき再びである。於今四月の新年び首相の動静を見ることれ胸塞かるの感る抜くるへ。

○就んて為ふ者運と演説を二ヶ月まで延ばれることを中止すると言ふ通から戦書を六月七日きれ

の出席を左に叫ぶ和く



○橋に就ていろ〳〵書きつけて見たが、道祖と云ふことがいくらかある。日本在来の橋の一特徴も少べきは、欄干の柱の上頭に擬寶珠のあることで、日傳れば邦人まで橋まで無くてもよいと云ふやうに思はれてゐるが、よく考へて見ると、佛教法奥いまである。佛教印一を設すと果して橋が日本に齎らされ佛教の形が建築に反映されたことは日本の外まで世界のどこまで無いと云ふことだ。

建築の保強れ国のこと釘めず木材を裝ふことは大切なことである。大化改新の後の宮殿建築まで是迄この様の様式に模倣べきものであるが、ことに強まで無論必要であるが、若しからこんを好まない国がある、希臘の如き支那のやき赤瓦邦のやきも、何故かこんを好まないのか。建築の場合に一時釘材を箝めることがあつても、落成まで取り外すことをきらつてゐるのは、矢張り国民の好みと皆恥ずかしがらであらう。壁でも塗る家に地木を裝しても別に目に觸れるから、敢て忌まる及ばうと思はる、外部に現れて裝飾となる所に保の強材を輝裝すると方形長く長方形などの格好を出すと云ふことが嫌いなもとであるかも知れんなぁ。

田中智学は往年日本橋改造の際に、帝都中一の橋たる相応の装飾を要するとあって、擬宝珠は宜しく純金で鋳造すべしと、種々の理屈をつけて府庁に對し建議をしたことがあつたと伝つたが、これも一エピソードとして加へるべきである

東京市の建築例には嘉吉の神社の如きは橋とこそるべきかと思ふが、それを凱旋門とする説がある。あれは蓋し時代錯誤や敵の亡霊を慰めくらいを湖中生涯を家とした、其の名残りであると云ふのも一説である。

○昨夜帝国劇場で催した大英和辞典完成の披露会に出席し、活いきした自分も祝辞を述べた。

北辰社で辞典は廿七年の暮頃から出来たもので印刷は五年前に着手し、六ヶ年を経た。自分は全部の書物に就て全部が責任あることを云ふたが、自分が干渉した点は四百五十頁の大日本地名辞典が完成した明治十三年から十三年ちょうど前の事である。

歳月は実に早い、北辰社は世の中の表裏を二倍以上の年月を経ているのに、まだ一倍半も故障が無いとは云へない。然るに無碍にいくも完成したことは、感慨も深く多くの学者が長くこの辞典を待ちべき自分は最後であつたので、学者に就ては言ふことは聡し、坂本・市山・高橋氏に就て、演ある所があつた。下野保氏は昨年死が

大内氏と密に交を結び書簡を懐中して西比叡を
の方面中小野氏が日高山の前身東洋銀行
座を開いた趣意書を、朗誦し、坂本龍馬も
小野氏の書生であつた頃の敵愾を著した玄関
番と過ぎつた。自分も其頃坂本氏と小野氏の注
意を拂ひつつあつた様の次自身も其の商
会関係から、小野君が成さんとする洋行
事業を継承し、小野君の笑顔の事を行な
て成功するのが出ようといふ信念を思ひつつ
あつた。小野君は実に後継者を得たよ
てある。小野君が東洋銀行を開いた際の信條は
天下第一の図書を出版する

標原製

事も甚だ苦しかつたが一業と長も苟くもかしこまつた
字書の如き永久に国生命あるべき所の思耐を
要する仕事は坂本氏は堅実の人であり多くの有為の士
を出版し時成功したのは小野君の信條をどこ
までも守つたのである。小野君は北市商会も
あることく図書の價の高きを誰に対しても
尤大の学者の恵に廉價ひあることをも小野
氏の注文通りもあるとのことあつて坂本龍馬を偲
ばれ

○明治廿年洋行の幸楽び限門会を開い
たのは自分も出席した。大隈侯と伊藤侯の四
十名程の出席して可なり賑つた。北庫も自分

三月十五日記

から来年は恰度光長の没後満十年となるから
光長を記念する為に相南の計畫を立たい分
にも準備の為り掛り後に別に会のあることもあるから、差向き多く蓄金を挙げたいと思ふて自
分らも蓄金千円を拵へる為に開いて打合を
為て推薦さんに一寸蓄金を頼みすることを
やつぱり追つて日を定めて更に開かすることに
とした。来年は恰度光長の創立満十年
周年に當るので是の機会に何とかしてレゴレーション
をやる筈だから、大限侯の記念会をもえん
と呼度まるの必要もある。限り会の光長のつた
生涯が会員となつてもあるから過きるから、茂記

東京製

人に度々募つた実際の働きは限り会が仕
るとその方針もある。どんな計畫を立つべきし
かは蓄金の考あるを待つべきもんが、どう
も相南の募金もせねばならぬ。相南の結果も義
くらいもあるから、金額を数を問はず計畫を定
める必要もある。侯の墓を前に何か献することも一
考を要するし、記念の考の相南の書物を考
行することもあるが、河内の道一下仕
事と思はれるが自分の方が相当に蓄積する為
後の年はとても蓄積ちゃんと為て居しとの事
北の家会員から聞く光長の為ちゃんと
らい会いんをおもしろく感じた。

（三月十二日記）

榛原製

の玩具的小品を散乗ごとん過ってみるが一向金ぬのものが見当らぬ。僅かに獲たものを挙げると、インキ壺が一ツ、こんぺい糖瓶である。方形のガラス器である。が、純日本式の素匠を凝らし蓋の上と四隅に紙の遊子花を附けたものが紫さんである。何人か造る特色は知られぬ。尚、銀製の小器が二ツ、手の入った。一ツを手提灯と模したものが楽の紋章が二ツ彫ってある。辛夷人形玩具のやうなものが、胡椒などの粉末の菓味を入れる為のもので、模型北京の下駄を捻り出すと子供仕掛とちがって別くやうなものである。上頭まい戦つかの孔が穿ってある。同じ用途に

榛原製

つれ今一ツの銀器で下駄、一双である。これも唐が開く仕掛になって菓味が入る。上頭る六張孔がある。昨年もあつたが銀製の瓶形の菓味入を獲た。が今年は手を入れたのを日程のようである。人形の部では金田京康が植輪風の両裏雛一双を作つたのを手に入れた。下方上に三の前日おちうえび来たから取敢ず雛壇に飾つたが、自植輪らしく出来ものを、久しく土中に埋もれたるの如く、古色の蒼然たる風に雅致がある。高山のキヤンプを模したかの形ものが尤も つれもこれも架中のものとした。室内のハスキーと双が壁に立かけてあり、宮おりを雪

山西の連[illegible]が見へ、火燈がありテーブル其他の調度が豆かんてある。小西[illegible]一寸板がある。野球のスポーツをかさく木彫[illegible]のがテラボウ[illegible]くるのも有チと受手の二基を燈ふ此。どこも此のつ此のかい洋かでるへか人物の面貌姿勢が[illegible]くらしい。外に象牙の紙入用の香[illegible]を得た基き金蒔絵がしてあり、其ーハ[illegible]あつ此[illegible]あれが今い飾れる見るあとうち他に二三あのとも物ともきつけるものよでるへ。

横原制

人造人間ガクテンソク

大阪毎日新聞社事業部長
理學博士　西村眞琴

私たちは、人間を描いたり、刻んだりする術をもつてゐます――石器時代の藝術の中に、それがうかがはれます。又子供等の作品の中にも、多分にそれが認められます。つまり、人造人間を創るなどは、その慾望のいよ〳〵大きくなつたものです。アメリカのデューウイ・エム・ラドリッフはテレボックスといふ奴を造りました。この奴に、カード遊びの仲間入りをするのもあれば、電話の番人をつとめたり、水の觀測者の代りをするのです。又英人ウイリアム・エッチ・リチヤードの發明したロボット系のものは、金屬性の外殼をもつグロテスクな奴ですが、トーキングヂキルムの利用に著眼したので人氣を喚びました、演說をする奴、一定の質問に答へる奴、交通整理を動める奴、立關番をする奴等等、何れも電氣仕掛けの機械人形であります。

そこで、東洋生れの人造人間ガクテンソクは、これまで現はれた歐米のそれとは斷然製作態度を異にしてゐます――第一に原動力として空氣を利用した點が特徴の最も大なるものであり、第二に表情に工夫を重ね、寓意に思索をこらした結果全く別系統の人造人間としての最初の產聲をあげました。

人造人間の發達は、將來いろんなのを作り出すことが豫想されます。ところで實用主義の人造人間は、カレル・チヤペクのいはゆる無賃の勞働者が增加することゝなつて、人間と張つて職業紹介所の前に列をつくるやうになりませう。も一つの方は、機械的に驚くべき精功な人間の動作を學ぶ科學と、藝術的に美妙な姿態と表情を學ぶアートの握手によつて、もつと尊い人間性のにじみ出た人造人間を作るので、こゝに人造人間に二つの系統が出現します。

最近科學者の中には、生きた物質を作り出さうと一心になつてゐるものがあります。が、今は空想の範圍を超えて或種の有機物質が出來だしました。だから、今にも眞正の人造人間が創造されるだらうと夢見る人々がありますが、これは人間が飛彈によつて月の世界に生きて旅をすること丶共に、遠い未來の話であります。

但し、何事にも進化は認められます。ガクテンソクも、京都帝大典博、藤島博、朝鮮博、名古屋子供科學博等を經て次第に表情を加へ、發聲裝置に成功しとし〳〵、進化の跡を示してゐます。

―命名の意義―

人造人間に「ガクテンソク」と命名したわけは「學天則」といふ何から考へついたものであります。天則を學ぶといふことは宗教的にも、哲學的にも、また科學者の對象としても重大な意味があります。われ等の人造人間―學天則―もやはり天則を學んだ一作に、ほかありません。殊にこの人造人間を中心として、天地自然の物象をとり攬んで考案した意匠が、やはり、天則を說いてをりますから――ガクテンソク――といふ音を、そのまゝとつて、人造人間に名づけた次第であります。

―意匠に就て―

コスモスの胸章――われ〳〵はガクテンソクの相貌を整へるについては、決して一民族の型に捉はれることなく、廣く世界人類の中で、最もよいところを選めて、これを具有するために非常な努力をしました。それゆゑ、この作品には超人種的態度が一貫してをり、なほまた、時代にも風俗にも、一切拘束されず自由に創作しました。そこでガクテンソクの胸を飾つてゐる一輪の花章はコスモスCOSMOSのであります。コスモスといふ語は世界、宇宙を意味するところのもので、楚々として清雅な一輪は人造人間ガクテンソクの胸を飾るにふさわしいと信じます。

綠葉の冠――ガクテンソクの頭を飾つてゐる冠は、綠の葉であります。綠の葉は植物にとつて、養分を構成する大切な器官であります。炭素同化作用が營まれて、植物の生命支持に缺くことが出來ません。ひとり植物の養分が構成されるばかりでなく、人間およびあらゆる動物もまた、綠葉によつて作られた養分の供給をうけております。實に天日の熱と土の協力によつて、また、この綠葉の作用によつて一切の生物は、はぐくまれてゆくのです。かゝる貴重な綠の葉を冠としたことは、つまり大自然の恩惠の意を表すに外ありません。

靈感燈――古より偉大な働きをした人々は、一種の靈感にうたれてその動機を與へられてゐます。この靈感を象徴するために、ガクテンソは、左手に靈感燈を把つております。この靈燈が一度、額のあたりで光輝を放つと、ガクテンソクには、インスピレイションが感得されるとみるのです。さて、靈感燈の表現のために、六方晶の結晶體がもつ特殊の分光力を研究、利用しました。その中に胚まれた光源はこの寶石に通つて、五十有余の六方晶の尖端から同時に光芒を放つのであります。

鏃矢のペン――彼のモーゼは神の啓示をうけて、十戒を岩壁に刻みロンドン塔の幽囚は、一念凝つては爪の力ですら、この世の名殘をその壁に記したといひます。元來人間の思案を記錄することは、換言すれば生命の痕を遺すことであつて、決して輕々しくすべきではありません。わがガクテンソクは、この記錄のために誠を執つてゐます。しかも、かぶら矢をこれに當てました、と、いふのは人間は常に創作を心掛けねばならない、そこで物のはじめを意味する鏃矢を用ひてこの意味を、象徴したのであります。

記錄台――作者はガクテンソクの對つてゐる記錄台にも、大いに理想をこめるため、天地の物象を、次のやうに配しました。

中央上――全生物の勢力の根源である太陽（太陽には三脚の金烏が棲むとの傳說に因る美的な脚を採用す）▲左の上隅――すは雌性▲右の上隅――るは雄性の記號（陰陽を示す）▲雌の側――深き情熱の火焔と▲實り豐かな植物▲雄の側――雄性のもつ理性の自由を表徴する水流と▲もう一つは武勇と平和を象徴するかし、柳の類（何說による）▲太陽を圍む四生――蛙、蛇、雉子、むかで、その相貌ふ相互を考へると、最も恐ろしい敵であります、全體の關係を大觀すると、自然界の一切は平和を組成するために、有意義でないものは一つもないことがわかります。われ〳〵はあるがまゝの「天則」を學ぶことに精進せねばなりません。これを人生に呼吸する時においてのみ、人は存在の價値が見出されます。そこで天地の傑作である人間を模倣するこの事業には、元より機械以上のある意きものを思念せない、評にはまゐりません。

設の背景――機構の動きを映出するためと、又一面には在來の舞台藝術に於て背景がやゝ行きづまりを示してゐる折から敢然この新しい試みをやりました。鏡面に種々なる角度をつけ、機械美の諸相をそのまゝ背景としました。

―機構に就て―

人體や生物のもつ特徴に一歩近づき得ました、ガクテンソクの動作のかげには、複雜な機構があります。

空氣の利用――機構の原動力の一つとしての、空氣を利用した理由は、表情に重きをおくためでありまして、圓滑な運動を表はすに大切の使用によつて巧に解決することが出來ました。さればガクテンソクは上體を動かしながら、胸の呼吸による動きも現れ、同時に頭を背かせたり、口を開いたり眼球を動かしたり、頬をふくらせ耳を動かし、顎のしわさへも表はし得るのであります。

數十本のゴム管が顏面を初め、體の各部に分布されており、これが統一づけられてゐるのは、恰も人體の血管や神經系統に見る働きに類

―命名の意義―

人造人間に「ガクチンソク」と命名したわけは「學天則」といふ句から考へついたものであります。天則を學ぶといふことは宗教的にも、哲學的にも、また科學者の對象としても重大な意味があります。われ等の人造人間―學天則―もやはり天則を學んだ一作に、ほかありません。茲にこの人造人間を中心として、天地自然の物象をとり攝んで考案した意匠が、やはり、天則を說いてをりますから―ガクチンソク―といふ音を、そのまゝとつて、人造人間に名つけた次第であります。

―意匠に就て―

コスモスの胸章――われ〳〵はガクチンソクの相貌を整へるについては、決して一民族の型に捉はれることなく、廣く世界人類の中で、最もよいところを索めて、これを具有するために非常な努力をしました。それゆゑ、この作品には超人種的感覺が一貫してをり、たゞまた、時代にも風俗にも、一切拘束されず自由に觸作しました。そこでガクチンソクの胸を飾つてゐる一輪の花環はコスモスCOSMOSのであります。コスモスといふ語は世界、宇宙を意味するところのもので、整々として潔淨な一輪は人造人間ガクチンソクの胸を飾るにふさわしいと信じます。

綠葉の冠――ガクチンソクの頭を飾つてゐる冠は、綠の葉であります。綠の葉は植物にとつて、養分を構成する大切な器官であります。炭素同化作用が營まれて、植物の生命支持に欠くことが出來ません。ひとり植物の養分が構成されるばかりでなく、人間およびあらゆる動物もまた、綠葉によつて作られた養分の供給をうけております。實に天日の偉力によつて、また、この綠葉の作用によつて一切の生物は、はぐくまれてゆくのです。かゝる貴重な綠の葉を冠としたことは、つまり大自然の讚歎の意を表すに外ありません。

藤袴――古より偉大な働きをした人々は、一種の感慨にうたれてその動機を與へられてゐます。この感慨を象徵するために、ガクチンソクは、左手に藤袴を把つております。この藤袴が一度、額のあたりで光輝を放つと、ガクチンソクには、インスピレイションが感應されるとみるのです。さて、藤袴の表現のために、六方種の結晶體がもつ特殊の分光力を研究、利用しました。その中に胚まれた光源はこの寶石に通つて、五十有余の六方種の尖端から同時に光芒を放つのであります。

鎭矢のペン――彼のモーゼは神の啓示をうけて、十戒を岩壁に刻みロンドン塔の幽囚は、一念凝つては爪の力ですら、この世の名殘をその壁面に記したといひます。元來人間の思案を記錄することは、樂言すれば生命の痕を遺すことであつて、決して輕々しくすべきではありません。わがガクチソクは、この記錄のために鎭を執つてゐます。しかも、かぶら矢をこれに當てました、と、いふのは人間は常に創作を心懸けねばならない、そこで物のはじめを意味する鏑矢を用ひてこの意味を、象徵したのであります。

記錄台――作者はガクチンソクの對つてゐる記錄台にも、大いに理想をこめるため、天地の物象を、次のやうに配しました。

中央上――全生物の勢力の根源である太陽（太陽には三脚の金烏が棲むとの傳說に因る美的な幽を採用す）▲左の上隅――それは雌性▲右の上隅――それは雄性の記號（陰陽を示す）▲雌の側――深き情熱の火焰と▲實り豐かな植物▲雄の側――雄性のもつ理性の自由を表徵する水流と▲もう一つは武勇と平和を象徵するかゝ、樹の類（何說による）▲太陽を圍む四生――蛙・蛇・雉子・むかで、その相互を考へると、最も恐ろしい敵でありますが、全體の關係を大觀すると、自然界の一切は平和を組成するために、有意義でないものは一つもないことがわかります。われ〳〵はあるがまゝの「天則」を學ぶことに精進せねばなりません。これを人生に呼吸する時においてのみ、人は存在の價値が見出されます。そこで天地の傑作である人間を模倣するこの事業には、元より機械以上のある意きものを思念せない譯にはまゐりません。

讀の背景――機構の動きを映出するためと、又一面には在來の舞台藝術に於て背景がやゝ行き〳〵づまりを示してゐる折から散然この新しい試みをやりました。鏡面に種々なる角度をつけ、機械美の諸相をそのまゝ背景としました。

―機構に就て―

人體や生物のもつ特徵に一歩近づき得ました、ガクチンソクの動作のかげには、複雜な機構があります。

空氣の利用――機構の原動力の一つとしての、空氣を利用した理由は、表情に働きをおくためでありまして、圓滑な運動を表はすに大切な力の機動上の機微を把へる爲、大いに關念したゆゑであります。

ゴム管――空氣の膨脹力を送るために、ゴム管を使ひました。ゴムの伸縮性の妙味は、一般金屬製の機械では固定した什組全體が、根底から左右前後に大きく動搖すると同時に、それ〴〵細密な機段かの複式運動（例へば大波の中に小波が分派されるやうな重複的な活動姿態）を起こしめることは容易の業ではありません。が、この點はゴム管の使用によつて巧に解決することが出來ました。さればガクチンソクは上體を動かしながら、胸の呼吸による動きも現れ、同時に頭を背かせたり、口を開いたり眼球を動かしたり、顏をふくらせ耳を動かし、顏のしわさへも表はし得るのであります。

數十本のゴム管が顏面を初め、體の各部に分布されており、これが統一づけられてゐるのは、恰も人體の血管や神經系統に見る働きに讀するものであります。

血管と神經――人體には血管や神經が別伸運動の中に、順逆をうけると、運動が止りますが、こうした機構をガクチンソクにも現しました。かくて、この人造人間の製作が通り一ぺんのもので、動きさへすればよい、といふ機械以上に、生物のもつてゐる特徵に、せめて一歩を進ませようとした點が作者の理想であり苦心であり、興味でありました。

人間の呼吸作用――作者の理想を具現として、更に記述を進めると、人間の呼吸作用を模倣した點であります。人間は吸氣によつて血液が淨化され、血管を通つて身體の各部に行きわたつて、活動が起こるま・

石器時代の藝術の中に、それがうかがはれます。又子供等の作品の中にも、多分にそれが認められます。つまり、人造人間を創るなどは、その願望のいよ〳〵大きくなつたものです。アメリカのデューウイ・エム・ラドリッフはテレボックスといふ奴を造りました。この點には、カード遊びの仲間入りをするのもあれば、電話の番人をつとめたり、水の觀測者の代りを子るのです。又英人ウイリアム・エッチ・リチヤードの發明したロボット系のものは、金屬炸の外殼をもつグロテスクな奴ですが、トーキングフキルムの利用に着眼したので人氣を喚びました。演說をする奴、一定の質問に答へる奴、交通整理を動める奴、立關番をする奴等等、何れも電氣仕掛けの機械人形であります。

そこで、東洋生れの人造人間ガクチンソクは、これまで現はれた歐米のそれとは斷然製作態度を異にしてゐます――第一に原動力として空氣を利用した點が特徵の最も大なるものであり、第二に表情に工夫を盡ね、寓意に思案をこらした結果全く別系統の人造人間としての最初の發達は、將來いろんなのを作り出すことが豫想されます。

人造人間の發達は、將來いろんなのを作り出すことが豫想されます。ところで實用主義の人造人間は、カレル・チヤペタのいはゆる無賃の勞働者が增加することゝなつて、人間と競つて職業紹介所の前に列をつくるやうになりませう。も一つの方は、機械的に驚くべき精巧な人間の動作を學ぶ科學と、藝術的に美妙な姿態と表情を學ぶアートの握手によつて、もつと尊い人間性のにじみ出た人造人間を作るので、こゝに人造人間に二つの系統が出現します。

最近科學者の中には、生きた物質を作り出さうと一心になつてゐるものがあります。が、今は空想の範圍を超えて或る種の有機物質が出來だしました。だから、今にも眞正の人造人間が創造されるだらうと夢見る人々がありますが、これは人間が飛躍によつて月の世界に生きて旅をすること〻共に、遠い未來の話であります。

但し、何事にも進化は認められます。ガクチンソクも、京都御大典博、靈島博、朝鮮博、名古屋子供科學博等を經て次第に表情を加へ、發聲裝置に成功しどし〳〵、進化の跡を示してゐます。

す。が、ガクテンソクでは、先づタンクの中に空氣が壓搾してあつて、その壓搾力は、丁度潤化された血液が持つてゐるエネルギーと、同じ理で、各部に傳達されます。かくして、一度使はれ、壓搾力を失つた空氣は、排泄物として、所定の管からさつと廢棄されます。これは人體では呼氣に當ります。または腎臓の作用によつて、排泄される尿などのやうに、新陳代謝の機能上の必要に當るのであります。

	自然人	人造人間
原動力	食物、水、空氣	電力
蓄積力	體内各部の蓄積力	空氣の壓搾力（壓搾空氣）
輸送裝置	血管	ゴム管
動作	各部の運動	顔面諸筋、眼球、瞼、上肢、手指、發聲
排泄	呼氣、汗、尿、汗等（肺臓、腎臓、皮膚による）	壓力なき空氣（特殊のゴム管による）

人體の反射運動——自然に關係なくして起る無意識の運動をいふのです。例へば睡眠中に手足に何かさ觸れると、本人は知らずに反撥することがあります。ガクテンソクの運動には、空氣の壓力で統一されてゐるものゝ外に、マグネットを利用して、この反射運動に據して見ました。記錄をなす右手の運動は、元より意識的ですが、記錄の終りにピクリと手くびを上にはねるのは、この反射運動に當つてゐます。作者はこの動作を記錄のための動作に連絡つけながら、かつ反射的に運動さすために、新殊のマグネットの作用を利用しました。

マグネットの作用——記錄のための手の運動は一定でなく變化あるやうに、考案いたしましたが、更に手首をピクリと上にはねる微動を裝置することは、機械學上なか〳〵の難題であります。作者はこの點を偶々蛇の腹部の鱗が、地との摩擦によつて、爬行する原理に暗示を得て、在來なかつた電氣の電滅裝置を、案出利用したのであります。作物機の機構を研究すると、しば〳〵一般機械學に豫測することのできなかつたものを、發見することがあります。

慕悲の相恰——斯樣にして出來上つた人造人間が、果してどれだけ

の表情を具現し得たかといひますと、眼を大きく開いた時は、敏智に輝いてをり、半眼になつて和藹の台の上に眸を落した時は、三日月形の優雅な眉と相扶けて、慕悲の相恰が浮かぶ見透すとは出來ません。人造人間の耳は、一切を聴く爲に敏く、鼻は一切のものを嗅ぐのに、鋭かるべく、つまり天よりうけた感能に、缺陥のないことを、理想とするため鼻や耳の運動を與へたのであります。額の筋、頬部の筋、口の周圍の筋にも運動を與えました。これは歐米生れの人造人間と比較して、わがガクテンソクにのみある特異な點であります。新規な作用としては、かやうな、筋肉運動が非機械的で、血と息との通ふところの、温い人間的な感じとを融偏させた苦心點であります。

發聲——更に今回は發聲裝置をも加へたので、問つたり質問に答へることが出來ます。

人造人間の將來——われ等の把へてゐるこの原理を、盛々適切に利用してゆくならば、もつと複雜な動作が生れます。この人造人間が、生物學上の遺傳なる點において、意義がないとしましても、第一世人造人間制作のために、費やした數多の智識經驗は第二世人造人間制作のために、大きな貢獻をすることは、いふまでもありません。現に京都大學博士に出品以來、五度の改造によつて、その都度進歩をみております。

大自然の長い時日の潤太力によつて、進化發展したと考へられてゐる、大宇宙の力作である自然人の構制の微妙を眞似て、その精巧な動作を模擬することは、容易な業ではありません。私はこの製作に當つて、それ〳〵の分擔に長尾戊二、松村昌三兩君の熱誠な助力によつて、その第一世が生れ爾來長尾氏は益々改案を加へこの光榮のない大事業を助けてゐます。なほ今後も、一層努力を續けたいと思つております。

人造人間時代が來た。
そのうぶ聲が東に、西に聞へる。
——動く。笑ふ。呼ぶ——成長。進化。
成長は人の子にもある、犬の仔にも——
進化は生命の光だ。

あらゆる生命の友よ！
ヴァイオリンは、くすしく響く。
しかし、これを作つた人の手は、更に尊い。

地球はめぐる、時は流れる。
忘れてゐた豆のもやしが
三條の双葉を擡げて
すく〳〵と伸び出してゐる。

蕪し柳ははゝ笑みを
垂れるであらう

自昭和六年三月十四日
至昭和六年三月廿七日　會場　東京上野　松坂屋
生きた廣告博覽會
表情人造人間　ガクテンソク
出品　東京日日新聞社
大阪毎日新聞社

としては、かやうな、筋肉運動が非機械的で、血と息との通ふところの、温い人間的な感じとを傷つけた苦心點であります。

發聲――更に今回は發聲法習をも加へたので、解つたり質問に答へることが出來ます。

人造人間の將來――われ等の把へてゐるこの原理を、益々適切に利用してゆくならば、もつと複雑な動作が生れます。この人造人間が、芸術學上の遺傳なる點において、意義がないとしましても、第一世人造人間創作のために、費やした數多の智慧評論は第二世人造人間創作その第一世が生れ出る日に向ひ出發を加へこの方面のたしつ潤滑を助けてゐます。なほ今後も、一層努力を傾けたいと思つております。

人造人間時代が來た。
そのうぶ聲が東に、西に聞へる。
――動く。笑ふ。呼ぶ――成長。進化。
成長は人の子にもある、犬の仔にも――
進化は生命の光だ。

あらゆる生命の友よ！
ヴァイオリンは、くすしく響く。
しかし、これを作つた人の手は、更に尊い。

地球はめぐる、時は流れる。
忘れてゐた豆のもやしが
三條の双葉を擡げて
すく〳〵と伸び出してゐる。

蒸し暑はほゝ笑みを
垂れるであらう

自昭和六年三月十四日
至昭和六年三月廿七日　會場　東京上野　松坂屋
生きた廣告博覽會
表情人造人間　ガクテンソク
出品　東京日日新聞社
大阪毎日新聞社

○多義まぐれん偶ゝ二三を四題ふ、余もと斯る
固定を好まず、唯に光境と入つて時を之れを弄
することが強ち不快ならず、偶〻北等の如ハ今甚
だ少なし、在書を得んとするも能ハざる也、今獲
る所の、南れ星月夜、其氏「源氏」二帖三卷
あり、板下れと書きなる「あるそ」、挿画もあれど
これハスケッチ的のものも也、作あい墓々山人とあり、
実の俗名伯、夢々の稿本なり、序文の末に丁
巳三、伏とあり、丁巳ハ此の四十年と安政四年と
あり、此の末れ斯う書出版をなさるんとハ思
ひ難し、安政四年――即ち幕末、綱紀の弛み易き時
なるあるんか、北斎い考あり、一応後人に見る

文章決して拙なるにあらず、書画に多分著者の筆ならん、
曽文の地位の書をものし得たりと思はる。地方二篇
とあるは初篇もあるつらんが、それは刊行されぬか
否か著者の知らざるこの也、曽文は地著あること
と思ふ。曽文研究家は知らざるべし、「都
海音の読」と題する小本八一年漢文を戦
法を叙し一年画を收む。髮容江戸風なれ
ば江戸末幼の出版なるべし。画手の何人なる
やは判し得ざれども決して拙にあらず、男女の
態方自然なり。体格豊満なる所まだ[illegible]べし
他の二書は女道奥儀 男色秘法 百人一首 百人一撰紙相撲 標題なる大本
百人一首に倣へる往来物なれども、草子節用集

樋口蘆

に擬したるものなり、七十枚の上下巨冊中、いろ〳〵
の図あり女色は全紙なる巨つもあり、男色は鞍
頭に絵あり、色文の書きやうもあり、北海道
の事抵抗なるは、地方は上方版と異なり、
貝合の夢ものミ四十種を載せしことあるも「輝画」の
ごとく強人とするに、皆なる文本位のものなるべし。
の図書を貴ぶ。家蔵
上の諸作は存するものの
たこやのひめごと二冊
壺浦八枚 一巻
雪月小盃 倒書帖
浦人画枕 図 横巻

漢文陳口亟花影閣書

唯比こん等あるを過ぎず、北内雪蕉の画ハいと生田藤口侯の愛玩品なるを知る、極浦秘蔵国ハ武清の画と伝へられたりあり、清人画ハ国宝のやまと国しるるを各国と称あり、厂金屋毋ちゃ山雪の四花花影閣ハ宮ちゃを信夫姫和の朱批あり、北外

復梅影閣書画 六冊中の首巻

通俗如意君伝 上冊

光蕊外伝

陰名攷

刀巴心伝相法合

の数を為す、復梅影閣書画の首巻なる支那に遊して日本に在りて画を解めるい刀巴心伝相法ハ人相の上より色慾を判するの法を載せ、通俗如意君伝ハ艶珍本也

○時雨の為め紙ハ西幸吉の死を侍ちあるを北人の慶長聚聖の名人なりと推めも是れの人ひある西郷隆盛慶応の人ひ無論薩藩出身ひ、西軍の役る西郷の陣中ゐるれのかとうやらいふことひ助かつも、西郷ゐ国ゐのある鉄舟ハ頼人ひ城山ゐ一我西郷陣政の心歌を求め比、鉄舟も西郷の死を悲しむ情に於ては西と国ひてあるれのひ、ゐの清こ

座にて作りし歌が、例の[illegible]人の達人に達する云々の
発見歌である。西が講をつけて歌を唄い出し
北のが始まりで今い蓮唐琵琶と云へば必ず
之れを唄い弱る人口に膾炙するに至りしが
其実えんが海舟の作歌であることを知る人も
少なく、西の作する作品未だ充分に行はるを知
ることの少ない。西が頼んで海舟に作らせた所の北
の歌の魂があるのだから、北の任侠を忘れてはな
らないのである。海舟いまの歌を心つて誰んうま
直さセルのだが、あれ二三度程加筆した後だと
云ふから全く海舟の心のまゝだとも云へる得る
のである。あの歌のどうしても海舟である

樣原製

くはいまゝ[illegible]を強奏するまでもうしても
西で無んがるまゝの程西郷がある。勝は
とうに死んで西も今い新しく、併しも城山の琵琶
歌の悲々々永久に侍へるであらう。えを思ふ
と民衆歌を作る人は法典を必る人よりも偉いの法典
は或人傳へらるる時は変改されるが、一旦
民衆の侍のうた歌はいつまでも生命がある。海舟の
詩文なども有名であるとしても、えい時を経へば
一詩も侍へらるいであらうが、民衆的ひあるなら
也彼山の琵琶の歌が侍へる限り海舟の名も亡びず
るへ北の歌の場を伝へて西の歌の場を伝へて侍へるであ
ら。

○上野美術院に絵入を浮世絵展覧会があるので一寸のぞいた。報知社で発行の春夕美人画を前年刷いたものを載せると見せ掛りかしら格別の感想も浮かないようだが、蚊帳の絵の可なり多くあるのに出てゐたので、眼が感する所があつた。先づ蚊帳の図柄を挙げて見ると

三枚つき女客酒盛りの図

○蚊帳外れ美人蚊を焼くの図

美人蚊帳をつる図

かやの内の男女

かやからゆ身と一緒に美人喫煙の図

かやの中で美人団扇を手にする図

かやの内の男女

かやの中に美人浴衣の図

ざつと図柄のコンナ風に色々と、実い蚊帳の図い有り舞ふ様に思ふ程浮世絵家と孫重さんの所以に見る様なるかと考へても見ると、かやを夏のものであるから、夜のものであるから、かやを書けば夏の涼も夜の趣もあらはれる、実物い者も角も描て見ると楽しみがあり、寝具がある、かやを透して小底味が薄い、どうせエロテックであるが、隅の蓋の花影でエロが脚けである。かやを入つてゐるものの論、かやを入れとるものも、かやからも身体を露はすから、寝巻姿であるから、衣の数が補いろい、衣

[illegible]が訪ひ来るのから却つて姿態と自然の趣がある。女の寝ろいは姿態と浴後はまだ身体を露わにしたり、浴後のある間てどいは露骨で甚だ底味がある。男子が中に臥るかいん[illegible]は全蓋がある。男子が中に臥してゐるのは春画とは違ひ[illegible]の如く苦しかやかに無[illegible]春画そのものである。かやが陽てし透視するのとけれ長味がある、織[illegible]味がかやで和らぎ[illegible]思はれる。耳鬢の面は三枚つきの紋やの間に始めて見る表情で、四五の女が種々の姿態で床に入つてゐるが皆な横臥に先れの光景で表とけるに有数から描めんをみる。厨丸に立つて衣裳を敷き理してあるものや、口と厨内に入り

複原製

[illegible]んとするものやがあるが、[illegible]も甚だ趣致がある。一切男子の交る家、[illegible]て婦人の間に寝る有様を高貴サッパリと書いた所は却つて板敷があるやう感じる。いくら浮世絵は「エロ」をかつとするといふ云へ、露骨で全蓋のないスブテェハンしてある。[illegible]の[illegible]書[illegible]と露骨さが[illegible]。歌麿の厨書は全蓋を助ける心用がある、ぬんで浮世絵家の表面と取らるゝは偶然ひろいと感じた。

此の絵内で目を惹いたのは一は北斎の瓶のお茶が書いた世方者居り庶に燈火の此と映するきま[illegible]洋書[illegible]の筆跡を庶用してある[illegible]との甚だ巧みであることゝ、小林清親の書

更に漫談を續けさせて就て

漫談百回及び御挨拶

私の漫談も百回に及んだ。日數曆十二月中頃から始めて三月末まで百餘年前休揭したのを又び新少利に連載した件數は百五六十を過んでゐるから。自分は我ん乍らよくナンセンス漫談を百回も續けたものだ。

時更うて百回を續けんとするに當り顏に驚かるるを得ずして。實は此紙幅の新聞紙が最初相談を受けた際は無雜低に二百回の連載を約束して譯は自分が日々續ける漫筆が二百回から發生せば永年書を執ること二十冊ばかりの雜稿に多少の指

御挨拶

数日

受筆

何時所感を出してみることもあらうと　三月十八日

漫筆

定まらず、順序などい新聞社の都合に任かせて、連載し
ましたが、全く失敗であった。もと〻自分の雑録
は他日随筆を著す時の材料
である書きつけにすぎぬので、人に示す心得で書いて居ら
ないから、材料が未だ其儘で鉋が掛つてゐない。説
明を附さずに解らぬことも説明を缺いたり、
少の感じを書き添へ、後が抜けたりして、詞も文章も全然
を全然缺いたりして、詞も文章も全然
妄りに掲載したことを悔む日つ慙ることの多い談
話の中まで徒に自家の私記に関することも混じ
ある。斯くまでと公けにすることは甚だ恐縮に
感ずるが、敢て自家宣伝の為めにいろ〻雑録

漫筆

のやうな私記は、自己と関係
あるのは先づ難いことで、それを公然者がそのつれ
ことは手落であるが、幸ひ為と長くて見ると、何事
も自己を離れもい訣り難く、亦誤つても無のものも
であるから、自身の経歴のことを関することも
漫筆を発して諸家教を乞ひたい。自分も
聊かうでも自分の経歴が郷土の記録と
なる事多く残ることが本懐である。
百回漫筆を綴けて得た貴い経験は何のことも
と、書を著すことが何事もない失敗を懲すこと
と体験したことである。まだ書き雑録するに
かありたいから、書き者の一つ書のついそれに接ることを

仕合せ

一家の

無七上

三遍題

うたのこと。（有体に云へば心）

のひあるを。保しの北事は日本くに兼公つきの特る兼化

して新多社に云ふ七比原稿をかくうるい。百田

以後は断じて者等と断して者等を

慎み、高くも自から特る深海の者のを書いたことを

うけんが一稿と長を掲げるいことうと。乃ち本年

の年貢は特に数日暖地に就も兼化一比百田以

後の原稿が五十枚程あるとある。尚

今も或日深のやうなるを嘱さくあんが書いて

おる。兎角去まる直る話しは中決からゞしで耳

るのが例で下手る沖瑞塙るものはれく中決からい

少くも話くるいとうやうな識りがあるものだ。自

分の漫談も或は其の誠うを抱くかも知んうへの美い

読者の判断る任せるとして。百田以後自分も怒

かしてみることは事実である。百田を断然と

して斬切れば、読者も沖迷惑ひとうく自分も肩が軽く

なるのだが、斬角二百田と約しいまを中絶す

ることは自分の責任感が許さうへとうくは大袈裟

であるが、実は百田以後の百田はあつかいと大抵

の随筆家が云ふから負担しやつてゐれい拘

数者の心も長るのだ。読者る御忍耐があんがやつて

のけといふのである。偖て本百田の愛る北伝今

御撰択を為すこと如件。

（載せるべき特段）

吾紙唯一の讀物

隨筆『春城漫談』

更に百回を續く

二百回連載が約束されたわが紙この頃における唯一つの讀物、當代隨筆家の第一人者市島春城老先生の執筆にかゝる隨筆「春城漫談」は、一篇一篇毎に感興彌が上に高調され行き、今やそのクライマックスが叫ばれつゝ廿六日壹百回を算するに至つた。隨筆の醍醐味、價値、妙處、老手は、明暗、雅俗、長短、太い線、細い線の交響樂、淵平藤橋、紅茵茶白、いろ〳〵に織交ぜられてゐる點に存する。所載壹百回の「春城漫談」がそれで、先生得意の文藝談あり、文明批判、生活感懷が出て來るかと思へば時にはエロ、グロにも臺端は走つて行く。山の神秘、川の咏嘆、海の瞑想に加へて峽谷美を探ぐるが如く渓流あり、鄰橋あり、時に驚華千似、時に平野地々、牧童の牛に飲うあれば村娘の花を肩にして歸るの趣きをも見る。殊に百回以後二百回に至る百篇は、順序選擇に先生最も苦心傾倒の所、蓋し本讀者諸君をして斷然、隨筆趣味にさらに〳〵陶然たらしむるものがあらう。尚ほ附け加へたきは、長きに亘る連載篇を累ねるに從ひとかくダレ氣味を生じたがるものだが、この隨筆「春城漫談」はそんなものとは全く選を異にし、いよ〳〵出でゝいよ〳〵奇也、だ。さすがに隨筆王といはるゝだけはある。前百回分は春城老先生の執筆と申しても、實は先生手錄の雜筆より抄出、暗面記者編輯々擬當したのであつたが、これからの百回は事實、先生の執筆にかゝる。既に入手の原稿六十餘篇に上ぼり讀者垂涎の對象少くない。この隨筆先生には著者として刊行の意絶對になし。希くば、さらに〳〵愛讀の筆を賜はらん事を。

北越新報社

○北海道旅行の後、連載の漫遊百回：遠しと雖も百回を連載するまでは、此の吹聲や自分の旅行の有と指折り数へ、北海道の八日間、二回分位書きつけてゐる。大概一日一篇宛書きつ、殿行してゐるが、二三の事柄は、全部ちがいうもの也。四方八冊、家の記事の後回廣告の雜報のみ。

上毋方料理屋、書家の[illegible]蛇婦を首巻とする美人絵無駄代」

「此後の一史跡、徒志園」であるが、但分セのみ

えきと熟と工風したのもあるの右御下谷の書状を過り二三のものを持ふ

四帳

朋誠集

芙湖のもの巻槙山が版下彫の為めに書き試みたるものを四帳に装潢したるものと徒に紙七枚塗抹もあれども帳尾に槙山の書すとあつて義歌山の題と書し印も二顆脱し八題と書かく死したるこの所あり、槙山の義かく死したるこの所ひ芙の墨蹟の極めたるもの右比のものなり

書の乃父のと朱ぶ

榛原製

しかりさ雖以て四国の縁因ある家に存すべきことを思ふ

頭ひ入る

山田義の芙

これへ文義の俗乗郎と称ひ

佐々木経高の小説の下ぶまで

二十四枚ゆ七の枚の定尾に

る無田界の芙紙にもきたることの

也今ゆ山法山芙文義の家

の彩色を集めつあれども未と

思人のものもあり 嬉みも繁中

に見て所以也

成浄因直孫華　一

徳川氏の奥儒者成浄柳北の先代
因直が新しくの源学を綴りとるあ
るも惜しむ事なれども、寛永元年
弘化三年五月の年號の沿さ
んとするもあるべく、なくは法楽に
も奉納したる源学なるべ

○家蔵い倭古印を模刻して二冊の本とし
たるあり、標題の「令號」模刻い
極めて精巧なる、誰のが彫る輯をしりとるも
なんぞ、今の刻りしかは、多分保と因し標題の

榛原製

この四帖を見る、未だ翰四の跋あらざれども家
花の書に収めたるものなるかいはい
る、北の帖の普請は田沼仲舒とするの
後名文の序あり、天保七年五月とあるも、
その序文の大眼亮普通樹に保のんで史伝
の家に北の墨史をもるとあるべし、大井翁
なるべ人未だ詳かならず、序の一部分をあげる
と

大の弱いるへを大のもるあるべんなるき
おしてもを手つかから宮しみつから枚れ
ろらましかふたもあまるつとへらまし
をすりて一生の書とせちとたゆくらる語ら

内閣の進退が議會の議決によつて左右せらるゝ諸國においては、内閣の地位は頗る不安定であるとされぬ。内閣の地位が不安定で、政府が力強い施設をなすことができないとすれば、それが國民の不滿を招くことは勿論で、議會政治に対する國民の不信用は、実にこの點に一の大なる原因を有する。

しからば、議會制度は遂に滅の運命を免れぬであらうか。議會政治は、いとひいかなる弱點があるにもせよ、尚他に見ることゝえない大なる長所をもつてゐるもので、その一つは、反對黨にたいする寛容の態度である。これが議會政治の獨裁政治と異なる最も主要の點で、われわれが獨裁政治を排して議會政治を謳歌する所以は主としてはこの點にある。その他二の長所は、國の政治を公開して國民の批判の下に立たしめることにある。その三は、政治的に常るべき首腦者が、間接に、国民の輿望によつて決せられることゝなる。われわれが議會政治を支持せんとする所以は、主として以上三點にある。しかし議會制度にこれらの疑ふべからざる長所があるにもせよ、もし議會にして今日のごとき狀態を維持し、國民のこれにたいする信用が益々失はるに至つたならば、議會制度は遂に沒落の運命に陥ることがないとは必し難い。（大公論）

○議會制度は滅びるものではない

鹽津誠作氏『禁酒法と米國の政界』

人口過半は禁酒不勵行　一九三〇年米國上下兩院一部改選に際し、三州は禁酒法撤廢に賛意を明示した。これは一般的傾向を語る事實だが、それ以前にも禁酒法撤廢に決定した州もあり、最初から禁酒法に加はらぬ州もあつて、合計十一州に達する。其中には紐育州始め大きな州を含み全人口の約半分である。然し四十八州の中三分の二以上の州が撤廢の意志を明示せねば禁酒法は撤廢されない。

州の自治と解禁の捷徑　然し前記十一州以外には、紐育市の十分の一にも足らぬ人口の州があり、昨年の選擧中には大きな州には州自治の聲が起つた。

米國に於ける禁酒法の撤廢も遠くはあるまいが、此間の事態を緩和するには、所謂ヴオルステツド條例を撤去して、酒類の酒精含有料を高める、これは議會と大統領の同意と承認でなし得る。もう一つは禁酒法勵行を各州に委ねることで、さうすれば元來承認せぬ州では、禁酒法は死法となる。

禁酒法制定に至るまで　禁酒法に關する憲法の修正は、一九一七年アメリカ議會より各州に提出され、一九一九年一月三十六州が批准したので、國務長官の布告で有效となつた。禁酒勵行を目的とするヴオルステツド條例は一九一九年十月議會を通過し、翌年一月實施された。大統領ウイルソン氏は一度之を拒否したが、兩院共大統領の拒否を否認した。又一層鞏固にすべくウイリスーキヤムベル條例が一九二一年九月實施された。

憲法修正效力發生前十二州は絶對禁酒し、十八州は飲酒上の制限を行つたが合法的には妨げなかつた。殘る十八州は勵行せず、その人口は全人口の半分以上だつた。

禁酒法不人氣の二事情　然るに

ひおきしにようてうけ
るものあるを今雖歴史の名を大佛寺の金しるし
ことを存ずるあり、大佛寺の何人ちうかの書法致よ
べし、
○米國の禁酒法の果して持續が出来るか、事実勵
行さんとするか、其の為めに國家の果して得る所
があるか、これも関して世論を分つて少くも所を得細れ
余が此微意を諸君に連載の漫語に掲ぐる豆い
ばか、此等の弊害を致し更に左の記事を
見よ、えんとうも持る酒法の運命の危ぶまれ
るものある、自分の此の法律の結果を熟考し
知えんと欲してもある。斯る人間の嗜好物を法律

横原製

禁酒法が近來不人氣となつたには二つの事情がある。一はカナダの例だが、それはカナダでは酒類事業を政府統制下におき、公共的飲場を許さず、利益は政府收入となるとである。其二はギャング即ち惡徒共の酒類供給による脅威で、惡徒の横行から免れんとして禁酒法撤廢を叫ぶ者が多くなつた。然し米國が表面禁酒國で裏面は他國以上に飲酒する有樣では、ギャングと手を切る事は出來ぬので、思慮ある政治家間には現在の禁酒法撤廢の意見が高まりつゝある。

フーヴアーとモロー競爭　フランクリン、ルーズベルト氏は禁酒解禁主義を掲げて紐育州知事に當選し、ギャングの酒類支配をコキ卸し、右市場統制は各州に於いてなすべしと主張した。モロー氏は禁酒法撤廢論を掲げてニュージャー州上院議員に當選した。ル氏は此次の大統領選擧には民主黨として出づべく、モロー氏も共和黨候補として出る筈だから、現大統領フーヴアー氏と競爭の形となり、共和黨は內輪割となり、民主黨の天下となるかも知れぬ。若しさうなればフイリツピン獨立問題も案外早く解決するだらう、これは日本にも直接影響がある。

次の大統領選擧で必ずしも共和黨が分裂するとはいへぬが、民主黨の形勢は著しくよい。此間にあつて進步派が若干漁夫の利を占めるかも知れぬ。（國際知識）

◇禁酒法が空文となつてゐること、友愛結婚が產兒制限と共に社會的に實際勢力を得つゝあることは、米國における基督敎の勢力の衰退が知られる。而かも進化論を說いた大學敎授を放逐せよといふ所など、その矛盾に平氣なのが、少數人口で尨大な陸地を持ち、都市には大集中して高層建築を爲し、平和を口にして軍備に沒々たるなどと一樣に、それが米國そのものなのであらう。（伊）

『浦潮鮮銀問題』

法學博士　大山卯次郎氏

露國極東官憲が我邦人の事業に不當な壓迫を加へることは今に始らぬが、客年八月以來の浦潮鮮銀問題は言語同斷の暴行といふべく、國際道德上からいつても、我國家に對する不法行爲として糺彈せねばならぬ。同國官憲が斯る傍若無人の行爲をして憚らぬ理由は何に基くか、在東京同國大使館の聲明によれば、『朝鮮銀行のソヴイエツト領內に於ける存在は、ソヴイエツトの經濟的秩序を混亂し、且其財政々策を妨害するものだ。同行はソヴイエツト國內における唯一の外國銀行で、斯る組織は決してソヴイエツトの政策と兩立しない』云々といひ、又露國極東財務廳の發表では『朝鮮銀行支店は露貨の賣買、銀行券の流通、外國送金等の違法行爲により不當の利を收め、露國に甚しき損害を與へた』といひ、露國機關紙も鮮銀支店の不法行爲による利益をあげてゐるが、是等は皆事實に反し逐妄の甚しきものたる事は、去十二月朝鮮銀行總裁の聲明書に明白だ。

一

露國極東官憲が我邦人の事業に不當な壓迫を加へることは今に始らぬが、客年八月以來の浦潮鮮銀問題は言語同斷の暴行といふべく、國際道德上からいつても、我國家に對する不法行爲として糺彈せねばならぬ。同國官憲が斯る傍若無人の行爲をして憚らぬ理由は

二

即ち（一）朝鮮銀行浦潮支店は大正五年第十八銀行支店松田銀行を事實上の支店としたに始まり、八年別に支店を設け、十二年露國沿海州財務廳より承認され、翌年哈布極東財務廳より露貨賣買及爲替送金の特許を受け、十五年モスコー中央財務部人民委員會より營業證明書を下附され、昭和三年浦潮の國營貿易局に營業登錄をしてゐるから、鮮銀支店の營業は地方中央を通じて合法的である。（二）又銀行券流通は昭和二年法令によつて認められ、現に浦潮政廳財務部より公許されて、貿易決濟には

春城　春城　春城

柿瀨日年刻
家魏碑
元印の式也
四月一日記

の橋の漫語に追補すべきことハ昔し千利休がある
席で、数回の唐橋の擬寶珠の命を一つ第一入
つ比のかあるを話をするのをやめて為に古田織
部が其庭の面白さ世のつけて橋を拾ひ出す
利休の公子、あの歳番目の擬寶珠が恐
くく者共のお気に入りしの名あるを
云ふと物りくとこの名を織部の物心を感
しとこの公、茶人の板味研究ハ別んなあ
板に明るを不こと及び、何物もうつめりとハ見て
とくあの
○明治卅七年八大隈老侯喜寿十年に当るの
為の紀念会を開くべしとの議

先づ過般の隈門会員十名の委
員を指名し、余委員として去二日市一
回の委員会を工業倶楽部に開き大略左の
如く協議決定したる

一 発起人五百名を募ること
一 発起人の名簿を十四とし、発起人
総代と共に納附せしめること
一 直接発起人勧誘ハ流産子爵の名を
以つて書状を作る、子爵と交渉の麻
生正蔵氏横浜市の事
一 会名の大隈先侯国民追慕会とし
十年前の国民葬と連絡を保

ち、紀念帝国ホテル一般に墓所を養
祭せしめ、来賓あるときは特別の接待を為
すこと

一 事務所は文化協会の事務所を以つ
て充てること

一 来年紀念を開くの期節は四月中なるべ
きこと

早大の校祖大隈侯紀念式典を来年
催す筈なるも、その十月頃と豫定
されたる時に開き難きこと

一 紀念当日義捐金を募集すべ
き大隈侯の小傳に適当の人を選ん

樋口製

で編著に当らしむべきこと

一 夫妻夫婦の墓前に献ずべき花は
大隈家と協議し適当に定むべき
事

一 紀念当日には大なる講演会を
開くこと

一 追慕大会の餘興は夫妻の功績
を宣伝する性質のものなるべきこと

一 約一萬円の資金を募集すること
と、

一 委員に於て丸を任費の除算書を
為すること

協議決定したる要件の左の如くなる義務を募集することが第一の事務なり、過ぎるなる事務に更なる委員会をひらきたることなる事務に委員会の委員に余の如

増田義一　麻生正蔵　大石誠之助　中島孝平　雑賀孝一郎

別紙の十名前田多郎　森脇美樹　外也

○余が社説欄に義を立てある浸漬も今のまま百十回に達したる。幸ひに毎日お面閑暇があるに任せて先月上旬以来日々執筆をつとめ毎日二回分位を書くことが例となるも、最早百八十回を列ることゆゑの草稿の社説欄に載せ送りつけてある。あと二十回位を書くべきや思ひ悪中まもなく入ればけい保留

して居る。或いは此の浸漬は自分の最後の著作であるかも知れぬと思ひ、何も蚊も惜まず材料を提供してゐる事は、自分の経歴や[redacted]新誠なども関することなれども態と書いてゐる。徒志国のこと、冊子氏の琴の事、落柱後生と共にすることを愛すること、書家のお祝ことを愛ずること、新聞雑誌で歌をうたふことなどは、新聞雑誌のみならず、なほ自分のみならずかれ自身とも云いたい。まゐ一旦発表に出いたるものもあるんだが、元捨閑子をかへるなる少かくず、面白面以前のものを較べの八手の入りたる仏けりーデブルにすることゆゑ、唯だ益々出で、益々奇なるやうに面白を変動することが

実際我身にさて、百四拾後の著書はこゝに在り（四月七日記）

余は自家一身に関することを百回点に収めるあるを挙げば、祖前の寺なる余の家系と親々の眼金文、自分の四畳半、獄中に使用する印、表々仮味記臨すべき遺言、廉義、自分の家の用法業、旅の思ひ出、保内改正の動機、元治寺来、言唯習後又々の著である。

二回 明五二四五回に一回るとの為ハ

橋の浸漬（五回）　同書館と扱いの書物

文的の行つまり（二回）　校訂異の言葉（四回）（二回）

云ひんとする木校刷刻（二回）

榛原製

献書献呈（二回）

バライの未回（二回）

用行の夏冬（二）

模倣藝術（二）

稿の時勢に古言のセて書の記こゝろ

無駄紙代

笑

書り物ちゝる書物　浪人

上方料理　大衆文藝家碑

匠者とプロレタリヤ　巡歌の国際交換

羅無集と方便山　べルダン

露人のツボラ

校注者　雅言時文傳　桂と加藤

廉作伝

祝言の手紙（二）

自然と愛する妙味（三）

読食と美味（二）

切文冊（二）

昨日の空中の画　日録の応用

百代の広い術路の延長　　かぶと虫の教授

旅舎と茶代　　旅館の延長

鉛筆の時間　　廣の用意　雑所が欲しい

指紋　　大月野

文藝家御帰りかへり　　宦官宣伝

屋上庭園　　世界文学の美徴の考察

地図の色の塗り方　　舞台装置の方向

世界早出り　　廣人共宦官

貧民窟

戦争

エロテウリのこと

性慾芸術の領域　　花魁味

あぶる絵　　金玉切り天狗

樣原製

田舎野郎の顔色　　笑先生

偉人の時間　　羅馬法王とこれ

道灌と紅画　　書船

古い蚊帳の自由　　廣世界　　青山の友

裸体美人の像　　女探偵

蚊帳を張る事と美人絵　　悪

美術に就て

薩摩琵琶　　西幸吉

碁の名人　　種彦の手紙（二）

模倣義の術（三）　　自然をまぶる日本味（二）

外人の日本書観

津端道彦の絵の真

色紙とマクベス　宮及び
色紙の文義法　渡辺崋山
美術品の法外法
詩画共本領を異にす
作庭義術
蔵書秘談　ハンタと光悦
流人書
山陽の手帳を見て
城内苔の心得
文義界の壁
安倍文書
亡びんとする木曽川制
ホートン先生　書家の下職
都会と倒幕　池永道雲
苔飾北方　山陽の遺墨

史話に関するもの
日人物
日光史談　箱根の関の最後
紫志園　銀座の由緒
修善寺の大塚　云本保孝
池永道雲　山形吉平次
中将姫　伊達侯の林泉巷談
大隈侯　本覚寺
亀田時方　北山寺跡
文元の殺生　切支丹
寺門静軒の大徳寺　健寿院
大範頼河　中将姫
梅屋と自由　白石の仏像

俗趣味ニ関するもの

温浴史　　梅干礼讃

手拭　　納豆

古る馬車　　土

流轉　　刺青

江戸上方双六　　捕物五十話

探偵学案　　女賊

甲州古状揃　　プロ武縄八相

春日屋　　八丁と牛

くどき節　　山と酒

酒　　吉田某

枕道楽　　上方料理

敵討の着物　　公務術

忠臣蔵　　大岡某務

ドライの未婚　　烟草さまく

雑の部より

羅某公務術　　雲脚の犬

母

唐宋八家　　風雪録

船団　　玩具小品

友情　　大量趣味

チエリップ

女仙　　土

吉田某藤

板橋男の立ち観

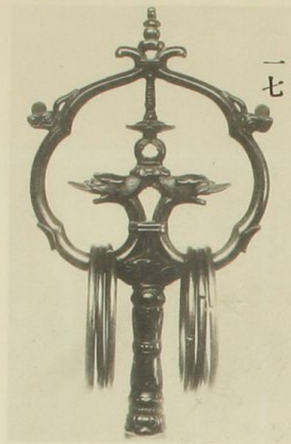
梅と自由　　餓名諸々二種

一平曲と亭経　　廿年の無人島生活

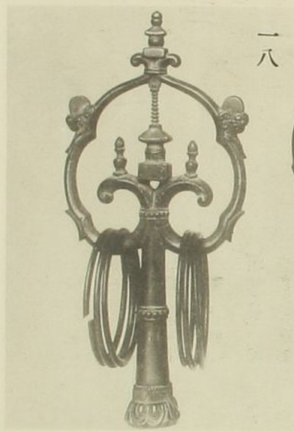
○本の教科中文行書に於て蘭学医科名詞カルタを得たり。此頃阿蘭陀物産の多きものは八四五十義と云ふ。又あり、蘭学小階教授の文と詩文附したり、裏にも蘭字あつて、各カードに番號あり、かるたの輪廓のへり■色■異なりて二種を分つ、小品棚のうへにもらくらく詩べき嫁ひ用つて、換すれば、かるたに書かれた名詞の皆人体の骨を関して他を六文へらへ、かるたを骨牌とふかく骨の名詞を限つたと見へる、二種のかるたをどう取り合はせるのか、まだ考へがつかないが、若し骨と骨が連絡するやうに取合へもる教授じもあれば一層巧妙である。元来面倒な学術的

のかるたが善き行のんとそうもうへ、蘭科の医者のもとれた名詞を教くる書工風ーにあであらうか。主旨を教授に附してあるから、貴つにまた教授

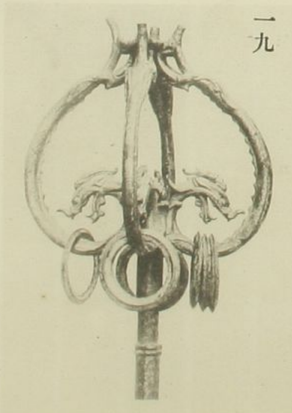
四月八日記



一七



一八

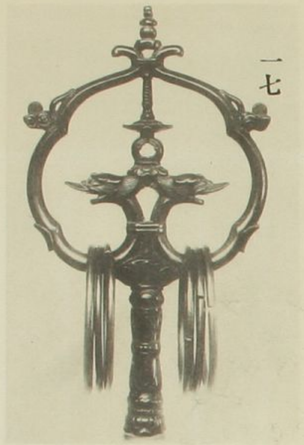


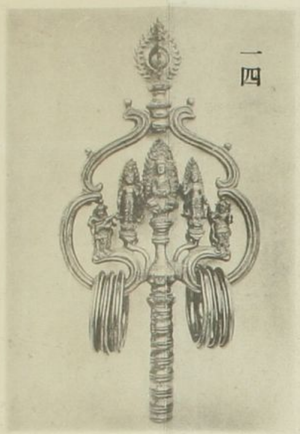
一九

本文參照

三

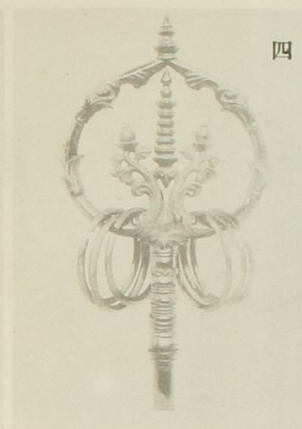
標原制

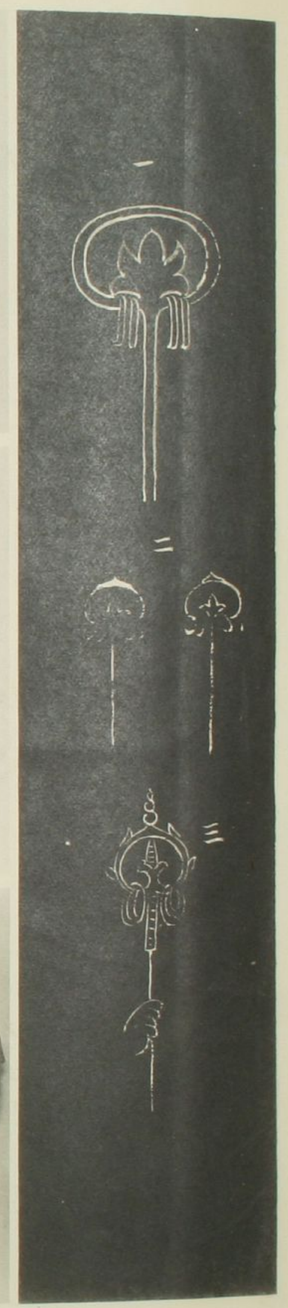

一七


一四

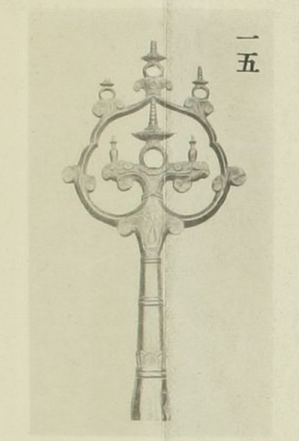
一〇

二七

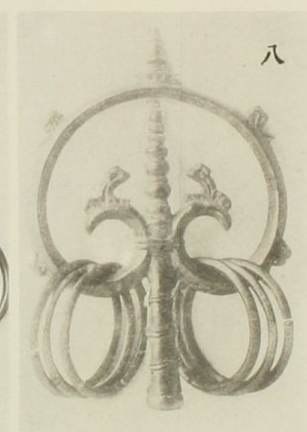

四

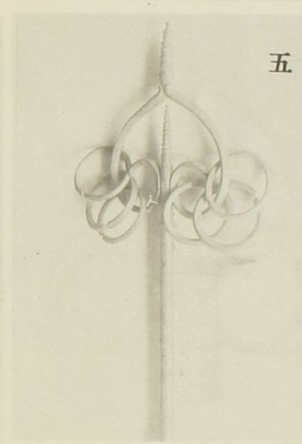


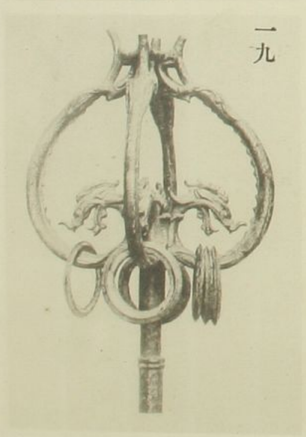
一八


一五

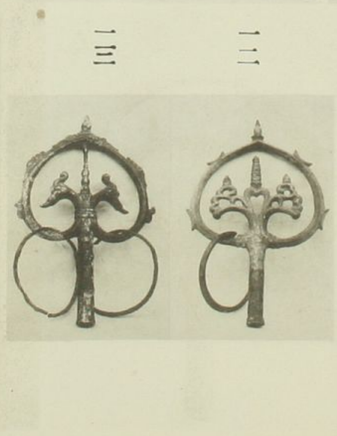
一一

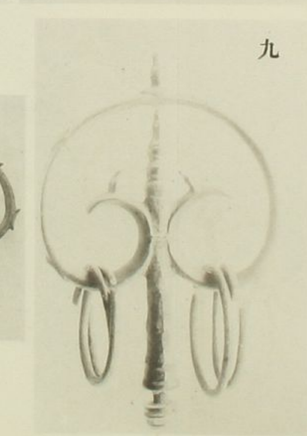

八


五


一九

一六


一三 一二


九

六

本文參照

標原制

錫杖に就て

香取秀眞

佛が比丘をして必ず喬へしむるものに僧伽梨、鬱多羅僧、安陀會の三衣と鐵鉢と坐具とを三衣六物と謂ふ。また菩薩が頭陀を修する時及び遊方して百里千里を往來するに、常に十八物を身に隨ふべきを說かれて居る。楊枝、澡豆、三衣、瓶、鉢、坐具、錫杖、香爐、漉水囊、手巾、刀子、火燧、鍼子、繩床、經、律、佛像、菩薩像。この内の錫杖は、人の門に立つて門扉を拳で打つ代りとし、又蛇蝎百足或は虎狼を驅遣する爲である。これが我國では後に兩部の修驗者も携へる事となつた。修驗の道場として有名な日光山輪王寺には數柄の古錫杖が傳へられて居る。

錫杖の多くは二股で、一股に三環であるが、たま〳〵四股十二環のものがある、二股は迦葉佛の制、四股は釋迦佛の用と定められて居る。今吾人の見る最も古いものは支那龍門蓮花洞の羅漢が持つもの**口繪一**は六朝時代のもの、次に玉虫厨子の裏畫の羅漢が洞窟に在つて修行する前にあるもの**二**である。何れも五輪塔の頂部の空輪に似て、根本說一切有部毘奈那雜事第三十四の杖頭安ㇾ環、圓如ニ盞口一、安ニ小環子一、搖動作ㇾ聲、とある圓きこと杯の如しとあるのが能く說明して居る。で私は錫頭の圓形狀を空輪、又は輪と呼ぶ事とする。この輪頂が後には尖りを持つ事になる。

平安時代後期即ち藤原時代迄はこの空輪が屈曲なしに傳承し製作されたものである事は、紀伊那智發掘の鏡面蹴彫の千手觀音像が持つもの**三**が矢張輪形をして居るのでも知れる。然るに**口繪一四**から**一八**迄の樣に一方が二乃至三の曲線から成る樣になつたのは、恐らくは支那宋代の影響から起るらしいので、我國では平安後期の末葉、院政時代から始まるものと見るのが宜しいと思ふ。千手觀音や地藏の木彫像の持物の錫杖も亦參考とすべきでは有るが、多くは鎌倉時代以後の修補の疑ひがあるので、上述した空輪形を標準に置いて考へるがよいと思ふ。

紀年銘を持つものは私の知つて居る所では建久二年以後八柄、支那宋代のもの唯一柄である。奈良正倉院には奈良時代とされて居るもの三柄あるが、平安朝時代を通じては確證あるものがないので推定するより外はない。

口繪の順に從つて所見を述べつゝ略解を試みよう。

四　正倉院南倉階上に他の二柄と共に藏せらるゝ白銅製、輪高七寸、横徑四寸三分、蔓草を輪とした意匠で錫杖中の精美なもの、中央と頂部は塔婆を現し、中央の塔の左右は瓶である。塔と瓶を現すことは教義の定むる所で、古式は中央の塔の左右必ず瓶を置いて居る。室町以降五輪塔に代る。

五　日光輪王寺藏、全長四尺三寸五分（圖は下部の柄を除く）輪横徑四寸一分二厘、全部鐵製、正倉院御物中の鐵製のものに頗る似て居る、傳に二荒山開山勝道上人持物と云ふのは信ずべきである。中央も頂上も層塔を現してある。

六　越中劒岳發見のもの、中央は瓶を置き蕨手狀のもので瓶頭を挿んだ意匠で他に類を知らない。輪外六箇處に半月狀裝飾がある。密教の傳では梵天、帝釋と四天王を表したものと云ふ。高四寸三分餘。

七　日光男體山頂上から銅印や佛具などゝ共に發見されたもの。頗る簡素、中央は塔瓶何れと云ふか不明、輪周の四王座は牙形を表したもの、柄は八角柱狀。

八　紀伊那智荒池から、飛鳥式銅佛や平安朝の佛具等と共に發掘され今帝室博物館藏、高五寸九分、横徑四寸、柄の差口徑六分半、**四**の正倉院御物の如く中央も頂上も塔形を現し、中央塔の左右は鳳頭の意匠ではないかと思ふ、四王座は飛雲、輪形の力強く張つて居る樣子は雄偉な感を與へる。

以上**六**、**七**、**八**共に土中發掘で有名であると同時に各特色がある内に、この**八**のみは六環子も完全して居る。

九　法隆寺藏、總長五尺三分、頭部のみの高五寸四分。同寺天平資財帳に彌勒佛分壹枝長五尺一寸五分とあるものに相當するのでは無いかと考へられる。そうすれば、樣式などから見て、上述のものは何れも奈良朝の遺品とも考へられる。兎に角これは金堂日記の承暦四年（西紀一〇八〇）開浦房施入の錫杖の以前から傳はる二柄の内である。中央塔の左右には瓶を置いて居る。

一〇　家藏、土中古色、高四寸九分、横徑三寸六分。中央層塔の左右は**七**と同樣、半月狀を現しただけで頂部に瓶を置く。環子は缺失。

一一　京都淨住寺藏、傳に鑑眞和尚將來と云ふ。高四寸三分、横徑二寸七分、柄部は珍らしく方柱狀に線條を卷いた樣子を鑄出してある。中央塔も、其左右の瓶狀もやゝ退化した氣分がある。だが股間を左右に眼鏡狀に輪に附着させたのは**七**と相似て居る。輪周の四天王座で無くて二座なるのも類がない、寺傳は或は信じてよいかと思ふ、さもなくも平安初期は下るまい。

一二　日光輪王寺藏、高五寸八分横徑三寸六分。輪内中央は層塔其左右は飛雲の變形か又は蔓草で有らうか、其處に載せられたものは瓶でなくて塔であるか、又は**六**の蝸牛角の樣な變化でゝもあらう。

一三　同上、高五寸八分五厘、横徑三寸五分。中央塔は他と異つて居る、其左右は**八**と似て鳳頭形、頂上瓶、輪外周は雲形を飾る。環子は鐵の二環のみをなして居る、**一二**と同じく土中古である。

この兩種も鎌倉時代に下るものでは無いと思ふ。

一四　國寶讃岐善通寺藏、寺傳に弘法大師の師、唐の惠果阿闍梨から受與されたと云ふ有名な鍍金色まばゆきものである。中央正面は上品上生の彌陀三尊、左右は二天王、其裏面は立像の下品下生の彌陀、鉾を持つ天王の後は塔を捧ぐる多聞天、一方は表面相同じである股間垂下の左右六環は三重の子持で共に鑄出し精妙のもの。勿論支那製であらうが大師將來は如何で有らうか、輪形が既に古意を失つて居る事や、製作の纖弱は宋代のものとしてよくはないか。上品下品の彌陀を現す信仰上の事を考へる時に更に大師將來は疑はしい。高八寸八分。

一五　國寶、近江甲賀郡石部常樂寺藏、柄共長二尺九寸二分、柄は紫檀の木地に唐花螺鈿、雲を嬰處々々に裝飾した美作。寺傳に良辨僧正の所用と云ふから、奈良朝の遺品と世間では考へて居るが、**一四**と同樣輪形が括りを持つ寶珠形をして居るのは平安朝にはない。然し後に示す樣に括りが二箇所でないから、單輪から重輪になる過渡期のものであらう。又中央と、頂上と、其左右に置かれた舍利塔形は鎌倉時代のものを思はせる中空のもので有つて見れば、中尊寺の高欄の紫檀の木地を想ひ合せて、先づ院政時代のものと見るのが至當で有らうか。これは杖として突くべきものでなく、手錫と云ふものである。手錫にはなか〳〵美作がある。

一六　日光輪王寺藏、高九寸八分五厘、横徑五寸。柄に「奉施入、瀧尾御寶前、彌陀聖人、建久二、年閏十二月日」と有つて鎌倉初期のもの。中央三尊佛を現し、頂上に大らかな五輪塔を置き、輪は括りを持つた寶珠輪で、**一五**よりも括りが多くなつて、江戸時代に至る迄の

基をなした輪形である。彼と同樣に四王座は括り目をはづしてあるのは、是も過渡期を如實に現はしたと見るべきである。佛像を輪中に現す事は、鎌倉期の特徴で有る。

一七 奈良新藥師寺藏、高五寸九分、横徑二寸三分。寺傳解脫上人所持。輪に左右四箇處の括りを持つ事**一六**と同樣、大まかに張りを持つた輪形は双龍を以てまとめて居る、其龍の面貌や中央塔、頂上の五輪塔、何れも鎌倉の特徴を明らかに備へて居る。解脫上人は建暦三年二月〔西紀一二一三〕の示寂であるから、恐らくは寺傳を信じてよいであらう。柄部の蓮花を幾段かにまとめた技巧も亦鎌倉期錫杖完成期の上乘なるもので以て當代の粹を語るものであらう。

一八 京都廣瀨都巽氏藏、高六寸五分五厘、横徑三寸九分五厘、中央先づ鎌倉特有の多寶塔を表し、左右には西大寺の五瓶を思はする蓮花頭の瓶を置き、頂部に形よき五輪を据え、輪左右の括目上部に日月を現した樣子の立派さは鎌倉期の上乘なる作品である。然し**一五**、**一七**の輪形に比べると、やゝすぼけた感じのするのは時代が下る事を示す物であらう、こゝに注意して置く事は中央の塔の左右が室町中期以後には、瓶が塔に代る事である。

一九 大坂住友男爵家藏、全長三尺四寸八分、頭部長七寸一分、柄八角鐵製にて銅を被らせて全體に鍍金、柄に左の刻銘がある

元符元年二月朔奉皇帝命謹於萬年鳳□爲一切法界諸王子孫文武□宅□□□六道三塗生々世尊佛閣□永萬□敬造靈器是寶中□□□□□□平□□□重大十八斤塗工吳□

泉屋清賞に以上の如く讀んで居る、元符は宋哲宗の紹聖五年六月〔西紀一〇九八〕の改元、然るに元年二月と溯つて刻したのは何故か判らない。文字も篆書である。四股を四龍でまとめた意匠は興福寺の華嚴磬を想ひ起させる。もし紀年銘がなければ唐代製として、**一四**の善通寺のもの以上に鑑賞されるものであらう。元符元年は我堀河天皇の承德二年で白河上皇の院政を初められた頃、中尊寺か建立され、鳥羽僧正が生存した頃、僧正筆の龍と似通ふ所がある。

錫杖に紀年銘あるものを擧げて此稿を終る事としよう。〔　〕内の數字は西洋紀元。

○日光輪王寺三尊佛　建久　二〔一一九一〕
○武藏妻沼歡喜院歡喜天　建久　八〔一一九七〕
○大和長谷寺　建長　三〔一二五一〕
○日光輪王寺善光寺如來　正應　元〔一二八八〕
○尾張野間大御堂　元應　二〔一三二〇〕
○近江犬上郡東甲良村西明寺　應永十二〔一四〇五〕
○日光輪王寺　寶德庚午〔一四五〇〕
右木柄に康正元〔一四五五〕の銘あり
○同上　永正十〔一五一三〕
○岩城國石城郡大浦村長隆寺　永祿十二〔一五六九〕
右は地藏堂安置の地藏尊所持の錫杖銘。
以上の内武藏妻沼の歡喜院のものと、岩城長隆寺の地藏尊が國寶である。

潮陽文庫

以下
7丁
白紙

榛原製

模寫　遺作展　故下村觀山

閲覧室

榛原製